

巻頭言

会長 木村高久

「宿とりて 月にも遊び 紅葉狩」（上林白草居）との句がありますが、これからは紅葉を楽しむ季節です。しかし、新型コロナウイルスに気持ちが悪われてしまい自然の美しさを愛でることを忘れてしまいそうです。

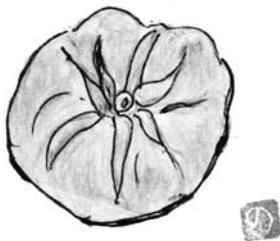
さて、現在（令和2年9月29日）の新型コロナウイルス感染者数は国内で累計8万3019人、死者1568人です。また、世界では累計3300万人超、死者は100万人を超えました。そして今も感染者は発生しています。この様な状況下ではありますが、感染予防と経済活動の共生が大切との観点から自粛が緩和されています。「GOTTOトラベル」・「GOTTOイート」などがその例です。これはやむを得ないかと思えます。

ところで、自粛生活はストレスが溜まるし厳しい面がありますが、負の面だけではありません。従来多忙などから顧みられなかったことに挑戦することが出来たこともあります。例えば部屋の片づけ、掃除、室内での運動、読書、日記やエンディングノートを書くなどで、今までと異なる経験を積まれたのではないのでしょうか。

なお、明るい話題としては、治療薬やワクチンの開発・

実用化が来年には可能との報道もあります。希望の灯が見えてきました。我々の我慢ももうすぐ終わるかと思えます。それまでお元気で、楽しくお過ごしください。

本横浜歴史研究会につきましては、2月の定例会以降コロナ対策のため全ての行事を中止してきました。しかし、状況が安定してきた中でマスク着用・手洗い・社会的間隔を取るなどの安全対策を講じて、9月例会を開催いたしました。当日何名御参加頂けるか心配でしたが90余名の方に御出席頂きホッとしました。ろです。引き続き例会は開催していく方針ですが、何か変化がありましたら臨機応変の対応をしております。「GOTTO 横歴」を合言葉に今後もよろしくお願いたします。



俳画・藤盛詔子氏 作

特別寄稿

赤裳瘡流行後の風景 天平の世に教わるもの

松尾光

一、変わり果てた農村

天平七年（七三五）から九年にかけて赤裳瘡と呼ばれた疫病が日本列島を縦断し、あとには累々たる死骸の山が残された。前稿に記したように、死者は平年の六倍から十二・五倍。取りかかっていた戸籍作りを止め、もう一度ゼロから作り直さなければならなかった。

それよりも、農村・漁村を問わず、各村々では多くの人たちが死亡したため、家々は生業の担い手を失った。生活を再建しようにも、その核となるべき働き手がいらない。かりに田植えができてなければ、以後の耕作のしようがなく、収穫は何もない。一年二年と耕作放棄されてしまった田圃の回復は、そうそう簡単でない。草で畦が崩され、溜め池から溢れ出た水で用水溝や取水口が壊され、補修もされない。水田が草原かの区別さえつかなくなった口分田を見て深く絶望し、

挫折感に襲われて不思議でない。

でもこのなかを生き延びるには、ともかく食べなければ、どこから調達しなければ、食料なしには数日も生命がもたないのが人間の定めだ。こうしたときには国家が、日ごろ民に納入させ蓄積してきた国有物資をまず放出すべきだ。民あつてこそ国家だろう。ところがこのとき、地方の正倉に大量に蓄えてあつた租穀は温存され、農民たちの救済に使われなかった。また地元の資産家から拠出させた救急の備えだつたはずの義倉米も、『続日本紀』などによれば開用の指示がまったく出されていない。

お上は何もしないのなら、個人として出来るのは借財の申し込みである。おもに米を貸していたのが私出挙で、年率一〇〇%の民間高利貸である。その阿漕は『日本書紀』下巻第二十二縁で、『日本書紀』下巻第二十二縁で、信濃国の他田舎人蝦夷は「人に貸

し与える時は一把分少なく、徴収する時は一把分多くかかる秤を用いた」と断罪されている。貸すときと返されるときの枡の大きさを変えるような、人の弱みに付け込んで不当な高利をむきぼる奴ほどの時代にもいるようだ。他方でその場凌ぎで借金した人に、期日に返せるような収入のあてなどあつたらうか。でも、返せなければどうなるのか。

ともあれ、荒れてしまった口分田の耕し直しに苦しみ、食にも事欠いた農民たちに、あらたな墾田開発などできよはすまい。

上野誠氏は『日本経済新聞』に「疫病の日本史①歴史の転換点」と題して寄稿され、「疫病と戦争は、歴史をはやく進める。開墾した土地の私財化を認めた『墾田永年私財法』（743年）誕生の背景には、天平時代の天然痘の大流行で食料生産が危機的状況に陥ったことが挙げられる」（令和二年六月二十九日朝刊・四十四面）とされた。説明不足のため、墾田永年私財法が公民の食糧増産・開墾意欲を喚起したかのようにも受け取れるが、食糧増産のために墾田開発に着手するゆとりは、すくなくと

も当時の公民にはなかった。その事情は、後述することしよう。

今日の公的機関の対応もそうだが、政府・自治体が救援の手を差し伸べるとしても、ほんとうに実効性の高い救済策は、返済を要しない給付金（一時・持続化）・義捐金などでない。

経済産業省が発表している六月十五日現在の個人事業主への資金繰り支援の内容は「最大二億円から四千万円まで、三年間無利子。十～二十年間、無担保融資」である。日本政策金融公庫と商工中金等が独占的にしていた融資を最寄りの民間金融機関からもできるようにし、これで多くの業者の営業が継続させられるという心づもりだ。売上が5%以上減少した場合とかの融資条件はあるが、手元資金も底をつき収入が激減した業者にとつて、当面する窮地を現実的に乗り切るために思わず継り付きたくなる大金である。だがよく考えてみれば、古代なら公出挙・私出挙のたぐいであり、これを受ければ莫大な借金を負う。このさき営業が元に戻ったとして、V字回復の黒字化など見込めないし、店の維持費・従業員の給与を引いて、

(2)

自分の生活費を出すのがやっとだろう。それが自己資金の無借金経営だつたのに、これからは四千万円以上の借金の返済義務を負った経営である。でもこれまでの五年でも、四千万円以上の余剰金が出たことなんかあつた。

古代で出挙の返済ができなければ、まず牛・馬など農作業に不可欠な動産が奪われる。田圃はもともと国有地だから所有権の移転はないが、耕作権を奪われる。農村風景や立っている人々の顔は変わらないが、出挙稲の貸主の小作人となつている。あるいは表向きは行方不明の「逃亡」といわれつつ地元有力者や貴族のもとに私民として秘匿される。現代なら、融資をうけた店は安く叩かれて居抜きで店を譲らされたり、オーナー・シェフから雇われシェフになつたり。そうでなければ、破産して禁治産者の宣告を受けなければ、借金生活から逃れられない。要するに班田収授で縮められた社会の経済格差は、ふたたび大きく幅を広げることになつた。

二、天平の「偉業」

律令国家も、人民を救おうとしなかつたわけじゃない。ただ実現

の方法は、人々の期待や思惑をはるかに超えたところに設定された。それは鎮護仏教への過度の傾倒であり、具体的には大仏開眼と国分寺創建だつた。国分寺建立の詔は天平十三年三月二十四日に発せられており、かなり立ち遅れたようだが、じつは起案は早かつた。そう判るのは三月に発せられたはずの詔文中に「今春より已来秋稼に至るまでに」とあり、この詔が天平十三年に書かれたものでないと知られるからだ。この詔文は、従来出してきた命令を纏め、整理したものだった。このはじまりは天平九年三月に出した「国ごとに釈迦佛像一軀・挾侍菩薩二軀を造り、兼ねて大般若経一部を写さしめよ」（『続日本紀』）であり、天平十二年九月の藤原広嗣の軍乱を踏まえ、さらに光明皇后献策の尼寺建設を付け加えて、天平十三年詔として整理された。このように国分寺建立構想は聖武天皇による天然痘対策の自信作だつた。天平九年には大般若経を重視していたが、疫病流行を押しえられなかつたことで効果を疑い、天平十三年段階では国分寺に自筆の金光明最勝王経を納めることに改めて満

を持している。

そしていま一つが、天平十五年十月に呼びかけられた東大寺の大仏造頭である。「仏法の威光と霊力によつて天地の生きとし生けるものすべてが永劫に安泰であるよう、巨大な仏像を造頭してその功德をすべての衆生が受けよう」とし、そのために「菩薩の大願を発して、華嚴世界の中心仏である盧舎那仏の金銅像一軀を造る」（『続日本紀』）と決意を披瀝した。しかもこれを形にするのは天皇にとつたやすいが、それでは心が籠もらないので、みんなの自発的な参加を求めためこの詔を発した、と付け加えた。この大仏は奈良県のいまや世界に誇る歴史遺産で観光の目玉だが、いわば天然痘流行の慰霊塔とか惨禍記念の碑とかいうべきもの。いったい私たちは何を見せ、何に感動させているのか、という思いにかられもする。

それはともあれ、一言でいえば鎮護国家思想の可視化で、これが聖武天皇らが用意した国家として考え抜いた天然痘対策であつた。いまや神仏に祈つてどうにかなることじやないと知っているが、当時の支配者層が考え得た対策としては、

精一杯の行政的努力である。ただ、その実現の仕方とタイミングが悪かつた。

というのも国分寺創建を言い出せば、造営にあたる国司が働かせられるのは年六十日の雑徭（無償労働）。すなわち公民に「個人の農作業より、建築現場での公務が先だ」と命ずることになる。また東大寺大仏造頭はほんらい年十日の歳役（無償労働）によるべきだが、じつさいの労働者は官庁の下働きに徴発されている仕丁と雇役。雇役は公的機関による有償の雇用労働だが、強制的で時を選ばない。農漁村が疲弊して立て直しに苦慮しているときに、「対価は払うから文句をいうな。国家行事を優先していただきます」では、苛政といわれても仕方なからう。だから国分寺創建は遅れに遅れ、奈良時代末までかかつた。その点東大寺大仏事業では、工事促進のため

(3)

に地方有力者・富裕層に目をつけた。彼らの寄付や協力を得るため、政府が代償として発布したのが墾田永年私財法だつた。彼らに墾田私有を許し、付けさせた財力によつて大仏造頭に協力させた。ところが彼らが駆使した開墾の労働力

は、地元公民の和雇だった。和雇は民間の有償労働契約だが、地元ボスの要請は断れない。まだ立ち直れない農村からは、借財で債務奴隷化しつつある人たちが地元顔役の力で応じさせられた和雇が、墾田開発に投入された。

いずれにせよ国家事業の展開と墾田開発の嵐は、農漁村の復興を待たず進んだ。このために社会階層の分解、格差の拡大はもはや押しとどめられなくなった。

新型コロナウイルス肺炎のパンデミックで、世界中の人々と企業が苦しんでいる。このさきどうである新しい社会はでき、経済活動は生き残れる体力と資力にゆとりがあった個人と企業によって担われる。借財まみれで零落した個人資産を安く買い叩き、破綻した企業の隙間を埋め、それらを傘下に収めた大企業が出現する。歴史が教えるのは過度に拡がった格差社会の出現だが、「なせばなるなきねばならぬ何事も ならぬは人のなきぬなりけり」(上杉鷹山)。そうなるかどうかは、ひとえに為政者の手腕にかかっている。賢察・健闘を祈りたい。(早稲田大学エクステンションセンター講師)

コラム 流人からの復活①

芸が身を援けた復活「英一蝶」

江戸時代も流罪は死罪に順ずる刑であった。配流先は江戸から八丈島、中等で三宅島、軽いのは大島、新島などの近場に送られていた。島では牢屋に入ることなく、かなり自由だが生きていくのは厳しく、許されて戻ったとしても、社会的な復活を遂げることは難しかった。

元禄の頃、多賀信香という絵師がいた。この男、ただの絵描きではなく、遊びが大好きで稼いだ金を吉原につき込む。ついでに吉原にきている殿様相手に太鼓持ちまでやってしまう。



また俳句や書道、社会風刺の本を書くなどマルチな才能を披露していた。

ところがこの男には金を生み出す絵の才能があった。江戸からは定期的に絵の注文と画材や資金が送られる。島の有力者も金を払って絵を描いてもらう。流刑地では飢えに苦しむのが当然なのだが、島でも後世「島一蝶」

と呼ばれる作品群を残す。江戸の親族には仕送りをし、島では家を持ち、12年後57歳の時、江戸に戻る。

以後、英一蝶と名乗り深川に住み、円熟の腕を振るう。俳句では宝井其角とのつきあい。太鼓持ちは止めず、紀伊国屋文左衛門や奈良屋茂左衛門などと親しく交わった。うぐん。これ艱難辛苦の時代がないと一蝶の場合、復活といえないか？



「布晒舞図(ぬのさらしまいず)」
国宝・重要文化財

高尾 隆

特集テーマ「復活」

『もうひとつの古代史』逸文 「聖徳太子」斑鳩復活」論 忌部 守

1 空白の622年

聖徳太子が亡くなった年は、『日本書紀』によれば621年(推古二十九年)の二月のことと記述されているが、実際には622年(推古三十年)の二月に起きている。ちょうど、一年のズレがあるのだが、なぜそれが判るかという点、法隆寺金堂の釈迦三尊像の光背にハッキリと刻まれているからである。正式の国史である『日本書紀』では、時として為政者の都合により事実が曲げられるが、仏像の光背銘にはありのまま書かれることがある。当事者は事実を刻み、為政者はそれに気付かなかつたため幸運にも幾多の火災を逃れてそのまま残ったのである。

さらに、光背銘には太子の死の二か月前に母親である穴穂部間人皇太后が死に、太子の死の前日に妻の膳妃が死んだと書かれている。三人がほぼ同時期にである。尋常

ではない。あたかもそれを隠すかのように、『日本書紀』は太子の死を前年に起きたこととし、さらに当該年の622年の一年分の記事を削除した。もちろん、母と妃の死の事実についても『日本書紀』では触れられていない。(推古朝は三十六年間続いたが、記事が全くないのは622年だけである)

同じような事例は他にもある。薬師寺東塔檨銘である。『日本書紀』は、薬師寺の発願を天武九年(680)のことと記すが、東塔の檨銘には天武八年のこととある。やはり一年の差があるが、これは壬申の乱が起きた年を『日本書紀』は天武元年(672)と記述するからで、実際にはその年は秋まで大友皇子が健在であったはずで、弘文元年であったろう。しかし、天武天皇が弘文天皇(大友皇子)から政権を奪ったことを隠さなければならぬ。つまり、大友皇

子は即位していなかったことにするのだ。だから齟齬が起きる。

それでは、太子の死因は病死か、自殺か、あるいは他殺か? 事件性はあるのか。

釈迦像の光背銘によれば、状況はこうだ。まず、621年(推古二十九年)の十二月に母親の太后が亡くなる。そして、年が明けた622年(推古三十年)の正月二十二日には太子が病により床に臥すが、妻である妃が「労疾」で並んで床に就く。すると、王子や諸臣らが、「深く愁毒をいだ(懐)き」発願して等身大の釈迦像を造った。しかし、二月二十一日に妃が亡くなり、翌日太子が死んだ。そして、三月中旬に、釈迦像が完成したという(*1)。

ここで、気になるのは「深く愁毒をいだ(懐)き」の部分だが、原文を示すとこうなる。「深懐愁毒 共相発願 仰依三宝 当造釈像尺寸王身」

「愁毒」とは嘆き悲しむという意味になるが、通常であれば「愁傷」「愁痛」や「愁殺」などが熟語として使われるが、「愁毒」という用例はあまりない。「愁殺」があえて「愁毒」に替えられた感もある。そ

ここで、「愁毒」を熟語ではなく、返り点を変えて「深くおも(懐)い、毒をうれ(愁)いて」と読んだらどうだろうか。「毒」は、毒物であり、健康や精神に有害な事物を指す言葉である。

この光背銘は、なぜこの釈迦三尊像を造像したかという、いわば縁起を書いているものだが、縁起には誇張があることもあり、縁起がすべて正しいと考えることは出来ない。しかし、この縁起の内容は、太子が病気で妃と伴に病床に就き、王子らが発願して太子の回復を祈って等身大の釈迦像を造ったとある。太子は深く仏教に帰依していたのであるから、これらの行為には納得性はある。さらに、この釈迦像の様式は古式を残しており、太子と同時代のもの、あるいは死後に造られたとしてもそれ程後のものとは考えられない。銘文は、直接光背裏に彫られており、法隆寺は度々の火災にあつてはいるはずであるが、それを潜り抜けたと考えてもおかしくはない。もちろん、この光背銘だけでは太子の死因は断定できない。

問題は、『日本書紀』では太子の死の時期が変えられていること、

(5)

(4)

同時に母親と妻が死んでいることが隠蔽されている事などを勘案すると、毒殺の可能性も捨てきれない。それでは、聖人のような太子が暗殺されるような要因が当時あったのだろうか。

その理由は、次節で詳しく述べるとして、ここではなぜ、622年の記事がすべて抹消されたのか考えてみたい。実は、その年は日本を含む東アジアでは激動の年であった。六世紀末に近い589年（崇峻二年）、中国の隋が南朝の陳を滅ぼして漢代以来の中国統一を果たすと、俄かに地続きの朝鮮半島が騒がしくなる。高句麗も百済も、南朝の陳にも朝貢していたので、その陳が滅亡し隋が強大になる事は大きな不安になったに違いない。軍事的な圧力を恐れた高句麗は防備を整え、一方隋は高句麗を叱責する書簡を送りつけるなど両国の緊張が高まったが、遂に598年（推古六年）に高句麗が中国領の遼西に侵入したことを機に、隋の文帝は水陸三十万の大軍による大遠征を行なった。この遠征は、隋側に食糧の不足や疫病の流行があり、高句麗王が謝罪の使者を隋に送ったため、遠征は中止され高句麗に

よる隋への朝貢が再開された。

この隋と高句麗の衝突は、倭国にとつて決して対岸の火事ではない。隋の大遠征の直前の595年（推古三年）に、高句麗は倭国に僧の慧慈を派遣（渡来）し、太子の顧問にしている。倭国を高句麗側に取り込もうとしたのだ。二回の遣隋使派遣も高句麗の仕業だったかもしれない（*2）。五世紀の倭の五王以降、中国には使者を派遣しておらず久々の復活であったからである。

この隋と高句麗の衝突は慧慈から逐一、太子に報告されていたと考えられる。慧慈は、太子の仏教の師と伝えられているが、同時に当時の僧は、官僚や学者でもあると考えて間違いない。仏教は、当時の最新科学であった。『日本書紀』には記載がないが、600年（推古八年）に『隋書』には第一回の遣隋使、実際には朝貢使が倭国から隋に派遣されたのは、やはり慧慈や百済によるアドバイスであったろう。なお、慧慈は太子の死を聞いて、翌年の二月に自身も死んで浄土で再会すると言い残して、翌年にその通りに死んだという『日本書紀』のエピソードは史実では

なく、太子が実は翌年の622年に死んだという事実を暗示していると考えられる。『日本書紀』は史実を書き換えた時に、それを暗示する逸話をそれとなく記載するというのが定番である。

倭国が、第二回の遣隋使を派遣した607年（推古十五年）、隋の二代目皇帝の煬帝が北方の突厥王の元を訪れた際に高句麗の使節と鉢合わせになるという事件が起こり、高句麗が突厥にも使者を送り、通交していることが明るみになった。結果、煬帝は612年、613年、614年と三回に亘って高句麗への遠征を行なったが、隋の国内で反乱が起きたこともあり、遠征は失敗し混乱の中で隋王朝そのものが崩壊した。

さて、隋に代わって618年（推古二十六年）に唐が建国したが、翌619年（推古二十七年）に早くも、高句麗が遣使したのを始めとして、621年（推古二十九年）に唐が中国を統一すると、百済と新羅も使者を送った。そして、問題の622年（推古三十年）を迎える事になる。史料がないので、実際に622年に何が起きたのかを把握することはできないが、少

なくとも次の二点が起きたと考えることが出来る。

第一に、既に述べた通り、聖徳太子が二月に暗殺された可能性がある。その結果、国内の政治バランスが崩れ、政治状況が大きく変わったと推定される。隋が中国を統一すると直ぐに遣隋使が派遣されたが、今回の唐の統一には630年（舒明二年）まで遣唐使派遣は実施されていない。国外に対する目配りは無くなり、蘇我馬子を中心とする内向きの蘇我氏の一極体制になったのではないだろうか。

第二に、太子の死後、僧慧慈は死んだのではなく、隋との衝突が決着した後の615年（推古二十三）に高句麗に帰国している。高句麗は隋による度重なる遠征を押し返したとはいえ、一時的には衰弱したであろう。中国や朝鮮諸国から倭国に何か働きかけがあった可能性も残る。そして重要なことは、この後は倭国の外交は百済重視政策を強め、663年（天智二年）の白村江の敗戦まで一挙に突き進む事になる。

2 復活の720年

現在の法隆寺が誰によって建てら

れたかと問われれば、多くの人は聖徳太子と答えるだろう。でも、それは違う。法隆寺が再建された時、既に太子は死んでいた。そして、法隆寺が再建された時、実は一度死んだ聖徳太子は復活したのだ。

何やらキリストのような話になってしまったが、法隆寺に関する再建・非再建論争については決着して久しい。現在の法隆寺は、聖徳太子が建立した法隆寺そのものである、と当初は考えられていた。なぜなら、現在の法隆寺の伽藍は、飛鳥様式に則った古式のものではないか、と考えられても可笑しくはない。

事の発端は、明治二十年頃、『日本書紀』の記事の見直しから始まった。記事には、天智九年（670）に法隆寺がある日の夜半に焼け、一堂も残っていないと書かれている。文字通り読めば、法隆寺は七世紀後半に全焼したのであり、現在、法隆寺が建っているとすれば、それは再建されたということになる。この問題について、一方では美術様式的に法隆寺は飛鳥時代の遺構にみられるから、実際に火災したのは法隆寺とは別の建物ではないか、などの反論がなされた。し

かし、この様な美術様式や文献論議だけでは到底決着が付かない。

大正時代になって、現五重塔の中心から、唐時代の葡萄鏡が発見されたり、法隆寺食堂や普門院の辺りから古瓦が散見されていることが注意を引いた。そして、いよいよ昭和十四年になって、若草伽藍の発掘調査が開始されて再建論が優勢となった。

発掘場所は、五重塔や金堂のある西院伽藍から、夢殿の東院伽藍へ向かう道筋沿いの東大門手前にある普門院の築地塀の内側（南方面）であって、現在も塀に遮られて見えない場所である。この若草伽藍では、五重塔基壇と金堂基壇が発見されたのであるが、重要なことは、その伽藍配置が南に五重塔を置き、その北側に金堂を配置するという四天王寺式伽藍配置であったことである。現法隆寺は、西に五重塔、東に金堂と並列配置する方式だが、飛鳥時代には仏舎利のある塔を中心とする四天王寺伽藍方式が主流であって、法隆寺もやはり四天王寺式であったことが確認されたのである。これは大きな成果だ。法隆寺建築は飛鳥様式に見えるが、実は純粋な飛鳥様

式ではないことが判明したのだ。

ここで様式について触れておくと、（諸説あるが）まず北側の講堂が回廊の中に取り込まれるのは鎌倉時代だ。そこで延長された回廊も虹梁の上の叉首の中央に束を使用するなど飛鳥様式ではない。金堂は重層の入母屋造の本瓦葺で、軒下に雲肘木や高欄に卍崩しの彫り物・人形束などの飛鳥様式を持つ一方、一階部分の外回りに裳階が利用されているなど奈良様式も含む。つまり、現在の法隆寺は聖徳太子を偲ぶため飛鳥様式を残す一方、その後の様式も併せて持つ複合様式ということになる（*3）。

では、現在の法隆寺は、聖徳太子の死後、一体何時、誰によって再建されたのかを考える必要があるが、その前に前節で述べたように、聖徳太子が暗殺される理由について明確にして置きたい。それは、よく知られている斑鳩宮の造営自体にあると考えられる。

『日本書紀』によれば、推古天皇が即位した年の九年後（601）、聖徳太子は「初めて宮室を斑鳩に興てたまう」と簡単に記述されている。もちろん、法隆寺が現在建っている地であることは言うまでも

ない。『日本書紀』には、宮建設の理由も経緯も一切書かれていないが、この斑鳩の宮について、聖徳太子が大阪を繋ぐ交通至便にある斑鳩の地に皇太子宮を建てたものとされ、遣隋使の一行に飛鳥の都に着くまでの途中に、日本にも壮大な寺院があることを見せつけようとしたのではないか、などと一般に説明されている。

しかし、よく考えて欲しい。

斑鳩の宮から推古天皇のいる飛鳥の都まで、直線距離で二十キロほど離れており、その後建設された藤原京と飛鳥の都の間の距離三〜四キロとは訳が違う。大和川に行きかう船を利用したとしても、半日以上は掛かってしまう。法隆寺の建設だけならまだしも、太子は自分の宮も建設して常住し（住み始めたのは605年）、一族の者を住まわせているのである。推古天皇が朝に太子を呼んでも、到着には夕方位まで掛かってしまう。太子は、推古天皇の飛鳥よりも壮大な都と寺院を斑鳩に作るうとしたのである。これを、単なる皇太子宮（東宮）と考えてよいだろうか。

女帝である推古天皇が即位して

早十年になろうとしており、太子も国家事業となる第一回の遣隋使を派遣して自信に満ちた時期であったろう。この斑鳩の宮の規模、建設時期、都からの距離は、周りの人間から見ても皇太子の行為としては異常に見えない。筆者は、太子は天皇になろうとしたと考えている。

聖徳太子が天皇になった形跡はない。しかし、太子は天皇になろうとして暗殺されたと考えられる。当時の太子の周りの状況を見て欲しい。まず、推古天皇は、崇峻天皇が暗殺された後、聖徳太子はまだ若く、つなぎの女帝となったと考えられる。それから十年経って、太子が即位しても可笑しくはない。

しかし、推古天皇は即位後の行動からも、夫である敏達天皇との間に生まれた自分の皇子たち、つまり竹田皇子と尾張皇子に後を継がせたいと考えていた。それまでは、天皇位は離さない。竹田皇子は若くして死んだが、尾張皇子については『日本書紀』に詳しい記述はないものの、尾張皇子の娘である位奈部橘王が太子の妃になっているので、夭折はしていないことが確認できる。即位して十年、太子が斑鳩

に自分の宮と壮大な寺院を建設したとなれば、その意図を訝ったのではないか。

一方、大臣蘇我馬子はどうか。馬子を始めとして蘇我氏が百済系の渡来人を積極活用していたことは有名な話であり、日本最初の本格的寺院飛鳥寺の建設に際しても百済に支援を要請している親百済派の政治家である。太子が、高句麗僧・慧慈を顧問にして遣隋使を主導することには快く思っていないか。高句麗と百済は敵対関係にあった。馬子は、天皇位に既についていた崇峻ですら殺害している。

推古天皇であれ、蘇我馬子であれ、あるいはそれ以外の第三者であれ、聖徳太子を殺害する理由も権力も持っていた。太子が、斑鳩の宮を建設してから622年までの間に危機があったと考えられる。

3 「聖徳太子≠聖人君子」の理由
『日本書紀』によれば、聖徳太子は生まれながらにして言葉を喋り、一度に十人の訴えを聞いて理解出来たとか、超人、聖人であった様な記述がされているが、これは太子の死後、太子信仰の対象として

祀られるようになってからのことである。それ以外の『日本書紀』の記述を追いかけると、父である用明天皇の死の直後、馬子が起こした対物部氏との戦いにおいても太子自ら参加したり、推古天皇の治世になってからも二回に渡る新羅征討軍を計画するなど、むしろ好戦的な性格を現している。

法隆寺は何時、再建されたであろうか。再建時期については、様々な議論がなされているが、『法隆寺資料帳』には和銅四年に中門仁王像が造頭とあるのを受けて、石田茂作氏は再建の上限を天武朝の中頃、下限を元明朝の和銅年間(708~714年)としている(*4)。

次に、誰が法隆寺を再建したであろうか。そのカギとなるのが、西院伽藍の西北の丘の上に立つ西円堂である。この西円堂を建てたのは橘三千代であるが、娘の光明皇后が病氣平癒の祈願のために造営したと考えられている。さらには、法隆寺に三千代の持仏である橘夫人厨子が伝承されていることは有名である(*5)。この両者に関係する権力者と言えば、藤原不比等という事になる。つまり、『日

本書紀』(720年完成)において、聖徳太子聖人像を創り上げた不比等が、法隆寺再建の中心的立役者であると考えて間違いはない。

聖徳太子は天皇になれず、そして死後は太子信仰が創造され、『日本書紀』により聖人になった。しかし、太子が日本で仏教の興隆を図った英雄であったことは間違いはない。(以上)

【註】

- (*1) 東野治之校注『上宮聖徳法王帝説』(岩波文庫)
- (*2) 李成市『古代東アジアの民族と国家』(岩波書店)
- (*3) 妻木靖延『図解こが見どころ! 古建築』(学芸出版社)
- (*4) 石田茂作『法隆寺雑記帖』(学生社)
- (*5) 東野治之『日本古代史料学』(岩波書店)



特集テーマ「復活」

ライオン宰相 大恐慌に挑む

榎 良生

一. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大が全世界を震撼させた年も年末を迎えようとしているが、更に心配なことはリーマンショックを遥かに超える経済活動への深刻なダメージである。今から九十年程前、1929年9月24日、「暗黒の木曜日」にニューヨーク株式取引所で大暴落が起こった。これをきっかけにして物価の急落、生産の縮小そして失業者の増大へと繋がっていった。たちまち日本をはじめ全世界に波及し、これが世界恐慌(大恐慌)と呼ばれたのである。この時、経済の立て直しに全力で立ち向かった総理大臣がいた。彼の名は濱口雄幸、その風貌から「ライオン宰相」と言われたのである。性格実直にして、信念を通じた正義漢であり、国民の気持は高かった。しかし、この時期は金融恐慌、張作霖爆殺事件、ロンドン軍縮条

約、金解禁、そして大恐慌、満州事変へと続く激動の時代であり極めて難しい政治の舵取りを任されたのである。本格的な政党内閣を組織した原敬から続いた最期の輝きであり、これ以降の日本はファシズムへの道を進んでいくのであった。彼は素早く各種政策の実行を進める中で、妻や子供たちには「決死の覚悟なので途中で倒れようとも、男子の本懐である」とその覚悟のほどを説いていたのである。その言葉のとおり、道半ばで凶弾に倒れたのだが、まさにこの時日本は分水嶺に立っていたのであった。今回は難しい時代に孤軍奮闘した彼に焦点をあてて、今まさに前例のない大不況に入って、そこからの「復活」を模索する人々にとって彼の事例研究をすることで、すこしでも役に立ちたいと願うのである。

二. 当時の社会情勢と濱口の生い立ち

それでは当時の社会情勢をざっと辿って行くことにしよう。第一次世界大戦に乗じて大陸への進出と未曾有の経済成長を成し遂げた日本であったが、この戦争が終わると早くも戦後恐慌に襲われた。戦時中に設立された多くの新興企業はたちまち経営に行き詰ってしまったが、これの整理を進めることなく軍備増強、鉄道・道路等の建設、電話網の拡張など積極政策を推進したのである。これにより戦後恐慌は一部軽減したものの不良企業の整理や産業合理化は遅々として進まなかったのである。これは対外的には輸出不振、輸入増加を招き国際収支は大幅に悪化したのであった。このような状況下で大正十二(1923)年九月一日、関東大震災が起こったのである。この時生まれたのが「震災手形」だった。これは震災の結果、流通が困難になったものを最終的には政府・日銀が引き受けたのである。この中には最初から不良債権だったものも少なからずあったのである。これがその後の日本経済の宿痾と

なってしまったのであった。大正十四(1925)年三月二十九日、普通選挙法が成立し、330万人だった有権者は1250万人へと増加した。その十日前には治安維持法もまた成立していたのである。民衆の政治意識は次第に高まり大正デモクラシーを生んだ一方で、社会主義思想がひろまり労働争議や農民運動の増加に対応したものであったのである。震災後、日本経済の矛盾が大きくなり疲弊する中で、欧米諸国は金本位制に復帰するとともに経済再建を成し遂げていた。こうなると日本だけが取り残されることになってしまい、金解禁、すなわち金輸出禁止を解除して金本位制に復帰することを産業界を中心に要求が強くなってきたのである。特に為替の乱高下が輸出の障害になると紡績業あたりからの主張が次第に大きくなっていった。昭和二(1927)年三月十五日、若槻内閣の片岡蔵相が震災手形の審議中に東京渡辺銀行の破綻をうっかり発言してしまい、これを契機に大規模な金融恐慌が発生したのであった。この混乱を収束できず若槻内閣の後を受けたのが、政友会の田中義一である。

彼は金融恐慌の対応を図るとともに、積極的な財政の出勤による景気を刺激する政策を展開し始めた。中国出兵をはじめとする軍備増強、植民地経営、農村救済、これらを公債で賸ったのである。インフレ政策で少し景気は上向いたものの、昭和四年に入ると早くも沈滞してしまった。また、侵略主義的な外交政策は中国の対日意識を決定的に悪化させて、陸軍の暴走を招いて戦争への道の出発点になってしまったのであった。張作霖爆殺事件で天皇の信頼を失うと昭和四年（1929）年七月総辞職して、立憲民主党の濱口雄幸が首相に就任したのである。

それでは次に濱口の経歴を辿っていきこう。彼が生まれたのは明治三（1870）年四月一日、高知県高知市五台山の林業を営む水口家で、三人兄弟の末っ子であった。明治二十二（1889）年、安芸郡田野村の濱口夏子と結婚して、濱口家の養子となる。旧制高知中学から三高、東京帝国大学法科へと進んだのである。後に外交官となり濱口を助ける幣原喜重郎とは大学の同級生であった。卒業後は大蔵省に入ったが生真面目な仕事

ぶりだが頑固でもあり、しばしば上司と衝突しては左遷されていた。四年におよぶ地方勤務のあと、専売局の塩田整理事業を担当することになる。これが完了すると当時の通信大臣後藤新平の下で通信次官を務め、その二年後に大蔵次官に就任、濱口四十五歳の時である。この頃から政治家への誘いがあり、大正四（1915）年、立憲同志会に入党、地元高知から衆議院議員へ立候補し初当選したのであった。大正十三（1924）年、加藤高明の護憲三派内閣で大蔵大臣に就任したのであった。その後、立憲民政党総裁となり、張作霖爆殺事件で総辞職した田中義一の政友会内閣のあとを受けて政権を担当することになったのである。

三. 濱口政策の検証

それでは、本題である濱口が実行した各種政策の「検証」に移ろう。昭和四（1929）年七月二日、首相に就任した濱口は一週間後の七月九日、施政方針について十大政綱を発表した。公明な政治、協調外交、軍拡から軍縮、緊縮財政、金解禁など、これにより政治への信頼を取り戻して、不況

を克服して経済の復活を目指そうとする内容であった。この中でも中核をなすものが緊縮財政と金解禁であったが、彼はこれを信念を持って貫き通したのである。金本位制の下では通貨発行は外貨準備の枠内に限られるため、必然的に緊縮財政を実行せねばならず、当然のことではあるが軍事費の増大にもブレーキがかかる仕組みである。また、資本主義の原理から言えば国際収支を通して、弱小企業が淘汰されて経済が健全化されることになる。国民の間に期待が大きかった半面、デフレによる経済危機を予測する批判もまた存在したのである。濱口の下でこれを遂行したのが日本銀行出身で蔵相になる井上準之助だった。彼もまた濱口に共鳴し、ともに命がけで金解禁などの経済政策を実行してゆくのである。濱口と井上は各省の猛烈な反対を押し切って予算を大幅に削減する一方、当時まだ珍しかったラジオを使って、国民に節約を呼びかけたのである。こうして金解禁のための準備を進めて、満を持してこれに踏み切ったのであった。時に昭和五（1930）年一月十一日のことだった。

しかし、ここに大きな誤りがあったのである。前述のような効果は健全な資本主義のもとならば十分に期待されたであろう。しかし、当時の日本経済は第一次大戦後から十年も続く慢性的な不況の中で、すでに疲弊の極みに追い込まれていたのである。多くの中小企業や農家は、幾重にも不況の痛手を被り合理化どころではなかった。緊縮政策を行うには失業の増大や中小企業の破綻がおこっても、経済全体では伸びしろが存在してこれらを吸収できる余力が必要だったのである。さらに悪いことには前年、昭和四（1929）年十月にニューヨーク・ウォール街で株式大暴落が発生していたのだ。この時点でこれが大恐慌になるとはだれも予想していなかった。これまでも濱口と井上に責めを負わせるわけにはいかないが、結果的には最悪のタイミングになってしまったのであった。よく「暴風雨に向かって雨戸を開け放つようなもの」と酷評されることになったのである。この結果、外貨（金）は大量に海外へ流出し、物価は暴落し、生産は極度に縮小して国民生活は窮乏したのであった。

この時期にそもそも金解禁の必要性はあったのだろうか。不況の最中に有効需要も作り出さずに緊縮財政を進めても効果がでるはずがない。井上は銀行家の視点から経済を見ているだけで、農村や都市の中小企業の置かれた立場を理解できていない。現在では様々な批判が浴びせられており、金解禁はその必要性は認めながらも、この時期に実行したことは全く合理性を欠いていたと言わざるを得ない、というのが一般的な評価になっていると思われる。ではなぜこのような判断を行ってしまったのだろうか。前述の不況下の有効需要創出の理論は今では高校生でも知っているケインズ経済学の中核である。英国の経済学者、ジョン・メイナード・ケインズは大不況下では、金融政策は効果的でなく財政の出勤こそが効果的だとした。これは『雇用・利子および貨幣の一般理論』に述べられているが、これが世に出たのは濱口の死の五年後、1936年のことだったのである。

この後、高橋是清がケインズに先立って財政の出勤を推進して、日本経済を不況から脱却させてゆくが、真の「復活」とはならなかった。

四. 歴史に学ぶこと

昭和五（1930）年十一月十四日、この日濱口は岡山で行われる陸軍の演習の視察のため東京駅に向かっていた。乗る列車は午前九時発の神戸ゆき特急「燕」である。八時五十五分に駅長室を出て第四ホームを移動中、三分後に右翼の青年に至近距離から撃たれたのである。大不況で世情が混沌とする中で身辺には不穏な動きも見られ周囲からは警護の強化を勧められていたが、「日本経済「復活」への熱い思いから国民に節約を強いている最中でもあり、本人は断っていたと伝わる。駆けつけた医師に苦しい息の中で彼は「男子の本懐です」と呟いたという。濱口は大手術を受けて一命は取り留めたが、無理して国会に出るなどしたのち、昭和六（1931）年八月二十六日、この傷がもとでついに亡くなったのである。享年六十一歳だった。

私は濱口雄幸という人物を敬愛してやまない。実直・清貧・清廉で正義感にあふれた人を今では見ることは少ない。頑固で信念が強い人ならば、その強さのあまり他

人の意見は顧みなかったきらいはあったかもしれない。政策はイチゼ口ではなく、効果と副作用を見極めてミックスとして実行する必要があったのである。この時代に限らず今でも、オールマイティの手などあるわけはなく、もう少し柔軟性をもって臨んでいたならば、その後の展開も変わっていたに違いない。日本経済の本当の「復活」を果たしてこそ、「男子の本懐」だったのではあるまいか。満州事変が起きたのは彼の死からわずか三週間後のことだった。



濱口雄幸（ウィキペディアより）



【参考文献】
「激動昭和と濱口雄幸」（川田稔著：吉川弘文館）
「男子の本懐」（城山三郎著：新潮社）
「日本の歴史 大正デモクラシー」（今井清一著：中公文庫）
「日本の歴史 ファシズムへの道」（大内力著：中公文庫）
このほか、ウィキペディア、等の資料を参考にした

以上

作動停止（スイッチ・オフ）のため潜水艦でワシントンに向かう。

しかし地下9階の危機管理センターへ到着した時点で地震が発生し、ARS作動による報復合戦で世界は二回目の死を迎える。

人の死に絶えた新旧両大陸の上で爆発した中性子爆弾（水爆の14〜17倍の高速中性子を放出）によってWASPS（MM-88を媒介する球菌）は滅殺し、さらに照射によってWASPSを食い殺すより繁殖力の強い新種（変種）細菌が出来たため死滅する。

六年後、南極の人々が南米大陸の南端への上陸を開始し、小さな集落を構えて北上の機会を待っているところへワシントンから生き延びて徒歩で大陸縦断を敢行し衰弱しきった吉住が現れる。多くの犠牲を出しながらも人類は滅亡寸前で新たな再生への道を踏み出し希望に満ちた見通しとともにこの物語の幕が下りる。

（ポイント）・MM-88は、増殖・感染する拡散だけの存在で特定の球菌を媒介としてインフルエンザを含むミクスウイルス群に寄生し、宿主となるウイルスの増殖力・感染力を殺人的に増加することで、

大規模な蔓延を引き起こす。細菌でもウイルスでもないMM-88はワクチンも抗生物質も効果がなく、唯一の対抗手段は、原子炉内での中性子線照射によって生まれた人体には無害な変異体によって増殖を抑えることであった。

・米ソで発射された核ミサイルが中性子弾頭で、中性子爆弾は『破壊を伴わず、ただ人命だけを殺傷する核兵器』として非人道的兵器の極致と言われていたもので戦略施設や武器を破壊せずに手に入れることが出来、全世界を破壊に巻き込む「死の灰」も出さない「洗練された核兵器」である。

・WASPSが細菌戦用に開発されたのだとしたら、本来人類を死と疫病から救うためにある医学が人類を絶滅させ、人類を絶滅させる目的でつくられた核ミサイルが人類を救ったということになる。

・最後のことは「明日の朝、私たちは北へ向かってたつ。『死者の国』にふたたび生をふきこむべく」。北方への道は、はるけく遠く、『復活の日』はさらに遠い。―そして、その日の物語は、私たちの時代のものではあるまい」

完

コラム 流人からの復活②

島流しが復活の原動力？「西郷隆盛」

近世大物の島流しといえは、西郷隆盛が有名だが、刑罰というものとは少し違う。最初の遠島は安政の大獄に連座し、幕府からの捕縛を逃れるために尊王攘夷派僧侶の月照と薩摩に逃れた。錦江湾に入水するも一命を取り留め、薩摩藩が半ばかくまうために死亡扱いにして、奄美大島に閉居させたものである。

二度目は徳之島から沖永良部島への遠島。藩主斉彬が亡くなった後、新藩主忠義に代わり実権を握っていた父親島津久光の逆鱗に触れたものである。

奄美閉居から3年余り、世は桜田門外・坂下門外の変等が続き、政情の不安に朝廷が政治的圧力をかける程、幕府の求心力は失われていた。そうした中、久光は幕政改革の建議を起こそうと上京を企てる。盟友大久保利通らはこれを機に隆盛の藩政復

帰を進行する。しかし許された西郷は久光からの指示を無視、勝手に上京してしまう。またも即刻遠島処分を受ける。わずか2カ月あまりの現場復帰だった。西郷には久光に対する敬意は薄く、藩主でもない無位無官の男が京江戸に行つて何ができるかという思いだったのだろう。事実久光は江戸まで下り、何の成果もなく、帰りに生麦事件を起こしてしまっただけだった。

二度目の遠島は厳しいものだった。人気のない島で座敷牢の生活を強いられた。そのままではおそろく死を迎えることになったはずだが、そこが西郷の間力なのか、彼に手を差し伸べる島役人などが現われ2年余りで復活、禁門の変での指揮官としての活躍。まさに回天の機が熟してから表舞台上に復帰し、明治維新の立役者となる。

高尾 隆

特集テーマ「復活」

「復活ならずササニシキ」

近藤 政次

1. 米・ササニシキのこと

今から30年前の頃、即ち平成の初め、京浜地域の人々は主食の米についてコシヒカリ（以下「コシ」と略す）、ササニシキ（以下「ササ」と略す）の二大銘柄品種が食味も良く、価格もそれなりに高いものと認識していた。「コシ・ササ」の時代である。3番手に来るのが「あきたこまち」であった。名称の通り秋田県が官民あげて育成し、昭和59年から普及を図ってきた品種である。

筆者は「コシ」の大産地の新潟県出身であることからスーパーや米専門小売店などで白米の店頭価格に関心を抱いてきた。10kg袋で「新潟産コシ」が「宮城産ササ」の500円高で推移していた。「あきたこまち」は価格ではかなり水をあけられていた。ただ前二銘柄に比してそのネーミングと袋の平安朝の若い女性の絵で斬新さがあった。

2. 平成の大冷害、米不足騒動

秀歌人、小野小町が秋田県の生誕地であったという古説にちなむ名称だ。「コシ、ササ」はいささかそっけない。例えば「コシヒカリ」を漢字で表記すれば「越乃光」、福井県農業試験場で育成され、昭和31年に新潟県からデビューし、その名を世に問うたのである。なお、「越乃国」は越前、越中（富山県）、越後（新潟県）、ただし佐渡を除く）と広大な地域を指す。「ササ」は宮城県の古川農業試験場で「ハツニシキ」と「ササングレ」の交配によって作出育成され昭和38年から宮城県内で本格栽培に着手した。名称は両品種に由来する。良質米として福島県、山形県に作付が拡大し、またたく間に東北を代表する品種の地位を得たのである。

「ササ」の名前は令和2年の今日、米の生産・流通市場の表舞台から姿を消している。その主因となったのは平成5年の大冷害であった。全国的に凶作となり、米どころの東北地方は作況指数56で、平年の5割程度の収穫となり、品質低下も著しかった。8月の旧盆頃から米不足は必至の状況となった。7〜8月は米の端境期で、新米が出回るのは9月中旬以降であり、国民の不安が急速に高まった。国産米はあつという間に姿を消し、ヤミで3割〜5割高のプレミアム相場となった。平成のコメ騒動である。

日本の米事情は昭和30年代まで米不足傾向で、多収穫コンクールや新田の開発で水田面積は拡大した。しかし、40年代に入ると一転して過剰基調となり、46年から水田転作が始まり、農政は選択的拡大として畜産、果樹、野菜へと転換していく。例えば、「浜ナシ」（品種は幸水、豊水など）で知られる横浜市のナシ栽培はその多くが水田転作による新規栽培であった。

米不足を乗り切るため、政府は平成5年度中に短粒種の米国加州米、中国産米、長粒種のタイ米な

ど約300万トンの緊急輸入に踏み切った。日本の大量輸入は国際米市場を押し上げ、シカゴの小麦相場も大きく上昇し、発展途上国から経済大国・日本に手厳しい批判が投げかけられた。

筆者の家庭も夫婦ともども米どころの出身であることから実家筋や知人に頼もうかと考えていたものの、何時の間にか国産米で足りた。タイ産米を買い、2〜3回混ぜて食べたが、まずくもうまくもなかった。この年の12月末にガット・ウルグアイラウンドの農業交渉の期限切れを迎えた日本政府は米の自由化に踏みきった。令和2年のミニムムアクセス米の日本の輸入枠は77万トンとなっている。これに加えTPPの豪州産米枠は6千トン、ただしこちらは豪州が不作で輸出余力がない状態。国内の主食米作付は約138万ヘクタール。

(15)

3. 米市場から消えたササニシキ 「ササ」は当初から耐冷性、耐病性がやや弱い形質を持っていた。米過剰という時代にあつて売れる米づくり、食味の良い米づくりへの志向が生産者・消費者双方に強まり、「ササ」の栽培面積は増加して

(14)

いった。平成元年には作付面積は東北中心に20万ヘクタールに達した。平成5年の大冷害はイモチ病の大発生も招き、東北地方の米生産地に大被害をもたらした。この大冷害は「ササ」の品種としての弱点を明らかにした。

昭和60年産から平成5年産までの10年間、全国水稲作付面積の1割を占め、「コシ」に次いで2番目の位置を得てきた「ササ」であったが、大冷害の翌6年はそのシェアは5.9%となり、「ひとめぼれ」、「あきたこまち」に抜かれて第4位の作付となった。「コシ」は昭和54年産から今日まで、第1位の座をキープしている。

平成20年の国内水稲作付面積は167万ヘクタールで上位4位までの品種は「コシ」が37.7%、「ひとめぼれ」10.6%、「ヒノヒカリ」10.3%、「あきたこまち」8.0%。5位以下は3.4%の「キヌヒカリ」、10位は1.7%「つがるロマン」である。「コシ」の圧倒的な面積である。しかもこの年の上位10品種は「コシ」およびその後代品種（子孫）である。

なお、「ひとめぼれ」は宮城県の古川農業試験場の育成品種で「コシ」と「初星」の交配品種、平成3年にデビュー、大冷害では耐冷性の強さを発揮した。食味も良く平成28年には東北地方のほか、鳥取、山口、大分などでも栽培されている。「ヒノヒカリ」は宮崎県の農業試験場が「愛知40号」と「コシ」を交配し、平成元年に登場した。西日本、九州、四国地域で並及している品種である。「あきたこまち」は「コシ」と「奥羽292号」の交配種で昭和59年産からデビューした。秋田県農業試験場で育成した良食味米。

「ササ」は平成28年に育成の地、宮城県で約4000ヘクタールが作付されている。このほかにも鮎米として人気があることから個別の栽培契約をしている農家も全国に散在している。一般家庭がスーパーなどで5kg、10kg単位で「ササ」を入手することは京浜地域では困難となっている。

一方、「ササ」育成の地、宮城県大崎市では4年前から「ササ系日本一」を競うコンクールが毎年実施されている。今年も11月に行われることとなり、「ササ」および「きき結（むすび）」の2品種について全国から募集、「キヌヒカリ」と「初星」の交配品種、平成3年に登場した「ひとめぼれ（宮城県）」「はえぬき」（山形県）は平成5年の大冷害を乗り越えた品種であり、平成28年産では「ひとめぼれ」は宮城県の作付面積の78%、岩手県の75%、福島県の23%を占めるまでに並及した。「はえぬき」は山形県の63%を占め、「ササ」退場の分を補っている。新品種の開発・育成のピッチはきわめて速くなっており、令和2年の今日、新しい品種として聞こえてくるものに「新之助」（新潟県）、「雪若丸」（山形県）、「ゆめぴりか」（ふつくりんこ）（北海道）、「富富富」（富山県）、「だて正夢」（宮城県）など目白押しだ。中でも北海道は今や米の主産地であり、「きらら397」、「ななつぼし」の有力品種を市場に供給している。なお西日本では先に紹介した「ヒノヒカリ」、熊本県の「森のくまさん」など優れた品種も多い。

「米の食味ランキング」は（財）日本穀物検定協会が昭和46年から実施、対象は各道府県の奨励品種で、一定の作付面積があるものを決定する。

4. 結び

平成3年に登場した「ひとめぼれ（宮城県）」「はえぬき（山形県）」は平成5年の大冷害を乗り越えた品種であり、平成28年産では「ひとめぼれ」は宮城県の作付面積の78%、岩手県の75%、福島県の23%を占めるまでに並及した。「はえぬき」は山形県の63%を占め、「ササ」退場の分を補っている。新品種の開発・育成のピッチはきわめて速くなっており、令和2年の今日、新しい品種として聞こえてくるものに「新之助」（新潟県）、「雪若丸」（山形県）、「ゆめぴりか」（ふつくりんこ）（北海道）、「富富富」（富山県）、「だて正夢」（宮城県）など目白押しだ。中でも北海道は今や米の主産地であり、「きらら397」、「ななつぼし」の有力品種を市場に供給している。なお西日本では先に紹介した「ヒノヒカリ」、熊本県の「森のくまさん」など優れた品種も多い。

【主な参考文献】『コシヒカリ』日本作物学会北陸支部・北陸育種談話会、1995年、農文協。『米品種大全5』米穀データーバンク、2014年。『米の日本史』佐藤洋一郎著、中公新書、2020年。『新版米の事典』石谷孝佑編、2009年、幸書房。『日本水稲在来品種小事典』2020年、農文協。『全国お米のこだわり銘柄事典』平成30年、日本食糧新聞社編。『ちやぐりん』2020年10月号、家の光協会。「日本農業新聞」令和2年9月15日号、9月25日号ほか。

（終）

（16）

特集テーマ「復活」

極楽への復活と、融合の日本宗教

（色葉句へど その4 ゲンさんの歴史幻想）

宮下 元

◆新型コロナ禍からの復活

前80号で法隆寺は怨霊封印の寺との話をした。天然痘など感染性疫病が怨霊の祟りという。

さて、今回の新型コロナウイルス禍を祟りと思う日本人は何人いるだろうか？ 大韓民国の新興教会は神の所為だとした。自然破壊など進歩し過ぎたホモ・サピエンスの驕りが神の罰を招いたと説く人も居る。

善光寺では病氣治癒の「びんずる尊者像」を触らないようにとの感染防止の貼り紙が出た（笑）。科学の時代だが、我々ホモ・サピエンスはやはり、宗教・神頼みで生きている人が多い。

「コロナ禍からの復活をみな望んでいる。しかし、残念ながらスペイン風邪（インフルエンザ）と同様の長期戦になると思われる。もっと怖いウイルスのパンデミックへの訓練と捉えたい。」

さて、今81号テーマ『復活』だが、本稿は『栄枯盛衰』が主旨なので、逆になるが『人間万事塞翁が馬』で考え方次第かも。

『復活』と聞いて、まず、イエス・キリストを思い浮かべた。

◆復活とは世界破滅時の救済か
キリスト教は、一般に『慈愛の宗教』と言われているが、私は一言で言えば、『天国・地獄の教義』『世界終末時の救済』と思っている。つまり、救済されるように、神に従い、良い行いをしなさい。そうすれば天国に行ける。従わなければ地獄に落とされます、と。

『キリストククライスト』とは『救世主』（メシア）の意味。キリストとは、ヘブライ語で「油を注がれた者」（祝福された、つまり『神の預言者』の意味のギリシャ語訳で、救世主の意味に転嫁した。『イエス・ジーサス』とは予言者

の個人名で『ヨシヤ』からである。ヨシヤとは「ヤーウエ（神）は救いである」の意味のヘブライ語人名イエホーシヤアの短縮形。
イエスは磔処刑後、世界を救うために死後3日で復活した。つまりキリスト教は奇蹟信仰の宗教でもある。なお、一神教のユダヤ教・キリスト教・イスラム教の神様は本来同一で、名前は無いが『YHWH』（以下、ここではヤーウエと称す）と呼ばれており、偶像崇拜を嫌うとても恐ろしい神様である。あまり言い切ると、キリスト教徒の方から叱られてしまうので・・・。

◆伯母の家の礼拝

二年前に伯母が九十九歳十一ヶ月で隣臓ガンで天寿を全うした。気丈で元気な人だった。夫（伯父）が若くして病死し、苦労は人一倍だった。老後は優しい家族に囲まれ幸せそうだった。死んでから遺書が出てきて、プロテスタント教会での葬儀と教徒共同墓地に埋葬してのことだった。遺族は驚いたが希望に従うことにした。

その葬儀で驚いたのは、牧師さんが笑顔で明るく進行したことだ。長生きして天国に行けるのだから

喜ばしいことなのだ。
その後、ご先祖様と一緒に祀ろうとしたら、宗教がみな違うので困った。それで仏壇を止め、新たに棚を作り、一緒に並べて祀っている（写真参照）。

私はそれで構わない、ありだと思った。もともと、日本の宗教は、厳格な決まりはないし、神仏習合が本質と思っていたので。



写真：親戚の家の祀り棚。ご先祖様のキリスト教・神道・仏像・位牌を並べている

◆日本人は「ニホン教」の仏教徒
私は、日本人の宗教観を『ニホン教』と呼んでいる。日本称賛ではないので、『ニホンの許容教』というべきかもしれないが。

（17）

つまり『何でもあり仏教徒』。

現代日本人は『無宗教です』と自称する人が多いが、実態は、初詣など寺社に拘らずお参りし、いろいろなお祭りに参加し、クリスマスやハロウィンを祝っている。結婚式も教会で挙げてしまう。ある意味でもありなのだ。仏僧でさえクリスマスケーキを食べる。一神教では浮気？は神様から罰せられてしまうのに。日本人社会の基本は仏教徒と言っているのだが、実は何でもありなのだ。

日本の仏教の元を辿ると、空海以前から『本地垂迹（ほんじすいじやく）』と思われる。つまり、仏教や神社（八百万の神）や山岳宗教（山伏・修験者）が当初から混在一体となっている。

もちろん、宗派によって、教義の違いや争いはあるが、混在を許している。ただ、不思議なのは、世界で一番多いイスラム教徒が少ないこと。どうも、日本人には合わないようだ。禁酒やラマダンや一日六回礼拝など厳格な教義・戒律が苦手。縛られるのがイヤなのだ。ところで、仏教には『極楽西方浄土』『末法思想』がある。何故かキリスト教義とよく似ている。

◆天竺浄土教の基盤も混交

日本の大衆仏教は主に大乘仏教系の浄土教（含む浄土宗）であるが、釈迦（ゴータマ・シッタータ）の教えとはかなり異なっている。釈迦は悟り修業を説くが、浄土教は念仏（お経・マントラ）を唱えよと説く。浄土教は、天竺（インド・パキスタン）で発達した。古代インドのバラモン教（ヒンデュー教）などを取り込んだ。だから仏像には、インド系の神様が多数入っている。また、紀元一世紀に、十二使徒のトーマスがインド・パルティア王国まで赴いて宣教し、マドラスで殉教したという。つまり、キリスト教義も伝わって、西方浄土・末法思想・念仏として採り入れられたと考えられないだろうか？『阿弥陀』とは西方浄土（ローマか？）の仏で、お釈迦様本人ではない。『如来』は悟った仏。『仏』『ブッダ（仏陀）』は悟った人。

『アーメン』が『アミ・ダブツ』になったとか？アーメンとは「そのとおり・そうなりますように」。『南無（ナム）』とは「帰依する・任す」の意味で似ている。なお、空海の真言宗では、『大日如来』が最高神で、創造神に相当する。釈迦はその化

◆二ホン教の基盤は、空海と最澄（空海（弘法大師）と最澄（伝教大師）は同じ遣唐使で、唐に渡り、仏教（浄土教と密教）を習得し、806年に帰国し、日本の仏教を根づかせた。空海は真言宗を、最澄は天台宗で、現代の浄土宗（含む浄土真宗）・日蓮宗は比叡山延暦寺から派出している。基本は、念仏を唱えれば極楽に行ける、というもの。空海はたった数年で仏教・密教の奥義を会得した天才だが、当時の長安では東方キリスト教の『景教』（ネストリウス派）が保護され流行っていた（長安『西明寺』など）。どうも、空海・最澄は景教経典（漢字訳の旧約・新約聖書）も持ち帰ったようだ。空海が大和朝廷に厚遇されたのは、怨霊封じ込めの密教奥義を会得したからでもある。空海は京都の東寺の隅に守護として八幡神社と稲荷神社を祀らせている。

つまり、空海は浄土教と密教をベースに景教教義も取り入れ、渡来系の秦氏と協力して、神社と一体の二ホン教を理論化・確立したと考えられる。

身。何かキリスト教に似ていないだろうか？

645年玄奘三蔵法師が天竺から唐に帰国し広めた。

◆いいところ取りの融合宗教

つまり、大乘仏教は天竺で既に混交・融合宗教であったのではないだろうか。キリスト教もそうである。ケルト族の冬至祭を採り入れ、十二月二十五日をイエスの誕生日に決めてしまった。歴史的真相では、イエスの生年も日付も不確かだということ。こうしてみると、宗教は権力・国家と結びつき、いいところ取りをしている。

ただ、日本人は、いいところ取りの融合宗教を不思議とは思っていないようである。それがまた、日本人の不思議さでもある。温故知新で柔軟なのだ。

◆現世は地獄にしない

なにしろ、現世を天国にとまでは求めないが、疫病・パンデミック・地獄・戦争・地震・津波・地獄・ストレス・地獄にしないように、ならないように、と念仏を唱えるばかりである。そして、黄泉（よみ）の国は、

◆八幡宮と稲荷宮は渡来系神社（平安京（京都）は元は秦（はた）氏の根拠地で太秦（うずまさ）がある。秦氏は渡来の技術集団である。唐では『大秦』とはローマ帝国の意味で、ローマから来た景教を大秦寺と呼んだ。『大』と『太』の違いはあるが。

その秦氏が建立したのがなんと八幡神社（宇佐↓石清水↓鎌倉鶴岡）と稲荷神社（伏見）である。共に現代日本で数では一位、二位の神社である。

しかも宇佐八幡宮は781年に朝廷から『八幡大菩薩』（護国靈験威力神通大菩薩）の号を与えられ、空海以前から神仏一体の本地垂迹化されている。どんな神様が気になる。調べるととても複雑な神だ。武士の神様『八幡大菩薩』は、菩薩（仏教）⇨八幡様（秦氏系神）⇨応神天皇（天皇家先祖神）⇨神功皇后（母神）となる。また、『女神』として『宗像三女神』も祀っているが、諸説では、卑弥呼とかマリアではとか言われている。『宗像三女神』は航海族宗像氏の宗像神社の女神。先年福岡県沖ノ島宗像（沖津宮）の発掘物が一式、国宝に認定された。朝鮮半島との第二

極楽浄土に行きたいものである。

〔主な参考文献等〕
『聖書と歴史の学習館』
<https://www.lets-bible.com/twelveapostles/f07.php>
『失われたミカドの秘紋』加治将一（かじまさかず）章伝社
『ニッポン民俗学』mansonge
<https://www.lets-bible.com/tw>
『ウィキペディア（Wikipedia）』

◆大日如来の意味

『如来』とは、「真理を悟った者」の意味で、仏教が成立した当初は仏教の開祖である釈迦のみを指している。真言宗では大日如来を「本尊」としている。釈迦如来や阿弥陀如来は大日如来の化身。

釈迦自身は大日如来という存在を考えていない。大日如来を考えだしたのはもつと後世の人々という。仏教の開祖は釈迦だが、大日如来はその釈迦をも創りだした創造主といった考え方に近い。

なお、『真言』とはマントラの漢訳。大乘仏教でのお経・念仏・呪文

海路上の島である。実は奈良三輪山の大神（おおみわ）神社系の大神（おおが）氏が宇佐に乗り込んだ。欽明天皇二十九年（568年）に宇佐神が応神天皇と名乗ったと言い秦系宇佐氏から宇佐神宮の職務を得たのではなからうか？

大分の国東半島の石仏・仏院も宇佐八幡宮の配下であり、平安時代は九州荘園の約半分を持つほどの勢力だったという。

◆稲荷とはINRIか？
稲荷宮は、農業・食べ物の神様で宇迦之御魂神（うかのみたま、倉稲魂命とも書く）を主神とする。『うか』とは食べ物。表記は伊奈利↓稲成り↓稲荷に変化したという。稲鳴りから雷雨神とも思えるが、一説では、『INRI』からという。INRIとはキリストのラテン語別称。キリスト教の宗教画を見ると、磔刑上のイエスの頭上に、罪状を書いた木札が打ちつけてあることが多い。『INRI』でネストリウス派では、「インリ」と読んだ。『JESUS NAZARENUS REX JUDAEORUM』（ユダヤ人の王、ナザレのイエス）の略である。

(18)

◆阿弥陀如来の意味

阿弥陀如来とは、浄土教においては、極楽浄土の仏で本尊となる。阿弥陀如来はすべての者を極楽浄土へ導くおられる。

◆『仏陀』

（ブッダ）は本来は悟ったシッタータの自称の個人名だが、今は仏（悟った人）の一般呼称。

最終的に、「ブッダ」または「ゴータマ・ブッダ」の名前で入滅したらしい。

◆釈迦・釈迦如来

シヤカ族の漢字訳。『釈迦牟尼』（シヤカムニ）の略で、「シヤカ族の聖者」の意味。仏教の開祖。BC500年頃に実在した人物。本名ゴータマ・シッタータ（ガウタマ・シッタータ、瞿曇悉達多）。北インドのシヤカ族の王子。ゴータマが姓。シッタータが名。元はバラモン教徒。釈迦如来（しゃかによらい）または釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）とは、釈迦を、仏（仏陀）として敬う呼び名である。

(19)

以上

熊野詣における「いのちの復活」

山本 修司

一 はじめに

修験道の聖地である熊野は一度死を迎え、その後、新たに生まれ変わり、命の復活を願う、すなわち黄泉（よみ）がえりを目指す地である。

熊野詣は十二世紀、院政期のころが最も盛んであった。京都から熊野にいたる熊野街道は参詣者が多く、蟻の行列に似ているというところで「蟻の熊野詣」ともいわれた。「天皇は伊勢に行幸」され、「上皇は熊野三山に御幸（ごこう）」されたのである。上皇は天皇とは別格の治天の君なので、様々な制約のある伊勢の神でなく熊野の神に御幸すべきであると勧めたのは園城寺（三井寺）であった。

熊野詣は宇多法皇から始まったが、熊野御幸は白河上皇以降の院政期に本格化し、約二百年間で九十八回も行われた。一度の御幸に同行者が二千五百人に達したこ

ともあった。本稿では「命の復活」を願う熊野信仰を概説し、自らの身を犠牲にすることによって人々を救うという代受苦の実践や、御伽草子や説経節の題材となった「命の復活物語」を紹介する。

二 熊野信仰とは
「山川草木悉皆（しつかい）成仏」の心すなわち「自然信仰」である。また、「貴賤を問わず、男女を問わず、信不信を選ばず、浄不浄を嫌わずあらゆる人を受け入れる」などを旨とし、「阿弥陀浄土の入り口」「補陀落浄土の出発地」「観音信仰の聖地」なのである。熊野は、詣でることによって往生できる場所であり、死の國・黄泉の國であり、「生と死」の地なのである。「熊」は「隈」であり「死者の魂の籠るところ」であり、「隠れ、籠るところ」である。死は一時的に隠れることであり、将来、「生」に変貌（復

活）すると考えられていた。「疑似の死」を体験することが熊野信仰の柱である。
「擬死再生」とはこれまでの自分を葬って新しく生まれ変わり、新たな力を身につけ、その力によって人々を救済すると考えられていた。死の先が生につながり、生はやがて死につながる。したがって熊野詣の浄衣は死装束である。自然信仰、神道、仏教、修験道の聖地なのである。

三 大峰奥駈修行（擬死再生）

修験道の神髄は、一度死んで山岳という母胎に入り、修行を経て成仏し、新たな生を得てよみがえる「擬死再生」と、山中で得た力を里で生かし、神仏と衆生（大衆）の間に立つて衆生の苦しみを受ける「代受苦」である。古代・中世には、しばしば死に至る荒行も実行され、投身や首つりなどの捨身（しやしん）行も多かったという。
大峯奥駈道は吉野山を北の起終点とし、熊野までの約百七十Kmの間、標高二千m近い山々の尾根を歩く修験道の中でも最も厳しい修行の場である。この行は奥駈修行と呼ばれ、幾日もの間、崖や

谷を渡って歩くのである。そして、吉野側を金剛界、熊野側を胎藏界に見立て、その場所を巡拝しながら即身成仏し、生まれ変わるという、擬死再生の修行を行う場所とされ、この道は約千年の歴史を超えて引き継がれたのである。

四 補陀洛渡海（代受苦）

はるか南海の孤島にあると信じられている観音浄土、補陀洛（チベット・ラサの「ポタラ宮」を意味するポータラカ由来）に対する信仰である。

熊野は「山の國」でもあるし、「海の國」でもある。那智は補陀落浄土の東門。ここから（通称・棺桶舟に乗って）補陀洛渡海をめざす僧が九世紀末以降跡を絶たず、平安時代・江戸時代までに二十数名に及んだ（全国では百名前後とも）。一種の捨身行であり、那智の補陀落山寺はその拠点であった。この補陀落山寺の住職は六十歳で住職を辞め、翌年の秋に補陀落渡海することになっていたが、十六世紀半ばの金光坊（こんこう）の捨身以降は生きたままの渡海はあまりにも残酷であるとの反省もあり、以降は一種の水葬の行事へ

と変化した。

補陀落渡海の場合は他に室戸岬や薩摩など各地にあったようである。渡海は究極の苦行であり、渡海僧の霊魂は入水捨身の功德によって、補陀落浄土で永遠の生命が得られるとされた。そして自らの身を犠牲にすることによって人々を救うという代受苦の実践なのである。

五 火生三昧（代受苦）

那智の妙法山阿弥陀寺に火生三昧跡がある。境内の揭示文を以下に記す。『平安時代、法華経の行者であった応照上人は、その経の一節にある、すべての衆生の罪を一身にかぶり火をもってみずから体を焼き尽くすという薬王の姿に心を打たれ、食物を断ち松の葉草の根を食べて苦行を重ね、自らも紙の衣を着て火生三昧の行を実践しました。上人の身体が火に包まれても説経の声は最後まで穏やかに、辺りにはまばゆいほどの光と鳥たちの讃嘆の声が満ち溢れ、その煙は三日三晩熊野灘を漂い続けたと言われています。これは平安時代末の本朝法華験記という書物に記されていて、現代の価値観で

は計り知れない壮絶な上人の衆生済度への想いが込められています。』
応照は日本最初の焼身者とされている。

六 熊野の本地（御伽草子）

室町時代に作られたと思われる、短編の絵入り物語が御伽草子であり、十五世紀には成立していたようである。熊野三所権現の神仏の由来物語で熊野の修験山伏や熊野比丘尼（びくに）が管理し伝播させた。

天竺（インド）の王様と亡くなった妃と王子が熊野三山の主として熊野で復活するのである。父王は本宮、母后は新宮、王子は那智の主である。お付きの僧や家来たちもそれぞれが神になり、〇〇王子となった。さらなる詳細は紙面の関係もあり省略する。

七 小栗判官と照手姫（説経節）

日本独自文学の一つに説経節がある。仏教のありがたさを物語形式で解き明かそうとしたものである。

二条大納言の放蕩息子・小栗は洛北の深泥池（みどろがいけ）の大蛇の化身と交わったことが咎と

なり、常陸国に流罪とされた後、判官となった。

やがて武蔵と相模の郡代を勤める横山氏の娘、照手姫と恋仲になり、夫婦となるが、横山氏はこれを認めず、結局、小栗は横山氏に毒殺されてしまう。一方の照手姫は相模川に投げ込まれるが救われ、美濃の青墓の遊女屋の下働きとなる。

小栗は冥途での閻魔王の審判結果により、『この者を熊野本宮の湯の峰に入れて治療させてほしい』と書いた札を胸につけられて、藤沢の上人（遊行寺の住職）にあててこの世に送り戻された。上人は小栗に「餓鬼阿弥陀仏」の名をつけてやり、『この者をひと引き引いたは、千僧供養、二引き引いたは、万僧供養』。土車に小栗を乗せ、道端の者は先を争って綱を引き、湯の峰をめざす。途中、照手姫も小栗の変わり果てた姿と知らずに引いた。遂に湯の峰に到着。『一七日、御入りあれば、両眼があき、二七日、御入りあれば、耳が聞こえ、三七日、御入りあれば、はやものを御申しあるが、以上、七七日と申すには、六尺二分、豊かなる。元の小栗殿とおなりある』小

栗の完全復活である！その後小栗は照手姫と無事再会し、幸せに暮らした。

「小栗判官」は、昭和五十七年（1982）、横浜ポトシアターの仮面劇（遠藤啄郎脚本・演出）や平成三年（1991）のスーパー歌舞伎（梅原猛作）が話題となった。さらに京舞・義太夫「小栗曲馬物語」が今年2月、国立劇場で上演された。また、藤沢の遊行寺にはなんと、小栗判官と照手姫の墓がある。さらに家康の孫で越前藩主松平忠直（1595～1650）が注文主とされている岩佐又兵衛風絵巻の「をぐり」は全長三百二十四メートルに及び、宮内庁三の丸尚蔵館に所蔵されている。

〔主な参考文献〕

- ・補陀落渡海記 井上靖 講談社 文芸文庫
- ・中世小説集 梅原猛 新潮文庫
- ・熊野三山・七つの謎 高野澄 祥伝社黄金文庫
- ・ミラクル絵巻で楽しむ「小栗判官と照手姫」 太田彩 東京美術
- ・岩佐又兵衛風絵巻の謎を解く 黒田日出夫 角川選書

（完）

会員研究

嗚呼諸葛孔明 祁山悲愁の風更けて 星落つ秋風五丈原

高野 賢彦

中国の歴史において劉邦の「漢国」が登場したのは西暦前二〇二年である。この国は前漢と後漢を合わせて約四〇〇年の長きにわたり、都は前漢が長安、後漢が洛陽であった。今日につながる中華文明の基礎が作られたのはこの時期と言われている。

後漢末期の群雄割拠の中で西暦二〇八年に豪族曹操の「魏」が、四川の成都を本拠とする劉備の「蜀」と江南の南京を本拠とする孫権の「呉」の連合軍に長江左岸の赤壁の戦で敗れて魏、蜀、呉の三国が互いに覇を競う三国時代へ突入した。蜀の劉備は襄陽（湖北省）の山野を徘徊し、晴耕雨読の生活をしてきた諸葛亮（字は孔明。以下孔明という）という人物を三顧の礼をもって迎え、魏との激しい覇権争いを演じた。孔明は魏の司馬仲達と五丈原で戦っているとき病死したが、私は孔明について格

別の思い入れがあるのでその面影を瞥見しようと思う。

一 魏の曹操という人物

曹操は沛国譙県（現在の安徽省亳州市）の宦官曹氏の出身である。曹操は頭脳明晰の天才である。多才にして文学を好み、兵法、儒教、音楽、書、囲碁などに通じていた。ただ治世の能臣ながら、軍事、政治にすぐれ、千変万化、あたかも神のごとき振る舞いから、その評価は乱世の奸雄といわれて悪者のイメージがある。それは「自分がそが天下である」という意識、すなわち「乱世の奸絶」（よこしま、わるがしこい）であったからと言われている。関羽、張飛、孔明を配下にして蜀漢の劉備が仁の人と言われていたのとは対照的であった。曹操の祖父曹騰は君主の身の

回りのことを処理していた宦官であり、卑賤の出とされていた。しかし一九七〇年代に曹操の墓（曹操高陵）が発見され、二〇〇六年に曹操の頭蓋骨、歯のついた上あごの骨などが掘り出され、そのイメージは改められた。曹操の父曹嵩は豪族夏侯氏に生まれて曹騰の養子になり、また曹操一族の墓域も広大ゆえに曹氏はある程度の勢力を保持していた豪族であったようだ。

後漢では官僚に対する刑罰が無実化されていたが、曹操は実権を握るところを改めて厳しい統治を行った。政治的には律令体制を取り入れて孔子に高く評価され、軍事的には後漢末期の黄巾（農民の反乱）の残党数十万人を取り込み、『孫氏』の「兵は詭道なり」という騙し討ち戦略を重んじていた。武田信玄も『孫氏』を学んで同じく詭道を重視していた。

文学を格別に愛していた曹操は儒教を文学の下に位置付けていた。後継者を選ぶときも文学を重視して兄の曹丕より弟の曹植を選ぼうとした。しかし家中に異論があった。結局は曹丕に落ち着いた。曹操はまた素行、性格云々よりも才能を重視して家臣を登用した。現に

魏を最大の勢力に仕上げる過程で絶大な功があった荀彧を重用した。荀彧（現在の河南省許昌市の人）はもともと豪族袁紹に仕えていたが、袁紹に不足を感じて曹操へ鞍替えした人物である。

曹操は二〇〇年に黄河の渡河点、官渡（河南省）の戦いで敵将袁紹を十分の一の兵力にもかかわらず、兵糧蔵を狙って打ち破り、二〇七年に河北を平定して丞相の地位に就いた。さらに二〇八年に天下を統一するため荊州を目指して南進したが、十二月に長江の赤壁で孫権と劉備の連合軍に大敗北を喫した。その原因は南船北馬、すなわち不慣れた水上戦と自身の群衆的頭痛のためか、戦術上の不手際があったようだ。そのうえ曹操軍が行軍の疲れと疫病の蔓延で将兵の士気が上がらず、そこを孫権の火攻めにより多くの軍船は焼き払われた。

いずれにしても曹操は頭痛のため石の枕を使い、また名医華佗を侍医にしようとして断られたため殺害している。ついには二二〇年に六十六歳で死去している。

(22)

二 劉備 諸葛孔明を迎える

漢の景帝の後裔である劉備は字を玄德といい、漢の復活を期して四川の成都に蜀（蜀漢）という国を造った。豪族の関羽、張飛らと結び、徐庶の意向によって草庵に住んでいた孔明を三顧の礼をもって迎え入れて参謀とした。そして呉の孫権と連合して赤壁で曹操に大勝利した。

この戦いで敗退した曹操は北方へ逃げ帰って魏王を名乗ったが、子の曹丕が後漢の献帝から篡位して魏王朝を称したのは二二〇年である。劉備はその前年の二一九年に漢中王を、その三年後の二二二年に孫権が呉王を称した。孔明の言う天下三分の計、すなわち魏・蜀・呉の三国が天下を争うことになったのである。

ところで諸葛孔明とはどのような人物であろうか。孔明は徐州（現在の山東省南部及び江蘇・安徽省北部の地）琅邪郡陽都県の生まれであり、前漢の首都長安周辺の行政と監察を行う要職・司隸校尉の諸葛豊の子孫である。しかし父母ともに孔明が幼いとき死去した。そこで叔父の諸葛玄が予章郡（江

西省）の太守になり、孔明らを連れて知り合いの劉表のもとへ身を寄せることになった。しかし叔父が亡くなると、身長八尺（一八四センチ）、眉目秀麗の孔明は襄陽（湖北省）で晴耕雨読の日々を送り、自分を管仲・楽毅（春秋時代の斉の賢相・魏の武将）になぞらえていたという。劉備は部下の徐庶の仲介によって孔明と出会い、徐庶が言うとおりに孔明の草庵を三回訪ねて礼を尽くした。そのとき劉備は人払いして孔明に言った。

「漢朝はいま傾き崩れ、姦臣が天命を盗み、献帝は都を離れておられる。私は自分の徳や力が不足しているにもかかわらず天下に漢の復活を図ろうと奮闘しているが、知恵も術策もないためにつまずいて今日に至ってしまった。ただ志だけは今も変わらなず持ち続けている。君には私のために是非とも計略を打ち立ててもらいたい。」孔明はこれに心えた。

「豪傑が次々に現れ、州や郡を占領している。曹操が強者になれたのは天の時味が味方したためです。いま曹操は対等に戦える相手ではありません。孫権は江東を支配し

すでに父・兄と三代を経ており、国は長江の險を持ち、民はなつき、賢人も彼の手足となっており、これは味方とすべきで滅ぼすことを考えてはなりません。荊州は地勢に恵まれています、その主の劉表は守ることすらできません……」。劉備と孔明は意見を交わしながら日ごとに親しくなり、「君臣水魚の交わり」を結んだ。劉備亡き後にも孔明は劉備の意向を守って幼少の劉禪を補佐し続けたが、それはこのときの決意に基づくものであった。

三 死せる孔明 生ける仲達を走らす

孔明は劉備の漢室復活のため強敵の魏を打ち倒すことに力を尽くした。その間に赤壁の戦いや荊州をめぐる戦いなどがしばしば行われ、また呉の孫権とは同盟を結んだり離反したりした。劉備が動くとき、曹操は紅陵を取られることを嫌い、軽騎兵で劉備を追撃、避難民を多数抱えて行軍速度の遅い劉備軍はしばしば打ち砕かれた。中国ではいろいろな合戦があった。

数十万の大軍が互いに対峙することもあれば、伏兵をもって騙し討ちするなど密かに戦うこともあった。孔明は空城の計を用いたりしたが、そうした中で劉備にとつて大きな損失だったのは敵から神のごとく恐れられていた関羽が戦死したことである。劉備は荊州支配に意欲を有して関羽を派遣したが、劉備が漢中王になった二一九年に関羽に曹操の従弟が拠っていた樊城（湖北省）を囲ませたところ、劉備と孫権が不仲であったとき孫権の家臣呂蒙に計られて首を刎ねられた。関羽、ときに五十八歳であった。

孔明は荊州で曹操に敗れた劉備に対して孫権と同盟を結ぶため自ら使者に立ったこともあるが、なんと、いつも孔明の白眉は魏の司馬仲達を相手とした虚々実々の戦いであった。ただ孔明は政治には通じていたが、軍略はどちらかと言えば苦手であったようだ。それでも孔明は劉備のために二二八年に棧道の斜谷道の難所を越えて北進し、祁山を攻撃した。そのとき信頼を寄せていた馬謖に大兵を預けたが、馬謖が街亭の戦いで指揮を誤って敵将張郃に大敗するに至っ

(23)

た。孔明はやむをえず撤退して漢中に帰り、泣きながら馬謖を斬って兵士らに謝罪した。また孔明は二三年には祁山を攻めて仲達の武將張高部を破って大勝利を収めた。その後の侵入時には仲達が戦いの表に出てきた。仲達は名門の出、はじめは曹操の子曹丕の教育係であったが、いまや参謀を務めるようになった。

孔明は常に成都から遠征したので戦場が遠かった。そのため補給とくに食料が欠乏したので志を實現できないまま撤退せざるを得ず、常に無念の思いであった。そこで四度目の侵攻時には一輪車もんぐるまの木牛を工夫して食料を載せてゆき、祁山の出城を包囲して敵將仲達と対峙した。仲達は孔明が何をしでかさか分からないため警戒してしばしば兵を退いた。仲達は二三年の合戦時には副將張部の進言はあったものの、戦いを避けて持久戦を取ることにした。それは蜀軍の弱点である補給面を狙った作戦であった。しかし仲達は二三年には部下からの突き上げによってやむをえず合戦を挑んだ。しかし孔明の精銳に蹴散されて散々の負け戦となった。

仲達はふたたび打って出るため張部に一軍を授けた。孔明は猪突猛進型の敵將を見て意図的に逃げて白兵戦に持ち込んだ。すると勇將姜維が放った矢が張部の右の股に突き刺さり、歴戦の雄者張部が戦死した。ときに五十一歳であった。

それから三年後の二三年、孔明は新たに考案した四輪車の流馬りゅうまに軍需物資を乗せて斜谷道から侵入した。仲達は孔明が渭水すいすい（甘肅省蘭州に発する川）の南部に広がっている五丈原に布陣し、わが軍と対峙するものと考えて長期戦を覚悟した。孔明が五丈原に腰を据えたのを見届けると、仲達も五丈原へ向かった。孔明は長期戦の不利を悟って仲達を侮辱した。すると仲達が怒って兵を動かすものと思ひ、仲達に婦人用の装身具を送った。孔明の「お前は根性なしだ」という意思表示に案の定、仲達は怒ったが、ぐっとこらえて守備固めをした。すると長引いた対峙に孔明の体はしだいに蝕まれた。ある夜のこと長い尾を引いて青白い流星が蜀軍の陣に落ちた。その直後のこと、孔明の陣から使者がやって来た。仲達が「余は近頃年のせいか夜は眠くて困っている。それに食

欲が無いのだが・・・」ととぼけた。すると使者は「わが殿も食がめつきり細くなっております」と口を滑らした。仲達は使者の言葉を聞いて孔明の命が長くないことを知った。それから間もないこと、孔明は重体に陥り、八月に至って陣中で病没した。ときに五十四歳であった。

部下の姜維らは軍勢をまとめて撤退し、孔明は定軍山に埋葬された。蜀軍の撤退を見て仲達は進撃した。すると蜀軍は死せる孔明を四輪車に乗せて旗を掲げ、陣太鼓を打ち鳴らしながら進軍してきた。仲達は驚いて引き退いた。人々は「死せる孔明、生ける仲達を走らす」と言った。仲達は権謀術策を用いるのが得意であったが、孔明との戦いではその暇がなかった。最後に勝利をつかみ取った仲達ではあるが、孔明の陣営や砦を視察して「孔明、天下の奇才なり」と言ったという。

私は昔、土井晩翠の「星落秋風五丈原」という詩と諸葛孔明のことを知って感銘した。そこで晩翠の詩の一部をここに載せたい。

祁山悲秋の風更けて 陣雲暗し五丈原
 零路の文は繁くして 草枯れ馬は肥ゆれども 蜀軍の旗光無く
 鼓角の音も今しづか 丞相病あつきりき
 帳中眠かすかにて 短檠光薄ければ
 ここにも見ゆる秋の色 銀甲堅くよろえども 見よや侍衛の面かげに
 無限の愁溢るるを 丞相病あつきりき

〔主な参考文献〕

- ・ 諸葛孔明の生涯 寺尾善雄 三笠書房
- ・ 諸葛亮孔明 その虚像と実像 渡辺義浩著 新人物往来社
- ・ 曹操 奸雄に秘められた「時代の変革者」の実像 三国志学会監修 山川出版社
- ・ 「三国志」の覇者 司馬仲達 松本一男著 PHP研究所
- ・ 新説 三国志（株） 榎出版社
- ・ 群雄三国志 渡辺精一監修 PHP研究所



(24)

コラム 流人からの復活③ 流人の沙汰もこね次第「俊寛」

島流しと言えば「俊寛」だ。歌舞伎、浄瑠璃、能の演目としても有名で、打倒平家の共謀の場に場所を提供したために連座した悲劇の僧侶である。

頼朝挙兵の3年前、「平家にあらずんば人にあらず」平家の横暴は蔓延し公家社会に叛逆の気運が充ち溢れる。そこで打倒平家のクーデターが謀議される。場所は京都東山、鹿ヶ谷の山荘に後白河法皇のとりまきが集まった。平家物語では俊寛の山荘とある(愚管抄では信西の子・静賢のもの)。しかし謀議は平清盛に密告され、その中心人物の藤原成親、西光らが捕まり打ち首や配流の処分を受ける。同じく平康頼、藤原成経そして俊寛の三人は喜界島へ流罪となる。

流刑地喜界島はどこにある島だったのか、おおかた鹿兒島の硫黄島とされている。平家物語

には島の様子を「たかき山あり、とこしなえに(いつも)火もゆ。硫黄と云う物みちみてり。かるがゆへに(このために)硫黄が島とも名付たり」と描写している。硫黄は当時日宋貿易の重要な輸出品である。この島からの商船は薩摩から肥前国へと結ばれ、肥前には藤原成経の舅平教盛(清盛の弟)の領、鹿瀬庄がある。配流中の三人はここからの支援で命をつないでいた。現に放免される成経と康頼は都へ帰る途中、肥前国鹿瀬庄に滞在している。

清盛の甥平康盛の家人だった康頼、正三位参議で成親の子であった成経、二人とも許しを乞い、高倉天皇の中宮徳子の安産祈願の恩赦を受けた。近親者の赦免運動もあったであろう。縁故も薄く許しも乞わぬ、気位が高い俊寛は一人島に残される。

(25)

会員研究

虚構の「比企氏の乱」

北条一族の陰謀 加藤 導男

はじめに

これまで、比企氏について側面から会報投稿、研究発表を行ってきました。また、歴史研究会本部の懇談会で講演もさせて頂いてもらいました。

今回は集大成として、「比企氏」が北条一族の陰謀により、滅亡したことを検証していきたい。私が四十歳になった頃から、家内（一昨年夏に他界しました）と鎌倉中のお寺を巡りました。食事はいつも日本蕎麦屋さんでした……。

お気に入りのお寺は、北鎌倉の円覚寺、東慶寺、鎌倉駅からは覚園寺（かくおんじ）と本編と関係の深い妙本寺でした。

一 妙本寺は比企氏館跡

鎌倉駅東口を出て、若宮大路を越えて、安産祈願と季節の花々で

有名な大功寺（だいぎょうじ）を通り抜け、突当りを右折し、すぐに小さな夷堂橋に行きつき、そこを渡ると、妙本寺の参道になります。参道はゆるやかな登り坂。両端は高い杉木立で鬱蒼としているが、足元には四季の花々が咲き、三々四分で本堂前に到着です。

妙本寺は正式には長興山妙本寺といえます。長興は比企能員（よしかず）の、妙本は能員の妻の法号から名付けられたもの。創建は文応元年（1260）、開基は能員の末子の比企大学三郎能本である。能本は比企一族滅亡の際、二歳だったが、家臣に助けられ、京に上り成長して儒者となり、順徳上皇に仕え、上皇崩御の後に儒官となつて鎌倉幕府に仕えた。

四代將軍頼朝のときに比企家は再興され父祖の地、ここ比企ヶ谷に住み、その頃日蓮上人が鎌倉に滞

在、上人に帰依して妙本寺を建立したのです。

本堂の前庭には『比企氏の乱』で亡くなった一族の墓や供養塔があり、また僅か六歳で殺された一幡の袖塚があります。一幡は頼家と比企能員の娘・若狭局との子であり、能員にとつては孫にあたります。

ここに立つと、何かピンと張りつめた空気が感じられ、一夜で滅ぼされた一族の人々の無念や怨念の気持ちちが八百年の時を超えて、参拝する私達の胸に付き刺さる気がします。

二 比企氏の出自と

源頼朝との関係

比企氏の本拠は武蔵国比企郡（現在の埼玉県比企郡）である。

比企氏に関する資料は乏しく、不明な点が多い一族ながら、埼玉の比企郡川島町の「金剛寺」から、比企氏の系図が発見された。

その系図には、秀郷流藤原氏で、初め現在の神奈川県秦野市に住みつき、康和年間（1099）1104にその一族波多野三郎遠光が郡司としてこの比企郡に移り住み、土着して比企氏を名乗っ

たのだとされている。

なお『秦野市史』によれば、波多野氏は秦氏の出であろうと述べており、絹織物や製鉄の技術を持つ渡来系の氏族の流れが比企氏であったということになる。また、比企という郡名は、日の神を祭る「日置部」から来た地名とする説がある（『甞る比企一族』より一部引用）。

比企遠光の二代後の遠宗は、若くして京に上り、源義朝に仕えた。遠宗と妻の比企の局（遠宗の死後、比企禅尼と称した）には子女が三人（後に、長女は丹後局、頼朝の側室でその子が島津忠久。二女は川越重隆の正妻。三女は源義経の正妻）であったため、甥の能員を養子に迎えたのである。

(26)

遠宗は義朝に頼朝が生まれると、その乳父（めのと）となった。平治の乱で義朝が討ち死にし、頼朝が捕らえられ、伊豆の蛭ヶ小島に流されると、遠宗が亡くなった後、比企禅尼は鎌倉幕府を開くまでの二十年間、比企郡から生活の糧を贈り続けていたのである。

能員は平家討伐・奥州征伐等にも数々の武功をたて、御家人にも登用された。

頼朝の長男、頼家は比企ヶ谷のこの館で生まれ、長じて、比企能員の娘・若狭局を娶ったため、比企一族、能員の勢力は増大となり、北条氏を凌ぐほどとなった。

しかし、鎌倉幕府初代將軍・源頼朝は正治元年（1199）、生涯を閉じた（享年五十三歳）。何故か「吾妻鏡」は死去の三年程前からと死去の当月分迄が欠落している。

この事は、何か重大な事柄が隠蔽されていると思われます。

頼家は父の死後、家督を継いだ。

三 頼家に代わり、訴訟の裁決

が十三人による合議となる

『吾妻鏡』建久十年（1199）四月十二日

「諸訴訟の事、羽林（頼家）に決断せしたまふの條、これを停止せしむべし。北条時政殿・同義時、大江廣元、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、梶原景時、（以下略・他計十三名）談合を加へ、計ひ成敗せしむべし。そのほかの輩は、左右なく訴訟の事を執り申すべからざるの旨、これを定めらるると云々」

頼朝が急死して三ヶ月で、前述の

決定がなされたのである。

若年の頼家を補佐するというのが表面の理由であるが、実際は多年にわたった頼朝の独裁に対する不満があったもので、頼家にも多少の非があるとする。比企・小笠原・細野・和田・中野等の氣に入り御家人の側近のみと交流し、他の者を排したとの事実があったのも確かである。

「比企氏の乱」のあった直前の建仁三年（1203）六月、頼朝の異母弟・阿野全成、そしてその息子頼全が続けて七月に誅された。

これは北条氏による『源家（げんけ）族滅作戦』の第一弾ではないのか。

頼朝の死後一年経った正治二年（1200）には、石橋山合戦で功勞があり、頼朝に仕え信任を得て、有力御家人となつていた梶原景時は北条一族の主導で追われ、一族は滅びている。これも北条氏による『御家人一掃作戦』の第一弾と思われる。

四 頼家の領地を弟実朝と

長子一幡に譲る動きが……。

將軍頼家は建仁三年（1203）七月より病に罹り、臥せていた。

八月、病は止まず、重病と『吾妻鏡』に記す。廿七日の条「將軍家の御不例、こと危急の間、御讓補の沙汰あり、関西三十八ヶ国の地頭職をもつて、舍弟千幡君（後の実朝）に譲りたまつたら。関東二十八ヶ国の地頭ならびに惣守護職をもつて、御長子一幡君に充てられる。ここに御外租比企判官能員、ひそかに讓補する事を憤怒し、叛逆企て千幡君ならびに、外家（がいけ）己下を謀りたまつたらんと擬すと云々。」

この『吾妻鏡』の内容は將軍頼家の病が悪化し、領地の差配を千幡（実朝）と一幡に分けるとの記述であるが、通常は長子・一幡に譲るが普通であり、誰がこの件を決めたのか、不可思議な内容だ。『承久兵乱記』には、頼家の実母政子は、頼家について、「いまだ幼くて、世の政（まつりごと）にも不動にて」と、述べているが、母親の愛情は感じられない、首をかじげたくなる文言である。

五 能員を時政邸に招き謀殺、

御家人衆で比企邸を襲い滅ぼす。

『吾妻鑑』九月二日条「今朝、廷尉（比企）能員、息女（若狭局）

をもつて訴へ申さく、北条（時政）ひとへに追討すべきの由なり（中略）。將軍驚きて病床に招き、談合せしめたまひ（中略）。

しかるに尼御臺所（政子）、障子を隔ててひそかにこの密事を伺聞かしたまひ、告げ申されんがために、女房をもつて遠州（時政）を尋ねたてまつらる。（後略）。

この記述は、大変妙であり、虚言とも思える。その根拠は頼家と母政子は同居しておらず、もし居合わせたとしても、この様な重大な密事を、政子が居る隣の部屋で相談するわけがない。想定できるのは、頼家の側近に政子の手の者が居たとしか思えない。そして、その内容を政子に伝えたものと考えられる。

(27)

続いて、同日の『吾妻鑑』「遠州（時政）云わく、能員謀叛を企つるによつて、今日追討すべし。（中略）遠州この御邸において、薬師如来の像を供養せしめたまふ工藤五郎をもつて使となし、能員が許に仰せ遣はされて……」

以後、『吾妻鏡』は一日の事ながら長文にて引用せず、説明していきたい。

北条時政邸（名越）より比企能

員への招きであったが、比企氏に
対する数々の風聞もあり、家臣達
は能員に対し、弓矢を帯びて訪ね
る様具申すも、能員は仏像の供
養にて、武器を帯びての訪問では、
鎌倉中で騒ぎになると、警護備え
は不要とした。郎等二人、雑色五
人で名越の時政邸に向かった。

仁田忠常(この四日後の九月六
日、時政邸と呼ばれ、第五郎、六
郎と供に殺害される。口封じか)・
天野蓮景の二人が時政邸の両面に
立ち、能員等の到着を待っており、
到着すると能員の左右の手を取っ
て、竹藪に臥せさせ誅戮(ちゅう
りく)罪ある者を殺すこと)した
と記している。

能員の郎等の一人が、比企ヶ谷に
急ぎ返り、一部始終を告げた。
比企氏一族は比企氏館・小御所
に引き籠ったのである。

一方、北条側は北条時政・義時・
小山朝政・畠山重忠・三浦義村・
和田義盛他の御家人衆数十名が雲
霞の如く小御所に襲いかかったので
あった。

比企氏一門も立ち向かうも、北
条側は館に火を放ち、劣勢やむな
く、頼家長男・一幡君の御前にお
いて、次々と息絶えていった。

て権力をふるえるため、比企氏が
北条氏を討とうとした訳ではなく、
北条氏が勢力挽回のため政変を仕
掛けたのであり『北条氏の乱』と
したことは納得できない。

前記の中で「御家人一掃作戦」
に触れたが、梶原景時・比企氏が
滅亡後に次々と行われたので列挙
します。

畠山一族・元久二年(1205)
和田一族・建保元年(1213)
三浦一族・宝治元年(1247)
安達一族・弘安八年(1285)
前記の「御家人……」や「源家
殲滅作戦」共、当方の造語である
が、北条氏は時政・義時等々、北
条徳宗家代々が、陰謀を巡らして
いったのです。

そして、「源家殲滅作戦」は源頼
家の子供達に及ぶ。

・公暁は頼家の第三子で『比企氏
の乱』の翌年に頼家が伊豆修善寺
にて横死の後、政子のはからいで
鶴岡八幡宮の僧籍に入り、父の死
の原因が実朝・北条義時の謀略に
よるものと聞かされていて、復讐の
機をうかがっていたという。

頼家の長男・一幡も焼死し、そ
の遺体は焼け残りの染付の小袖に
より確認された。翌三日、能員の
関係者の捜索が行われ、流刑、或
いは死罪等に処せられたのである。
五日、頼家はやや快復し、一幡・
比企能員等々滅亡を聞き、北条時
政を誅すべく、内々に和田義盛、
仁田忠常等に命じたものの、和田
義盛はこの旨を堀親家より書状に
て時政に報告。しかし、時政は親
家を抑え誅したのである。

頼家は激怒し太刀を手に立ち上
がったが、政子がこれを押さえつ
け、修善寺に押し込めたのである。
そして、翌年の元久元年
(1204)七月十九日の『吾妻
鏡』には「伊豆国の飛脚参著す。
昨日金吾禪閣(頼家)當國修善寺
において薨じたまふの由」と簡単に
頼家の死亡した事を記しているが、
参考文献等からは、北条時政の手
勢が襲い誅殺したとしている。

この「比企氏の乱」と言われるも
のは、たった一日で行われた。頼
家と比企能員の密事を聞いた政子
が、北条時政に伝え、時政邸に能

承久元年(1219)一月、実
朝が右大臣拝賀式挙行の際、実朝
を襲撃、事前に退去していた義時
の代役を務めた源仲章を義時と誤
認して殺害する。
その後三浦義村に援助を求め、
將軍になろうとしたが、義村は北
条と結託、公暁は義村の家臣に討
たれたのである。実朝暗殺は北条
義時が仕組んだものとも伝えられ
ている。

頼家の子息・栄実は建保二年
(1214)十一月十三日、京都で
謀叛の聞こえが高まり、大江広元
の家人が襲ったところ、本人が自
害した。
・同じく頼家の子息・禪暁は実朝
が公卿に暗殺された際には京都に
いた。その後、鎌倉に下向したが、
承久二年(1220)四月十五日、
公暁に同調していた疑いで京都の
東山辺で北条氏により誅された。

竹の御所は頼家と若狭局の長女
であり、「比企氏の乱」で助命され、
安房国に配流となったが、その時
まだ一歳であった。その後、母(若
狭局)出身地の比企郡にて育てら
れた。寛喜二年(1230)、四代
將軍藤原頼経と婚姻。頼経十三歳、
竹御所二十八歳であった。

員を招き殺害し、その後、多くの
御家人衆が比企ヶ谷を襲う等々、
あまりにも段取りが早過ぎるので
はないか。これはその以前から北
条側が有力御家人等と対応を協議
し、仕組んだものとしか考えられ
ない。
又、慈円の記した『愚管抄』には、
比企氏の乱について、頼家が病が
重くなり、一幡に家督を譲ろうと
した。しかし、一幡の外祖父であ
る能員の権勢が高まる事を恐れた
時政が能員を呼び出し謀殺。さら
に一幡を殺そうと軍勢を差し向け
た。一幡はようやく若狭局を抱き
逃げ延びた。十一月になって一幡
は捕らえられ、北条氏の手勢に刺
殺されたという。

六 『明月記』に比企氏の乱の 首謀者についての記録があった…

この「比企氏の乱」については、
私の所蔵本に、『猪隈閑白記』(藤
原家実の日記)、『業資日記』(白
川業資の日記)、それに藤原定家
の日記『明月記』に記されている
とのことで、図書館で検索した処、
前の二つの蔵書は無く、『明月記』
は数冊あるので、借り出してみま
した。

『鎌倉事典』には文暦元年
(1234)七月、竹御所は死産の
後に狂死したとあるが、男子であっ
たため、源氏の流れを絶つために
出産直後に殺害されたと他の文献
に語られているものがある。

今回「比企氏の乱」を主題にし
て考察してきましたが鎌倉時代と
は何だったのだろうかと思えます。
源頼朝が武家政権として幕府を
開設したものの、源氏の將軍は三
代の三十四年で終わり、以降は京
都等よりの傀儡將軍で、実質の権
力者は北条執権・同得宗家(北条
氏の嫡流)であった。

室町時代Ⅱ足利、江戸時代Ⅱ徳
川とも称されているが、鎌倉時代
は二代將軍頼家の代から北条氏が
実権を握っていた。
当方にとって、北条氏のことにつ
いては、権謀術数を謀り、非情な
時政・政子・義時等々、どうして
も好きになれない氏族であるが、
鎌倉時代イコール北条時代と言わ
れても否定できないのも本心であ
ります。

ただ、本件の比企氏に関する記
述は一冊だけなので、これについて
ここに紹介します。
建仁三年九月七日の条

(前略)左衛門督頼家卿薨じ、遺
跡の郎從権を争ふ。其の子外祖、
遠江国司時政の為に討たれ、其の
所従等を京の家々に於いて追捕摩
滅すと云々。金吾(頼家)の弟童実
朝)家を継ぐべき由、宣旨を申す
と云々

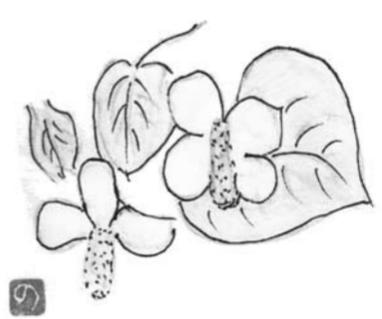
これは鎌倉幕府から京都の後鳥
羽上皇へ、將軍を頼家から実朝に
替えたいとの上奏文であるが、当
時、使送便が京都まで、五、六日
かかるので、鎌倉を発つたのは、九
月一日か二日と想定される。
比企氏の乱が勃発したのが、九
月二日であるので、この奏上文で
は頼家は死去したためとあるが、
死んではいない。

時政は既にこの時、頼家・一幡・
能員の殺害を予定していたことに
なる。
結論的に言えば、歴史上、「比
企氏の乱」として一般化されてい
るが、頼家が病死した場合、嫡男
の一幡が跡を継ぐのが当然であり、
そうならば、比企能員が外戚とし

【参考文献】

- 「吾妻鏡」 貴志 正造 新人物往来社
- 「甦る比企一族」 清水 清 比企一族顕彰会
- 「陰謀の日本中世史」 吳座 勇一 角川書店
- 「鎌倉興亡史・比企一族の乱」 加藤 蕙 秋田書店
- 「訓読 明月記」 今川 文雄 河出書房新社
- 「鎌倉事典」 白井 栄二 東京堂出版

(29)



() 数字はその年の年齢(数え歳)

74 懸命に頑張りました 歴シルキーワード 必死の思い

行け行け必死(1174)に鞍馬を脱出<義経 鞍馬寺を出奔>

◆平安時代 承安4年 甲午 第80代高倉天皇 <院政>後白河上皇



「遊びをせんと生まれけむ」の有名な一節を歌った後白河は今様を愛し、『梁塵秘抄』という歌謡集を編纂した。

後白河法皇 清盛別業・福原へ行幸
3月後白河法皇(48)は建春門院(平滋子33)と撰津福原の平清盛(57)の別業(別荘)に赴く。その足で平氏一門と厳島神社にも参詣。
◆9月、後白河御所で今様の会を開催。



脱出は京で奥州金の商いをしていた金売り吉次(伝説的人物)が導いたとされる。

鞍馬山の寺で過こしていた遮那王(16)は打倒平氏に目覚め出奔。近江鏡の宿で自ら元服し義経を名乗り、藤原秀衡(53)を頼つて平泉に向かう。秀衡の政治顧問である舅の藤原基成は常磐御前(37)の再嫁相手一条長成の従兄弟の子であることから、その伝をたどった可能性がある。

壹岐対馬・必死(1274)の防戦 文永の役<元・高麗軍に來襲に>

◆鎌倉時代 文永11年 甲戌 第90代龜山天皇 7代將軍惟康親王 8代執権北条時宗

蒙古軍神風撤退説
どの歴史書にも文永の役で蒙古軍が嵐により撤退したとの記述はない。蒙古軍は日本軍の予想以上の抵抗に苦戦を強いられ、内陸深く攻め込んだ戦いに兵站の不備など太宰府攻略は攻撃持続が難しいと判断したと考えられる。季節は太陽暦の11月末にあたり、台風による撤退は信憑性がない。



1268年以来、元は日本の帰属を求め従属する高麗を通じ、幾度も服従を促す国書を届けてきた。しかし度重なる黙殺に10月、元・高麗連合軍は対馬・壹岐を侵略し、松浦博多湾から筑前に上陸する。少弐・菊池軍が防戦するも、つぼう火玉に苦戦し全軍大宰府に退き、水城に立てこもり侵入を阻止奮戦する。ところが決着もつかぬ内、10月21日元・高麗軍は一夜にして退却する。

◆255年前「刀伊の入寇」/1019年に刀伊(とい...女真の海賊)が50余船で対馬・壹岐・博多湾に來襲。太宰権帥藤原隆家が奮戦し撃退する。



『蒙古襲來繪卷』肥後の御家人竹崎季長が元寇における戦いを描かせたもの。上図は、文永の役で、矢が飛び交い、つぼうが炸裂する中、馬で切り込む作者。

※1 今様歌...平安中期に始まる七・五の十二音の句を4句連ねる歌曲。後白河が愛好したことで知られる。例。「荒城の月」「螢の光」 (30)

歴シル 鎌倉室町400

1574年(天正2年) 織田信長、長島一向一揆を壊滅

父さん必死(1374)に勧進猿楽<観阿弥 世阿弥親子 今熊野神社で猿楽>

◆南北朝時代 応安7年(文中3年) 甲寅 第98代長慶天皇(第5代北朝:後円融天皇) 將軍足利義満



*大和猿楽四座・結崎座の他に外山座(とびさ)坂戸座(さかど)・円満井座(えんまんいざ)があり、翁をつとめる「長(おさ)」=長老を代表者として、春日社の若宮祭や興福寺・多武峰寺(とうのみねでら)の法会(ほうえ)で、神事猿楽を勤めた。

能発展の足掛かりとなった猿楽興行 古代より祝いの場などで、翁(老人)の仮面をつけた神が踊り語りながら祝福するという様式の芸能があり、鎌倉中期以降、猿楽として定着するようになった。この年大和猿楽四座*の二つ結崎座の観阿弥(42)・世阿弥(13)親子が京東山、今熊野神社で猿楽を演じ將軍足利義満(17)に認められる。以後、義満の庇護を受け大和猿楽は発展する。

◆天竺(印度人)來日、義満に謁見。
◆義満の使僧、島津氏久の使者入明するも明太祖洪武帝に退けられる。
◆良成親王、隈部(菊池)城で懐良親王から 征西將軍職を讓位される。



●観世流と足利將軍との関係
1378年世阿弥、祇園会で義満に近習し公卿衆から批判を浴びる。
1384年観阿弥没し世阿弥は観世太夫を継ぐ。以後(夢玄能)の世界を大成。
4代將軍足利義満の時代
次第に能をみる目が肥え、義持は世阿弥へ細かな欠点の指摘や批評をするようになる。義持がひいきにしたのが、世阿弥が冷えに冷えたりと絶賛した田楽新座の増阿弥(そうあみ)だった。
6代將軍義教の時代
將軍は世阿弥を相手にしなくなり、音阿弥(おんあみ)を重用する。世阿弥や元雅は冷遇され、元雅没後に音阿弥は三世観世太夫(かんせだめ)として観世座を代表する存在となる。※2
1433年足利義教の命により音阿弥が糺(ただ)す河原で猿楽勸進能を行う。
1434年世阿弥70の時佐渡へ流刑
1464年義政が猿楽勸進能を音阿弥・観世又三郎親子による糺河原3日興行で行う。

遺児が必死(1474)に和睦講和 <山名政豊、細川政元の間で講和>

◆室町時代 文明6年 甲午(きのえうま) 9代將軍足利義尚 第103代後土御門天皇

應仁の乱、終息へ向けて東西講和 応仁の乱の東西派閥の領袖だった細川勝元、山名宗全の遺志を次ぎ、双方の嗣子、聡明丸(細川政元)(9)、山名政豊(34)の間で4月講和が成立。しかしこれに東軍の赤松政則(20)、西軍の山名義就(38)が猛烈に反対した。京を舞台とした戦 8歳で家督を継ぐ、5年後には3年後 元服。後に將軍の掛け替えを行う時の権力者になる。
聡明丸 政元後見人
細川政元(47)
山名政豊 講和はしたものの 閏5月 山名義就、日野勝光を通じ東軍と講和 7月 大内政弘や山名義就、土岐成頼ら西軍の諸將が上京、北野に放火。
西軍総帥・山名政豊がこの鎮庄に動く。 9月 菊池大友の北九州大内領への侵攻に 大内政弘は本国に帰国
◆【加賀】加賀一向一揆蜂起。西軍の富樫幸千代、高田派門徒と組み、兄の東軍富樫政親を攻撃。政親、本願寺派門徒に援軍要請。



※2 音阿弥...「最一の上」と呼ばれ世阿弥が築いた観世流を発展させた。足利義政も高く評価、幕府権力との結びつきを強固にする。 (31)

鎌倉室町400

1081年(永保元年)「園城寺炎上、山門×寺門の争い」
1581年(天正9年)「信長 京禁裏で馬揃え」

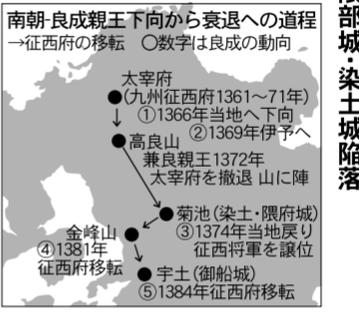
見参もはい(1381)それまでの御円融 <御円融天皇 室町第落慶の園遊に>

◆南北朝時代 弘和元年(永徳元年)辛酉 第98代長慶天皇(第5代北朝:後円融天皇)3代将軍足利義満

「天皇なんてやってられない!」
南朝方征西府の衰退 肥後隈部城 染土城陥落
今川軍(九州探題)は籠城を続ける良成親王(懐良親王の甥)の染土城(鷹取城)、菊池武朝(19)の隈部城(菊池城)を陥落。親王・武朝は肥後金峰山に退却する。以後宇土に征西府を移す等、再起を図るも衰退の一途をたどる。



花の御所「室町第」落慶に後円融天皇行幸
3月後円融天皇(24)は内裏の二倍はある見事な御所を訪れ、同じ歳で従兄弟でもある将軍義満(24)に権勢の力の差を見せつけられる。朝廷は鎌倉開幕以来、公武共立の立場を維持していたが、この頃より武家が上位に立つ時代に入る。
6月義満は内大臣となり、父祖の官位を超える。
後円融は翌年義満に促され後小松天皇(5)に譲位。以後みじめな上皇の道を辿る。



殿よはい(1481)それまででございます <足利義政 富子との仲決裂>

◆室町時代 文明13年 辛丑 第103代後土御門天皇 9代将軍足利義尚

東山文化の能筆家 逝去
日本無双の才人 一条兼良(80)
左大臣・摂政を務めた後、義政夫妻の庇護の下、政道指南にあたり共に有職故実の研究から和歌・連歌に傑出。



「ふいと出たきり、はいそれまでよ!」
*建武3年(1336)足利尊氏が九州に敗走する際、「勅使」として三室院賢俊(日野賢俊)が北朝の光厳上皇の院宣をもたらしたことが尊氏の起死回生となる。この結びつきが足利将軍家と日野家の関係の端緒となる。

風狂の吟吟僧 一休宗純(88)
臨濟宗大徳寺派の僧。後小松天皇の御落胤とも言われる。書画、詩に優れ風狂の生涯を送る。『狂雲集』『自戒集』等。

時代狂句 富子さん銀を集めて増やせども義政散らす銀を欠くなり

狂句 上州遊山

(33) ※2 聖護院御坊…聖護院は1468年応仁の乱で焼失されたまま、洛中からこの地に再興されていた。その後秀吉が烏丸に院を移す。

() 数字はその年の年齢(数え歳)

81 戦い、人間関係にケリ 歴シルキーマード はいそれまで

日々はい(1181)それまでよ入道殿 <盛者必衰の始まり 平清盛「あっち死」>

◆平安時代 養和元年 辛丑 第81代安徳天皇 <院政>高倉上皇

大仏のたたりか 怨念を背負い清盛悶死
前年末、清盛の命を受け平重衡が反平氏の東大寺・興福寺などを焼打ち。大仏殿も焼失した。1月高倉上皇(21)が死亡。安徳天皇(4)の下での清盛の権力構想が崩れる。閏2月清盛(64)は「あっち死」病※で悶え死ぬ。巷は「仏の罰が当たった」と叫んだ。嫡男重盛の死から続く清盛の不安は頼朝拳兵で頂点に達し、今わの際に「俺が死んでも堂塔はいらぬ。墓前に頼朝の首を供えよ」と言い残した。

養和の大飢饉…京中に餓死者が溢れる
この年春、夏はひどり、秋には大風・洪水などの災害続きで諸国が飢饉に*。
死者は4、5月、京の内だけで4万2300体。飢饉は年を越し二年が間世の中飢渴して、浅ましきこと侍きて」と鴨長明「方丈記」に記述。
◆2月平重衡、頼朝追討へ。
◆3月源行家、墨俣川で大敗。
◆8月重源、東大寺再建のため勸進を始める。
◆8月頼朝、法皇を通じ和陸申入れも宗盛が拒否。
◆9月義仲、越前に平道盛軍を破る。



*飢饉は翌年まで西日本全体に及んだ。京の混乱は木曾義仲の拳兵、上洛を容易にする遠因となり、頼朝拳兵後の源平合戦の膠着状態にもつながった。

旋風 はい(1281)それまで弘安の役 <蒙古再度襲来も台風に会い壊滅>

◆鎌倉時代 弘安4年 辛巳 第91代後宇多天皇 7代将軍惟康親王 8代執権北条時宗

東路軍(高麗軍)
① 5/3合浦発、同日対馬着 8日頃までに全島掌握
② 5/15頃、壱岐掌握
③ 5/26志賀島着 拠点地
④ 6/6増派×日本軍反撃
⑤ この間東路軍長門侵攻 本隊終戦まで志賀島駐留
⑥ 指揮官・張成ら一部壱岐へ移動
⑦ 7/27張成ら鷹島移動(連絡補給のため)
⑧ 閏7/1台風が襲う
⑨ 閏7/5 博多湾で敗北撤退



江南軍(旧南宋軍)
① 6/25~29宇久島・小値賀島
② 7月始め平戸7/15鷹島着
③ 7/27張成ら鷹島に着
④ 閏7/1台風が襲う蒙古船被害甚大、張成逃走
⑤ 閏7/7鷹島、日本軍追撃、海上・陸上戦で江南軍敗北



元東路・江南の連合軍を二手から侵攻を計る
文永の役以後、幕府が鎮西の警護を固める中、元は宋を滅亡させ再度日本へ侵攻を図る。5月東路軍4万人(高麗を主とする先遣部隊)が対馬・壱岐に上陸。博多湾志賀島へ襲来し占拠する。島を拠点に攻撃目標を大宰府に定める。博多湾に防塁を固めた日本軍は奮戦する。7月東路軍に2ヶ月以上遅れて江南軍10万人(旧南宋軍)を松浦鷹島に送り込む。ところが玄海灘を大暴風雨が襲う。元の連合軍は撤退を図り、日本軍は追撃に転じる。特に江南軍は艦船が脆弱なため暴風で破壊され壊滅的となる。総勢14万人のうち、生還者は3万3千人に過ぎなかった。

※1 清盛の死…「あっち死」石の風呂に入れ比叡山の水を浸すも、たちまちお湯になった。病はマラリア、猩紅熱などとされる。

時代狂句 悪知恵の熱が巡りて清盛も赤く茹でられ蜻入道

監修 高尾 隆

(32)

会員研究

「幕末の仙台藩と鴉組隊長

細谷十太夫の生涯」

長谷川憲司

幕末期における仙台藩を巡る
政治の推移

幕末の仙台藩最後の藩主伊達慶邦は天保十二年（1841）九月に十七歳で襲封した。仙台藩は天保・弘化・嘉永年間を通じ、毎年天候不良による凶作が続ぎ、数十万石の減石が続いた。農村の疲弊は藩の財政を脅かし、武士の生活の困窮、さらに土風の頹廃をもたらした。仙台藩は江戸幕府では外様大名であったが、幕府とは家康以来伝統的に親近関係にあり、幕末においても、開国と佐幕を基本的な政策としていた。

嘉永六年（1853）ペリーがこのような時期に日本に來航した。七月一日幕府は米国の国書を全国の諸大名に示して意見を求めた。これに対して伊達慶邦は開国拒否の態度を表明したが、直ぐには外

国の圧力を排除できないことはわかっていたので、当分は国防の充実を図ることが大事であると常識的な論を表明している。

安政元年（1854）ペリーが再度來航したので、仙台藩では山崎源太左衛門に士卒を率いて江戸の警備に出府させた。さらに仙台藩の藩校である養賢堂学頭大槻習斎、兵学主任小野寺鳳谷に命じて、西洋式大砲の鑄造を開始させた。

幕府は安政二年（1855）に蝦夷地の一部の警備を仙台藩に指示したので、藩は氏家秀之進（後の七十七銀行初代頭取）を指揮官として、士卒二百二十余人を蝦夷地に派遣した。安政三年（1856）に入ると、藩は銃術の鍛錬など兵備の強化、さらに松島湾に造船所の設立などを行った。安政四年（1857）には国内最初の西洋型軍艦開成丸の建造・進水に成功している。安政五年（1858）幕

府大老井伊直弼が米国の通商条約を勅許を待たずに締結し、世の中は騒然となった。仙台藩は表面では攘夷を唱えていたが、内実は幕府及び諸藩の動向を見て、中立の立場を基本方針としていたのである。

安政六年（1859）幕府は東北諸藩に蝦夷地の一部の分割領有を命じた。しかし、仙台藩は翌年より毎年の不作と蝦夷地維持のための負担が重く、連年の石高損耗に陥った。

文久二年（1862）からは京都における攘夷運動の嵐が激化し、翌文久三年（1863）五月の攘夷決行に向けて、孝明天皇から仙台藩に対して攘夷の態度を明確に示すようにとの内勅が伝達された。

文久三年（1863）年頭には藩内で尊攘派と佐幕派の対立が激化した末に、佐幕派は国老但木成行らを中心に尊攘派の遠藤充信、中島虎之助、大条孫三郎、さらに勤皇派の理論家の桜田良作らを失脚させ尊攘派を抑えて、藩主慶邦は、將軍徳川家茂の三月の上洛に合わせて自ら随從上洛した。幕末期において藩主慶邦が京都に姿を現したのは、この時だけであ

る。しかし、仙台藩は財政の窮乏により長い間京都に滞在することができなかった。慶邦はわずか二十三日余りで、北方の防備を固めることを理由に京都から帰国の途についた。経済的な理由以外にも長く在京すると、政局に巻き込まれることを嫌ったことも重大な要素である。

このように慶邦も重臣も攘夷と開国、尊王と佐幕の対立に対して中途半端な中立主義を取ったことで、幕末政局の中央で活躍する機会が永久に失われたと考えられる。さらに、元治元年（1864）には、將軍上洛中、慶邦は江戸の警備を仰せつかり出府している。慶邦の苦悩と藩内の動揺は、かなり深刻なものであったが、藩の大勢は佐幕的な中立主義に傾いていたので、將軍家茂の江戸留守・和宮警護の任務は拒否できない状況でもあった。七月には蛤門の変が起

(34)

こり、八月には將軍は再び第一次長州征伐のために上洛した。そのために再び仙台藩に江戸警備のための出府の命が下ったのである。当時は東北の雄藩として仙台藩には朝廷と幕府の両方から強力な働きかけが行われていたのだが、

京都、西国諸藩の革新的な動静をすばやく察知できず、地理的に江戸に近いこともあり、それから佐幕的な中立主義を貫いていくことになった。これに対して、藩内で大河内大炊左衛門や玉虫誼茂（よししげ）らは幕府の滅亡も遠くないと考え、幕府の運命を洞察しながらも、会津藩のように積極的な行動に出ることのないようにと藩主に進言している。

第一次長州征伐後、倒幕を目的として薩長同盟が成立した。慶応元年（1865）五月になると第二次長州征伐が開始された。今回も前回と同じように仙台藩に対して、江戸守衛の出府が命じられた。このような中央政治からの回避、藩の中立政策の保持をもってしても、藩政を立て直すことはできなかつた。文久三年に五十六万石、元治元年に五十七万石、慶応元年に五十九万石、慶応二年に八十六万石、慶応三年に五十五万石と記録がある。藩は緊縮財政でやりくりしようとしたが、幕末における国内情勢の悪化で国防のために相当額の出費を行わなければならなかつた。例えば、藩内各所に砲台を築き、外国から三万石積

みの西洋船を購入し、また旧式火縄銃を新式のゲヴェル銃、ミニール銃に交換したりしたが、破産に瀕していた当時の藩財政は赤字財政で困窮を極めていたのである。それでも他の西日本の雄藩に比べれば、軍備は貧弱なものであったのである。このような背景の下、江戸や大阪における資金の調達に苦しくなつた藩は、城下の商人から銀を借入、また地方の豪商、豪農に対して志願金、調達金の上納を命じたりしたが、これがこういった特権階級の商人・豪商・豪農などと小作農民との格差が拡大し、藩内各地で一揆が勃発する原因を作ってしまった。幕末期の仙台藩では、このように藩と商人、藩と農民との連帯感が崩壊していったのである。

明治初年の仙台藩の動向と 戊辰戦争

慶応三年（1867）將軍慶喜は大政を奉還することを決めた。慶喜の考えとしては、今後展開される天皇親政において、諸大名の筆頭として徳川家が指導的役割を果たさうとの狙いがあったのであ

る。これによって朝廷は諸藩主に對して、大政奉還後の衆議のためを上洛するように命じた。仙台藩主慶邦に對しても、朝廷からの召喚が十月にあったが、慶邦は病氣を理由に国老の但木成行を藩主に代わって上洛させた。この衆議によつて、慶喜の狙いとは逆に急転し、新政府から慶喜を除外するばかりでなく、その辞官と納地返還を決定し、さらに慶喜追討、会津藩攻略の命が下されたのだから、この決定による仙台藩内の動揺も多大であった。これに對して幕府側が憤慨し、翌明治元年（1868）一月三日鳥羽伏見の戦いが始まったのである。仙台藩内の最高階層の一門からは、藩主に建白した。その内容は、新政府は薩摩や長州など少数藩によつて操られていながら、東北諸藩を初め佐幕的諸藩に呼びかけ、反新政府同盟を結成し、奸徒の一掃を図ることを勧めている。徳川家の恩顧を重視し、今後の行動は全て徳川家の諒解のもとに信義を尽くして進退を決める必要があると極論しているのである。

政権は既に傾いているので、これを後押ししても無駄であると反対の意見も出している。藩内のこの佐幕・勤皇対立の空気を反映して、藩主慶邦は明治元年（1868）二月に入り、朝廷に對して、遅まきながら幕府側を擁護する建白書を作成し、朝廷に建言を行った。しかし、去る慶応三年十月の朝廷からの召喚にも藩主慶邦が欠席し、このような建白を行ったことは仙台藩及び慶邦の情勢判断の甘さを露呈したものであったと考えられる。

(35)

明治元年二月に入り、有栖川熾仁親王が東征大総督に任ぜられ、奥羽鎮撫総督も下向する形になった。東北諸藩はいずれも仙台藩に時局に関する進退の指示を請い、仙台藩を盟主として共同戦線を結成しようという兆しがあったが、三月末には奥羽鎮撫総督九条道孝が薩摩、長州、筑後の兵を率いて仙台に到着し、会津藩と庄内藩への追討を命じた。ここで四月初めに慶邦は藩兵六千名を動員して仕方なく会津追討を開始したが、四月二十九日会津藩は謝罪降伏のための使者を派遣したので、一時休戦し協議のために奥羽諸藩

を集めた。この経緯については、仙台藩内で佐幕派と勤皇派双方の対立があったが、国老但木成行の主導による、偽装の会津追討軍派遣は、会津藩の謝罪降伏を外交問題として新政府に申し出るための見せかけの派遣であった。このような仙台藩の煮え切らない態度に対して、鎮撫総督府が仙台藩の出兵を督促したのである。

五月に入り仙台藩と米沢藩は奥羽列藩の意思を取りまとめ、会津の謝罪降伏を実現しようとし、仙台・米沢両藩主の嘆願書、奥羽列藩の軍隊がそのまま保持されれば、新政府の方針に対して、武力で対抗することが考えられるので、武装解除を行う必要があったのである。

閏四月二十日会津藩兵は白河城を襲撃して官軍を敗走させた。奥州列藩は同日白石同盟を成立させた。ついで、庄内藩の追討を命じ

られた奥州各藩は太政官に解兵の届けを出し、同盟して西軍に対抗する意志を示した。仙台藩は軍事局を福島に置き、坂英力を指揮官として、白河城を防御することとなった。この白河城攻防戦は戊辰戦争の天王山であった。

しかし、仙台藩が盟主となり二十五藩からなる奥羽列藩同盟が成立し、さらには越後の諸藩もこれに加わり、奥羽越三十一藩の同盟に発展した。同盟軍は薩長を主体とする西軍を君測の奸賊と見なし、交戦を行うことになった。閏五月一、二日の両日、西軍と列藩同盟軍の間に攻防戦が展開されたが、同盟軍は敗北した。この奥越戦争は五月から九月まで四ヶ月に亘り、最終的には仙台藩の降伏、会津若松城の陥落を以て終焉となるのである。仙台藩は、白河口、相馬口、越後口、秋田口に派兵し、同盟軍の中心となって活動したが、各方面で敗れ、退却を余儀なくされた。その間に奥州の各藩が次々と同盟を離脱し、最後には仙台藩と会津藩のみが孤立したのである。

八月十日仙台城で戦闘継続か休戦降伏かの会議がもたれ、仙台藩の謝罪降伏が決定した。九月十八

日藩主慶邦は仙台城を退いて、亀岡の別邸に謹慎した。会津藩も九月二十三日には鶴ヶ城を開城し、戊辰戦争はここに終結した。当時仙台藩の領内の寒風沢に停泊していた旧幕府軍榎本武揚らの艦隊は、降伏に反対する藩士や旧幕府軍が合流し、十月十二日に北に向かった。二十一日には仙台藩主慶邦は東京に移され、芝増上寺に蟄居を命ぜられ、仙台藩は二十八万石に削減された。この戦役における仙台藩の死者は千二百六十人であった。

鴉組隊長細谷十太夫の生涯

白河口の攻防戦が激化したとき、仙台藩に一人の民衆的な英雄が現れた。その人は、鴉（からす）組隊長細谷十太夫直英（なおひで）である。十太夫は天保十一年（1840）生まれで、幼くして両親を亡くし、祖父に育てられたという。家は五十石の虎之間番士であった。微禄であったので、教育も受けなかった。二十歳で作事方、郡役人に召し出され、原野の開発を献言して、山林植立方に任用されたりしたが、戊辰戦争が起こる

と、探索方を命ぜられ、米沢、庄内、白河、水戸方面に潜行し、藩の隠密となる。その間、旅籠屋の下男、料理屋の番頭、女郎屋の妓夫（ぎふ）、孫太郎虫（民間薬）の行商人などに身をやつし、各地の目明（めあかし）や博徒の親分と交際して密偵の役目を果たした。

潜行中、須賀川で五月一日白河口の敗報を聞いた彼は、あまりのふがいなさを嘆いて、自ら戦場に身を投じることになる。単独で柏屋という女郎屋に「仙台藩細谷十太夫本陣」の看板を出して民兵を募ったところ、付近の侠客、博徒、雲助、猟師、馬方、農民など五十七名が集まった。そこで「衝撃隊」と名付け、黒装束に身を固め、槍と長刀を武器に夜襲専門の舞台を組織した。黒装束を身にまとい、カラスの隊旗を掲げて戦ったので、人呼んで「鴉組」という。後に十太夫はその隊名にちなんで、ペットとしてカラスを飼っていたらしい。

(36)

けりや官軍高枕」とあるが、

十六ささげとは棚倉藩の残党で鴉組に加わった十六名のことである。鴉組がいかに神出鬼没の働きをして、藩軍を力づけ、地方民の人気を博したかが知られている。その戦績は三十余戦無敗で、新政府軍は鴉組を大いに恐れたという。しかし、藩軍の後退とともに鴉組も領内に引き揚げたが、十太夫は藩主慶邦の信任も厚く、引き続き出仕して、榎本武揚らの幕府脱走兵の処置などに奔走した。

仙台藩降伏後の十太夫は、鴉組の維持に苦心し、一時仙台を引き払って加美郡王城寺村に移ったが、明治二年四月藩庁内に旧佐幕派狩りの大獄が起きるに及び、リストに名前の挙がっていることを知った彼は、鴉組屯所の片平町鮎貝屋敷を出奔し、地下に潜伏した。しかし、遠方まで逃走したのではなく、市中の侠客の家や料亭に隠れ、近郊の定義温泉に潜み、巧妙に捕吏の手を逃れた。その間千両の金を調達し、鴉組を解散させている。十太夫の逃亡の成功は、まさに民衆の東北領内で横暴を極めた官軍に対する抵抗の表現でもあった。

明治二年十二月に入り、逃亡生

活に終わりを告げた十太夫は、明治三年正月、藩士三好清篤（清房の子）に従い北海道に渡った。新政府が仙台藩に割り当てた、日高国紗流郡開拓のためである。ここで先に彼が函館に脱走させた仙台藩額兵隊長の星惇太郎ら八十五名の引き渡しを受けた。そして星らと協力して開拓に従事したが、成功せず、次いで行政改革により仙台藩開拓所は、北海道開拓使庁に吸収され、十太夫も同庁の吏員となった。その後、西南戦争役が始まると、川治利路が指揮する第三旅団に少尉として参戦し、「戊辰の仇討ち」とばかりに西南戦争で活躍している。明治十一年宮城県士族授産場係となり、明治二十五年

鹿鹿郡大街道士族開墾場長として功績をあげた。日清戦争が始まると中国に渡り、兵站を統括する軍夫千人隊長となり、人夫を率いて仙台第二師団とともに参戦した。帰国後は仏門に入り、かねて敬慕していた「海国兵談」で江戸時代によく知られた林子平の墓所「竜雲院」の住職となり、明治四十五年五月六日六十八歳で往生した。法名は「龍雲院八世鴉仙直英和尚」。彼の生涯はまことに波乱に富

み、純情と熱血で一貫した地元民衆の英雄にふさわしい生涯であった。

「細谷十太夫陣羽織」



「晩年の細谷十太夫」



主な参考図書

- (1) 平重道 「仙台藩の歴史」
- (2) 伊達政宗・戊辰戦争 宝文堂「からす組」上・下 徳間文庫
- (3) 早乙女貢「からす組」 講談社文庫
- (4) 仙台市博物館所蔵資料



会員研究 大伯皇女

我が背子・別れ 遠田千代吉

一 はじめに

大伯皇女の生涯を象徴する歌がある。『萬葉集』巻第二一〇五番歌である。

「天津皇子、竊かに伊勢の神宮に下りて、上り来る時に、大伯皇女の作らす歌

我が背子を 大和へ遣ると さ夜更けて 暁露に 我が立ち濡れし」

大津皇子が、ここ齋宮に突然に現われたのは、昨日の夕刻であった。十三年ぶりの同胞の弟との再会にも天は時を与えず、語り明かした夜明けを前に、もう大和に帰らねばならない。今生の別れかも知れない今、未だ明けやらぬ、冷え冷えとした晩秋の鶏鳴に、いつまでも帰りゆく弟の後姿を追いながら立ち尽くす。この姿こそ大伯皇女の生涯を象徴する。ここでは、この一〇五番歌の題詞にみる「竊かに」の記述に大津皇子の謀反にかかわ

る歴史上の真意を探り、また、その実態をみていきたい。

二 天武天皇の崩御・殯と大津皇子の「謀反」

(一)『日本書紀』の記す経緯
六八六年、天武治政一五年となり、朱鳥と改元された。前年より病がちであった天皇は、病臥に伏し、七月、重大な勅を発した。

「天下の事、大小を問はず、悉に皇后及び皇太子に啓せ」
再起の望みをなげき失った天皇は、この段階で既に、天皇としての大権を鷗野讚良皇后と草壁太子の二人に委ねたのである。九月に至り天皇は重篤の状態に陥り、九日崩御した。

『日本書紀』(以下書紀)に記される天武天皇の崩御から殯(もが)り、さらには大津皇子の謀反に關わる記載は時系列順にみると以

下のとおりである。

○天武紀

①朱鳥元年(六八六)九月九日「天皇の病、遂に差えずして、正宮に崩りましぬ」

②九月十一日「始めて発哭る。即ち殯宮を南庭に起す」

③九月二十四日「南庭に殯す。即ち発哀る。この時に當りて、大津皇子、皇太子を謀反けむとす」

④九月二十七日「是の日に、擊めて奠進りて即ち誅する」

⑤九月三十日「持統紀」

⑥朱鳥元年一〇月二日

「皇子大津、謀反けむとして発覺れぬ。皇子大津を逮捕めて、あはせて皇子大津がために註誤かれたる舍人(四名・名省略)、新羅沙門行心、及び帳内礪杵道作等、三十余人を捕む」

⑦一〇月三日「皇子大津を詔語田の舎に賜死む。時に年二十四なり」

(二)殯儀礼

大津皇子の天皇崩御後の行動及び「謀反」なるものの理解の為、ここでは葬儀礼としての「殯」を理解しておきたい。殯は、古代日本にみられる特徴的な葬法で、遺体を死後すぐに埋葬せず、一定期間安置して儀礼を行う風習である。特に天皇の殯は、宮廷行事として、一定期間、定められた方式で莊重に行われる。西郷信綱氏は『古代人と死』のなかで、殯が二段階で行われ(殯の二重構造)、その意味合いについて述べているので、その所論を天武の殯に当てはめてみよう。

○第一段階 殯宮内部での私的な秘儀 天皇の「自然的身体」に対応するもの

殯宮を建て、女性の近親者や女官、遊部(呪術によって魂に働きかける品部)が、殯宮内部で奉仕する。死者の甦りを願い、死者への呼びかけとして哭し、歌・舞が執り行われる。

先に時系列順にみた天武葬礼のなかで、②以降の期間が、これに当たる。

○第二段階 殯庭で行われる公的

な儀礼 天皇の「政治的身体」に対応するもの

公的空間としての殯庭で、慟哭し、王族・官人・有力豪族・僧尼等が各々の立場から、死者の事歴・事蹟としての「誄」を奉る。この誄は現代の弔辞に当たり、誰が、何の誄を奉るかは、天皇とのつながりと宮廷内の位置を反映し、政治的には極めて重要な儀礼であった。また、この殯庭での公的儀礼は、死者の魂鎮めであると同時に、「新帝の即位儀礼」の予祝でもあったことを認識しておく必要がある。

このことが殯の期間中に、様々な複雑な政情が生まれる背景となったのである。

天武葬礼のなかでは、③の九月二四日から、⑤の九月三〇日まで南庭での殯が、この第二段階に当たる。

(三)殯期間中の鷗野讚良皇后

殯期間中の皇后の動静は『書紀』に伝わらない。天武葬礼の②にみる殯宮内に籠もり、儀式を主宰するとともに、それに続く殯全体を取り仕切っていたものと思われる。これを通じて皇后・皇太子路線が「新帝」となることを宮廷の内外に見せ、歩を進めていたと思われる。

このなかで注視すべきことは皇后・皇太子側での監視網の確立であり、殯宮内に籠もる時でも、この監視の目は光っていた。皇后・皇太子路線に阻害となるものは全て排除されるのである。この監視政策は、皇后の陰湿な個性と捉えるべきではない。天武朝由来の既定路線であり、天皇との共治体制をすすめた皇后の継続した路線であった。

三 大津皇子の動静

このような状況下、大津皇子は苦境に立ち、伊勢に姉を訪ねる。次に、その動静をみてみよう。

(一)大津皇子の人柄、周辺の期待

大津皇子の人柄について『書紀』は、次のように記す。

「容止墻く岸しくして、音辞俊れ朗かなり。長に及びて弁しくして才学有す。尤も文筆を愛みたまふ。詩賦の興、大津より始めり」

また、天智勝宝三年(七五一)に編纂された漢詩集『懷風藻』では、次のように記述する。「幼年にして学を好み、博覽にして能く文を属る。壯に及び武を愛

す。多力にして能く剣を撃つ。性頗る放蕩にして、法度に拘わらず、節を降して士を礼し、是に由りて人多く付託す」

ここにみるように、大津皇子は文武ともに優れ、人柄も親しみやすく、宮廷の内外で大津皇子の声望は高まっていたと思われる。これに対し草壁皇太子は、比較的温順な人柄で、病弱ぎみであったと思われ、嫡子草壁の皇位継承を悲願とする鷗野讚良皇后にとっては、この点が苦悩の種であった。この意味から、大津皇子への宮廷内外の期待の高まりを警戒し、大津皇子の動静をきびしい監視下に置いていたと思われる。

(二)大津の莫逆の友・川嶋皇子

「莫逆」は、漢風の表現であり、「逆(さか)らうこと莫き」の意で、『懷風藻』のなかにみえる。従って莫逆の友とは、裏切ることのない親友の意味となる。川嶋は天智帝の皇子で、大津皇子の六歳年上であり、川嶋・大津の両名は気が合

い、惹かれあう仲間であった。天武朝において、遺る天智帝の皇子は、川嶋・芝基の二名であり、天武八年(六七九)年の「吉野の盟

約」においても川嶋皇子には、特別の配慮がなされている。また、川嶋皇子の妃は、天武の子・忍壁皇子の妹泊瀬部皇女であり、宮廷で重きをなす立場であった。これだけの重要人物が大津皇子と親密な関係にあり、皇后・皇太子側でも、日ごろから警戒の目を向けざるを得ない存在であったと思われる。

(三)大津皇子の伊勢下向 ― 何故、何時(いつ)、皇子は伊勢に向かったのか ―

この問題に関しては、数多くの論究がなされ、詳細な検討が必要であるが、紙幅の都合上、結論の言及にとどめた。

①なぜ伊勢に向かったのか。

父天武帝の崩御により、大津皇子は自らの運命を察知したのではな

れて以来、もう十三年も逢っていない。明日をも知れぬ窮地に立た今、一目だけでも愛する姉に逢いたい。この気持が大津を伊勢に走らせた。またこの行動を採らせ背景に、「法度に拘わらない」持前の「奔放さ」もあつたかもしれない。ともかくも、切羽詰まった死の淵で、その心を癒やしてくれ「姉」にすがつたことが、大津皇子の伊勢下向の実相だと思ふ。

②いつ伊勢に向かったのか。

今や有名無実化したとはいえず、大津皇子自身「朝政を聴しめす」立場であり、天武生前は、伊勢下向の行動はとれない。また、父・天武の重篤という状況の錯綜するなかでは、自分だけの意に沿うこととはしない。従つて崩御が既定事実となつてから、二日おいて殯宮内の私的儀式の開始後、南庭での殯の公的儀式が始まる前に、伊勢下向は行われたと推測する。前述した天武葬礼の、②と③の間（九月一日～二四日の間）に伊勢下向は行われた。

③なぜこの伊勢下向が「竊（ひそ）かに」となるのか。

先に見た『萬葉集』一〇五番歌

の題詞では、大津皇子の伊勢下向が「竊かに」行われたと記述されている。「竊かに」は、現代表記では「窃（ひそ）かに」となる。「竊かに」という言葉で規定される行為は、古代社会における禁忌（タブー）を破つたことを意味する。まさに、この伊勢下向が、皇子の意識の存否を問わず、次の二点から、禁忌破りとなつた。

であつても私的に齋王に会うことは禁忌に触れる事であつた。

四 高見越え

ここでは大津皇子の伊勢下向が、どのように行われ、また中味の様相はどうであつたのか、検証をしてみたい。

（一）辿つた道 — 高見越え —

○その一 養老令（養老）・（養老）令請假条に、五位以上の者が「畿外に出でんと欲はば、奏聞せよ」と定められている。この掟は、天武朝でも慣例として存在したと思われる。伊勢は畿外であり、独断での下向は禁忌に触れる。

大津の伊勢下向は隠密裏に行われた。従つて尋常の道筋はとれず、次の条件を充たす道筋でなければならぬ。①官の眼を避けるため、驛家がないこと、②短い日数での往復のため、出来るだけ短距離であること。当時飛鳥から齋宮に向かう官道は、青山峠を越え阿保・川口・松阪を経て向かう路であつたが、先の二条件を充たす道筋は高見峠越えである。この路が飛鳥と伊勢とを結ぶ最短路である。飛鳥から忍坂を経て、東吉野に沿つて遡り、高見峠を越え、櫛田川に沿つて下る険阻な道である。飛鳥から齋宮まで、ほとんど直線距離に近く、二七里（一〇八km）ほどの道程である。大津皇子は、この路を、騎乗で辿つたと推定している。

（二）馬の一日の走行能力
先に見たように、飛鳥から齋宮までの距離は、高見越えでほぼ一〇八kmである。この距離は、はたして馬が人を乗せて、一日で行くことのできる距離なのであろうか。片山寛明氏は『馬の博物館研究紀要』のなかで、内外の記録を比較したうえで、次のように結論を記述している。「馬が一日に走破できる距離は、現代の耐久競技が示している一六〇kmくらいを最高値として、ほぼ八〇～一〇〇kmが標準的ということにならう」。高見越えは苦行となるが、一日で走破可能な距離である。

(40)

（三）馬の走行速度
馬の歩様・走行の形態は、次のように区分される。「常歩」・「速歩」・「駆歩」・「襲歩」の四つで、徐々に速度が増す。長距離の走行の場合、馬のスタミナ配分に注意する必要があるが、この歩様の組み合わせが進む。また、馬、人ともに休息も不可欠である。急ぐときは速歩一〇分、常歩五分、強めの速歩一〇分、常歩五分というように緩急を交互に交え、一時間に一〇kmを行くことも可能とされている。

江戸時代の江戸、鎌倉（五二km）間の遠騎の記録でも、往路、復路ともほぼ五時間で走破しており、一時間に一〇kmの走行は、ほぼ目処とすることができる走行速度である。従つて飛鳥、齋宮間の一〇八kmは、休息も入れ、ほぼ一二時間で走破が可能とみてよい。つまり朝早く出て、夕刻に着く、一日の行程とみることが出来る。

（四）大津皇子の乗馬技術
『懐風藻』に漢詩「遊獵」を残す皇子は、狩りも名手で、騎馬の術にたけていたと思われる。また、日ごろから壮健な馬を手許で、手なずけていたのではないだろうか。大津皇子は、その気になれば乗馬による緊急の遠出も対応可能であつたのである。

（五）騎乗による伊勢下向の様相
ここにみるように、大津皇子の伊勢下向は、姉に逢うべく、天武崩御後、公的殯儀礼の始まる前の合間をぬつて、隠密裏に行われたと推定する。具体的には、大津は、朝まだ暗き早朝に、人知れず飛鳥を出て、夕刻に齋宮に到着した。十三年ぶりの再会に、二人は夜を徹して語り明かし、まだ明けやらぬ夜明けに、馬を駆つて、帰途に

ついたと思われる。飛鳥には、夕刻の闇にまぎれて入り、二日かかりの行動であつた。

五 大津皇子の「謀反」の実態

大津皇子に謀反の意思はなかつたと思う。しかしながら皇子の動静に眼を光らせる皇后・皇太子側では、この禁忌に触れる伊勢下向を察知した。その結果が殯儀礼一段落後の機敏な対処につながつた。『書紀』に記す「謀反」は、二段階の記述となつている。

○第一段階 天武葬礼・③南庭での公的な殯儀礼開始の前

意図はともかくとして、禁忌に触れる大津皇子の伊勢下向が、ある意味口実を探していた皇后・皇太子側に察知され、危険な「謀反」の兆候とされた。

○第二段階 ⑥殯儀礼が一段落し、葬儀が一区切りの後

『懐風藻』は川嶋皇子の密告なるものを記す。「始め大津皇子と莫逆の契（ちぎ）りを為し、津の謀逆に及び、嶋乃ち変を告ぐ」。この川嶋皇子の密告が、大津皇子謀反の発覚につながつたとされている。しかしながら実態は、大津と親し

い間柄にあり、同じく監視下にあつた川嶋を、皇后・皇太子側が喚問し、一定の言質を引き出したのであるだろうか。大津は日頃から親しい川嶋に、伊勢に姉・大伯皇女の許を訪ねたこと、さらには親友ゆえに心中の苦衷を訴えたかも知れない。川嶋も喚問のなかでは、自身これから生きていく身の保身のため、このことは述べざるを得なかつたと思われる。ただ、皇后・皇太子側にすれば、禁忌に触れる伊勢下向が第三者にも知られていることを、許さざれぬ謀反の事実として捉え、利用し、逮捕・処刑に踏み切つたものと思われる。

六 おわりに

敗者に歴史の真意は語れない。大津皇子は、奔放さゆえの軽率の面はあつたものの、ある意味「作られた謀反」に敗れ、この世を去つた。ここで言えることは、大伯皇女は肉親の全てを失い、「ただ一人」になつたことだけである。

〔註〕

- [1] 北山茂夫 『天武朝』 中公新書 一九七八・六
- [2] 西郷信綱 『天武天皇の葬礼』 『古代人と死』 平凡社選書 一九九二・二
- [3] 「1」に同じ。 天智皇子である川嶋皇子を太子忍壁皇子の上の順位においている。
- [4] 伊藤博 「大津皇子」 『古代日本の人間像Ⅲ』 学生社 昭和六〇・一一
- [5] 神堀忍 「大伯皇女と大津皇子」 『萬葉 第五四号』 萬葉学会 昭和四〇・一
- [6] 片山寛明 「馬の一日 走行能力と古代駅伝制」 『馬の博物館研究紀要 第六号』 馬事文化財一九九三・一一
- [7] 直木孝次郎 『壬申の乱』 塙書房 一九六一・六
- [8] 「6」に同じ。

(41)

会員研究

与惣兵衛と伝八郎

真野 信治

はじめに

昭和四十六年、当時の10チャンネル（現在のテレビ朝日）で『大忠臣蔵』という時代劇番組があり、歴史好きな子供であった私は、毎週火曜午後九時、欠かさずこの番組を観ていた記憶がある。その影響で、元禄時代の世情、武士の実情、庶民の文化などに興味を持つことになったのは言うまでもない。忠臣蔵とは古典芸能（歌舞伎や文楽）の演目のひとつであり、そのもととなったのが、元禄十四年（1701）に起きた、江戸城中松之廊下において浅野内匠頭が高家吉良上野介に刃傷に及んだ事件、さらに翌年の浅野家旧臣による仇討（吉良邸討ち入り）が行われた、いわゆる「赤穂事件」であることは周知のことである。ただ、演劇化された影響から、かなり脚色した逸話や伝承が浸透していることも事実であり、最近ではいろいろ

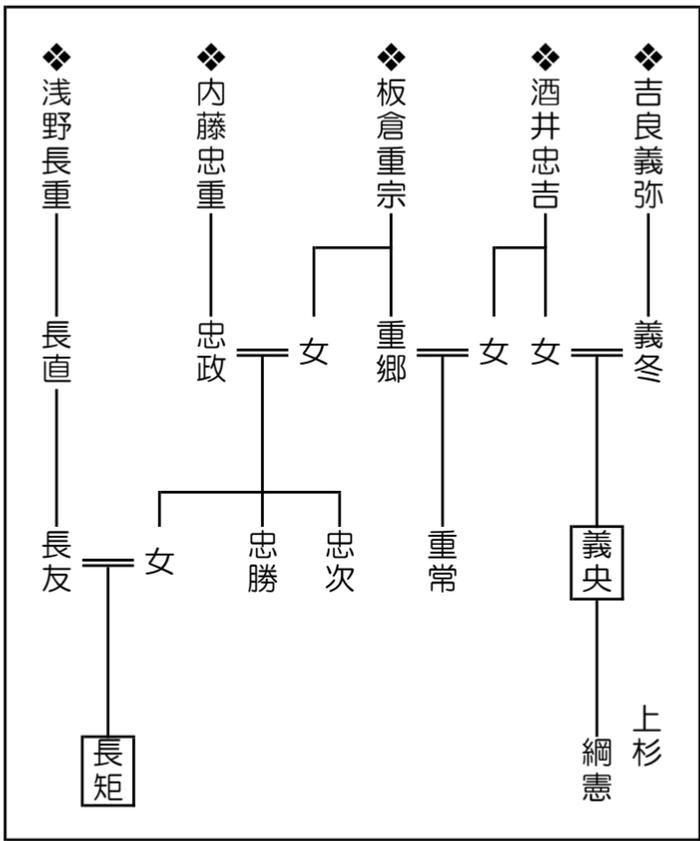
な場面での真相が如何なるものであったのかを探求する動きが盛んである。今回はこの事件の主役である浅野内匠頭長矩と、事件当日彼に非常に近い位置で絡んでいる梶川与惣兵衛頼照と多門（おかど）伝八郎重共の二人にスポットを当てながら、内匠頭刃傷から切腹までに、実は何が起っていたのか、その真相に迫りたい。

内匠頭長矩の家系
播州赤穂藩主浅野長矩は「忠臣蔵」的に言えば名君なのである。しかし、同時代史料からは、様々な内匠頭像が見えてくる。まず印象的なのが『土芥寇讎記』に描かれる二十三歳の長矩のだが、「女色を好むこと切なり」とある。忠臣蔵で描かれる人物とはかなりかけ離れた記事である。また同時にその家臣についても、「色良き婦人」を主君に差し出して出世を狙っ

ているのは、甚だ「不忠」であるとも指摘されている。元禄三年（1690）に編纂された『土芥寇讎記』の編纂意図が如何なるものかは不明である。ただ、あの黄門様（水戸光圀）ですら「女色にふけりたまい、潜かに悪所へ通い、…」とあるので、もともと大名の女性問題を厳しく指摘するのが趣旨なのかもしれない。さながら現代の「文春砲」に比定できそうでもある。ただ一つ気になるのが、内匠頭は女色に耽ったわりに三十五歳まで実子がいなかったという事実である。その意味からこの記事の信憑性は決して高いものではないとも言える。

次いで元禄十四年に出された『謙徳後正』には、「文道を学ばず、武道を好む」とあり「仁愛の気味なし」「知恵なく短慮」とまで言われている。かなり手厳しいが、これもどこまでが信用できる記述かわからない。但し、事件直前での評価として「短慮」は非常に気になる。長矩の血脈を辿ると、何となくその行状が首肯できる家系であることがわかるからだ。すなわち、長矩の母は志摩鳥羽藩内藤忠政の娘であるが、その弟に和泉守

（浅野長矩と吉良義央関係系図）



ない。反面、吉良上野介には何ら落ち度はなく、厄介な言いがかりをつけられただけ、と考えることも可能である。ところで、上野介をよく高家「筆頭」というが、正確には高家「肝煎」である。筆頭という役職はない。因みに系図を調べると、この内藤家はなんと吉良家とも関係があるから、さらに驚きである。すなわち、内藤忠政の妻が京都所司代板倉重宗の娘であり、その兄重郷の妻の姉が上野介の母である（大老酒井忠勝の弟忠吉の娘）。したがって、浅野と吉良は系図を見ないと実感できないほど遠縁ではあるものの、しっかりと系図で結ばれていると言ってもいいのである。

松乃大廊下での出来事
事件当日（十四日）御台所の使の役目があった旗本の梶川与惣兵衛頼照は、儀式の刻限が早まったことを上野介から直接聞こうと思ひ、本人を探していたという（因みに与惣兵衛の実父は、あの土岐頼芸の孫頼泰である）。この与惣兵衛の『梶川日記』に沿って、松乃廊下での出来事を追ってみる。与惣兵衛は、茶坊主に上野介を呼

びに行かせている間、内匠頭の姿が見えたので挨拶をした。その際、特に異変を感じることはなく、内匠頭は松乃廊下に面する下の部屋の自席に戻った。そこへ上野介が白書院の方から来たので、廊下の曲がり角の柱のところで、相対面し、話をしだしたところ、いきなり上野介の後ろから「この間の遺恨覚えてるか！」と叫んで、切りつけた者がいた。よく見ると先ほど挨拶をしたばかりの内匠頭であった。上野介は、振り向きざま一太刀で額を切られ、逃げようとしたところを後ろからまた一太刀背中を切られ、うつ向きに倒れた。与惣兵衛はすぐさま内匠頭にとびかかり、組み付き、刀を取り上げ床に押し付けたという。ここで三人の位置関係を考えると、『徳川実記』にあるような、与惣兵衛が内匠頭を後ろから羽交い絞めにする態勢をとるのは非常に難しい。つまり、与惣兵衛と上野介が向かい合っていたのは間違いなく、その上野介の後ろから内匠頭は切りつけたのだから、与惣兵衛が瞬時に内匠頭の後ろに回り込めるはずはない。あるいは、逃げる上野介とそれを追う内匠頭が、そろって与惣兵衛の

前をうまく通り過ぎ、さらにその後ろを与惣兵衛が追って、抱き留めたのであろうか。内匠頭が三太刀目を振るえなかったことを考えると、そんなタイミングではなかったように思える。したがって、やはり正面から「小き刀」を持っている手を必死で押さえたというのが事実に近いのであろう。しかし、この羽交い絞めシーンは「忠臣蔵」の中では非常に印象的な場面であり、且つ欠かせない名シーンでもある。その為、ドラマなどでは必ず使われるのだが、残念ながら事実とはいえない。

その後、院使馳走役の伊達左京亮などが取り押さえに加わり、内匠頭は大広間の後ろの方へ連れていかれたとある。その際「上野介にはこの間から恨みがある、殿中であることに対し恐れ多いが、討ち果たしたかった」と大声で繰り返すので、高家衆が「もはや事は済んだのだから、おだまりなさい」と言われ、ようやく静かになったという。このことから、内匠頭がかなり長い間興奮状態であったことが伝わってくる。しかし、この記述とは全く違う内容を記すのが『多門伝八郎覚書』である。この旗

本多門伝八郎は、当日内匠頭の取り調べと切腹の副検死役にあたる目付の一人である。『覚書』には、内匠頭は「私は乱心者ではない。打ち損じた上はおとなしく仕置をうける」と落ち着いた表情で、羽交い絞めをしている与惣兵衛に放すよう頼んだということが記されている。しかし、伝八郎は刃傷直後の内匠頭を直接見てはいない。

したがって、ここは『梶川日記』の方が遥かに信頼がおけると思われる。因みに、一方の上野介は、終止「身に覚えがない」と言い続けている。と同時に傷の治療を受けていたのだが、年齢からなのか、なかなか血が止まらなかったらしい。そこで大目付仙石久尚の指図で、南蛮外科医の栗崎道有を呼んだという。この時神田明神下にあった道有は、急ぎ登城し、治療に当たった。額の傷を六針、背中の傷を三針縫い、とりあえず外科治療を終わらせたが、なぜか上野介は元気がなくぐったりしたままである。それで、自分が食すると偽って湯漬けをつくらせ、それを上野介に与えると、二杯をたいらげ、途端に元気になったという。なんのことはない、上野介は朝から多忙で、何

も食べておらず、腹が減りすぎてぐったりしていただけだったのである（血を流していただけだったので与えることは、穢れを嫌う役人は取り合ってくれないため、道有は自分が食すと偽って湯漬けをつくらせたとする論考もある）。こうしてみると、上野介の疵はそれほど重症ではなく、精神状態も治療後は十分落ち着いていたことが垣間見られる。

内匠頭切腹の事

内匠頭は、当日未の下刻（午後三時五十分）田村右京大夫建頭屋敷に預けられ、そこで切腹を仰せ付けられる。これら田村邸での出来事は『多門伝八郎覚書』に詳しい。しかし、その描写は俄かには信じられない部分が少ないからであるのも事実である。まず、内匠頭の辞世の句として有名な「風さそう花よりもなお我はまた春の名残をいかにとかせん」であるが、武を好んだ内匠頭にしては、かなり良い出来栄である。この一件は、伝八郎の『覚書』以外の史料には記されているのだろうか。田村家の記録である『三月十四日御用留書抜』に「暮れ六つ過ぎに（中

一方的な記述であると論ずる研究者は多い。

梶川与惣兵衛の苦悶

このように、松乃廊下で起こったことを伝える史料は多く残っている。その中で、内匠頭の一着身近にいた与惣兵衛と伝八郎の残した文書は、特に現代の我々に様々な「赤穂事件」の様相を示してくれている。『多門覚書』に比べ、かなり信頼性が高い『梶川日記』の中に、刃傷の瞬間について「あまりにも突然のことだったので、考えもなく浅野殿を取り押さえたが、浅野殿の心中を思えば、討たせてやればよかったと回顧している部分がある。加えて旧家臣の仇討に接した与惣兵衛は、さらにその思いを深めていったのだろうか。つまり、決して悪いことをしたわけではないが、結果として大きな事件の発端をつくってしまったのではないか、という自戒の念にとらわれていたのである。しかし、事件後に加増されていることを考えれば、内匠頭を咄嗟に取り押さえたのは、与惣兵衛のりっぱな手柄であることは間違いない。

動的なシーンでもある。伝八郎の『覚書』によると、「主従の暇乞いに一目でも主人に逢わせてほしい」と言ってきた源五右衛門に対し、正検死役の庄田下総守安利は取り合わなかったが、副検死役の伝八郎と大久保権左衛門が「最後に一目会わせるのは人間としての慈悲である」などと迫ったところ、「お好きにされよ」とだけ答えたので、許される運びとなった、と記されている。しかし、この話もどうも眉唾である。『覚書』以外の一次史料には見られず、そもそも、源五右衛門が如何にして主人の切腹場所と時間を知り得たのかという疑問が残る。本来、切腹の場合は非公開で、立ち会えるのも検死役とその屋敷の主人及び世子のみであるらしい。実際、浅野家臣たちは当日中に鉄砲洲の藩邸を引き払う必要があり、中間なども含め大混乱であった。その状況下、いきなり幕府より主君切腹の知らせが届き、急遽田村邸に遺骸を引き取りに行ったというのが真実に近いのではないか。したがって、そんな中で果たして源五右衛門が外出できたのかどうか。おそらく伝八郎は、家臣への言付けの宛名が源五右衛

門と磯貝十郎左衛門であったため、源五右衛門をネタにした人情味あふれるストーリーを創作したのではないかと思われる。因みに、翌日源五右衛門は御礼の為、伝八郎の屋敷を訪れたという。その際、「貴殿の一存で取り計らってくれたのか？」という質問に対し、ちゃっかり「そうだ」と答えている伝八郎もどうかと思うが、そもそも、前日に主人の遺骸を泉岳寺に葬り、その墓前で主君に殉じて落飾までした男が、翌日のこのこと多門屋敷を訪ねてくるのも俄かには信じられない話である。

他にも『覚書』には信憑性の低い記述がある

一方の伝八郎はどうであろうか。『徳川実記』によると、三年後に小普請入りに落とされるが、理由は不明である（小普請組入りは無役と同じである）。前年に防火の役（火の元改）に就いていたが、その年の十一月に江戸に大火があり、その責任を取らされたのでは、との説がある。ここから享保八年（1723）に死去するまで、約二十年間を無役で過ごしており、この状況は与惣兵衛と大きく違っているところである。元禄十年（1697）には七百石取りの目付であったことを考えると、この落差は激しい。恐らくこの失意の二十年の間に『覚書』を書いたことは想像がつく。しかもそのころは、討ち入り後の赤穂浪士に対する世間の評判が圧倒的に良かった時期でもある。そんな中で、いろんな場面で事件を体感している自分こそが、刃傷事件の顛末を書ける数少ない人間であると考えたのであろう。その際、当時の浅野びいきの世情を鑑み、多少の創り話を加味したのではないか。つまり、少なからず話を盛ってしまっているが、事件当

日の目付である自分が言うのだから、世間は疑うわけではないと踏んだのかもしれない。こうしてみると、伝八郎もしくは『多門伝八郎覚書』が、現代の我々が認識している赤穂事件（或いは忠臣蔵）を創り出してしまった可能性は非常に高い。刃傷後の内匠頭の口上も辞世の句も片岡の訪問も庄田下総守に文句を言った話も柳沢吉保に抗議した話も、すべてこうあってほしいという伝八郎の願望だったのかもしれない。加えて、文章が進んでいくうちに彼自身もカッコいいヒーローになってしまったのでは、という説にも大いに首肯できる。因みに、伝八郎がプロデュースしたかもしれない内匠頭の辞世の句であるが、都乃錦（宍戸光風）という浮世作家の著書『播磨相原』に「風さそふ花よりも亦われは猶春の名残りをいかにとかせむ」という句があり、これにあまりにも酷似している。『播磨相原』は忠臣蔵の原型とも言われる講談風の作品であるが、もちろんほとんどがフィクションである。宝永八年（1771）に世に出たらしいので、ひよっとして伝八郎は、『覚書』執筆中にこの書を読み、思わずこの句を流用してしまっただのかもしれない。

おわりに

今回は、内匠頭の刃傷から切腹までを、キーとなる重要人物の覚書などを精読しながら、真相に迫ってみた。一つ言えることは、様々な創作が加わっていると見られる「忠臣蔵」が、我々現代人に深く浸透しているということである。一方で、梶川与惣兵衛の記述や他の同時代史料から、内匠頭の刃傷は突発的犯行であったと推量できなくもない。つまり、刺し殺そうとしていない行動が、決して計画的ではないことを物語っていると説く研究者もいる（他の刃傷事件はすべて刺し殺している）。伝八郎の覚書と違い、与惣兵衛の記述を積極的に否定する確実な史料があるわけではないので、意外にこの辺りが真実なのかもしれない。いずれにせよ、一次史料から読み取れる赤穂事件も、また別の世界観があつて非常に興味深い。

【参考文献】

佐藤孔亮 『忠臣蔵事件』の真相』

会員研究 ざんねんな貴公子・実方中将の 説話と伝承

小林 道子

はじめに

戸塚に越してきた際、近所に「実方塚」というバス停を見つけた。私を知る実方という人物は中古三十六歌仙のひとりで、「さしも草」の歌を詠んだ藤原実方（生年不詳、長徳四年没）しかない。実方の墓は宮城県名取市にあるはずだが、なぜ戸塚に実方塚があるのだろうか。

実方は祖父が藤原北家小一条流の師尹（もろただ）、父は師尹の長男の定時、母は源雅信女という名門貴族の生まれだ。父の早世により叔父済時の養子となった。正暦五年（994）左近衛中将に任ぜられ順調に出世コースをたどっていたが、翌年の長徳元年（995）、陸奥守として任地に下り、在任中に現地で急死した。情熱的で優れた歌を詠み、イケメン貴公子として光源氏のモデルのひとりとされる。

『百人一首』五十一番目の歌

かくとだに えやはいぶきのさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを

『後拾遺集』巻十一と『百人一首』に載る代表的な歌である。詞書には「恋する女に初めて文を遣はしける」とある。「さしも草」はヨモギの異名で灸に用いるもぐさの原料だが、胸に燃える想いを表現している。

歌枕の「伊吹」（伊吹山）の所在については下野国説と近江国説の二説あるが、『延喜式』では美濃国と国境にある近江国の伊吹山を国内随一の薬草の産地としている。「これほどまでにあなたを想っている」ということを伝えられない。伊吹山のさしも草のように私の燃える想いをあなたは知らないでしょうね」と燃えるような想いを伊吹山の「さしも草」にたとえて詠んだこの歌は、いったい誰に贈られたの

コラム 流人からの復活④ 赤穂浪士遺児の処分とその後

「忠臣蔵 赤穂浪士の処分における幕府の見解は大きく分かれた。浪士を無罪とする意見と、忠義は別として処罰を求めめる意見に、將軍綱吉は荻生徂徠らの大義を重んじる方を採用し全員切腹の処分を下した。

その後浪士関係者はどうなったかというところ、開幕当初は「三属連座制（父母・兄弟・妻子）」があったのだが、元禄期には弛み、男子遺族だけが罰せられるようになっていた。46士の遺児は19名、その内流罪に該当する15歳以上は、吉田忠左衛門、間瀬久太夫、村松政右衛門の各次男、中村勘助嫡男の4名で、元禄16年（1703）伊豆大島に送られた。その内、間瀬の次男以外は僧侶になることを条件に宝永3年（1706）の桂昌院御法事による赦免を得て江戸に戻っている。罪を免れるための門跡入りは

高尾 隆

だろうか。実方の私家集『実方朝臣集』には複数の清少納言とやりとりした歌があることから、彼女と恋愛関係にあったといわれているので、もしかすると清少納言に贈られた歌かも知れない。

実方塚と移設記念碑

自宅近くの藪の中を進むと実方塚に到着する。そこには実方塚と実方塚移設記念碑が建っていた。

以前は別の場所にあったが、平成十五年（2003）土地計画道路に位置していたため、実方一族によって今の場所に移転して安置された。



（筆者撮影）

元の場所（西見谷西遺跡）は横浜市ふるさと歴史財団によって発掘調査が行われたが、内部施設や構築年代の手がかりとなる遺物等の検出はなかった。いつの時代か定

かではないが、実方一族が供養塔として建てたと思われる。塚の周辺には実方姓が多数存在するが、藤原姓を名乗ることを遠慮して実方姓を名乗ったのかも知れない。実方の陸奥国下向には多くの従者が随行したことだろう。そのうちのひとりが戸塚で亡くなりこの地に墓が建てられたと思われる。移設記念碑の表面には和歌が記されている。

桜がり 雨はふりきぬ おなじくはぬるとも花の かげに宿らん

『撰集抄』巻八第十八

(47)

『撰集抄』には詠み人知らずとあるが、『撰集抄』では実方の歌とされている。あるとき、殿上人たちが東山に花見に出かけたところ、にわか雨に降られ大騒ぎになった。このとき、実方中将だけは桜の下で雨に濡れたまま「桜狩りに来て、雨が降ってきた。どうせ濡れてしまふのなら、桜のかけで雨宿りしよう」と風流に歌を詠んだのだ。雨で装束は絞るほどに濡れ、雨になつたが、そんな実方の行動を人々は風流人と高く評価した。

大納言齊信がこれを天皇に奏上したが、藤原行成は「歌は面白い。だが、実方は馬鹿だ」と辛口に評

(46)

した。このことを聞いた実方は行成のことを恨んでいたというが、『撰集抄』は鎌倉中期に成立した説話集なので記述は事実かどうか怪しい。

また、藤原行成と実方は清少納言をめぐって仲が悪かったとき、『古事談』や『十訓抄』で実方の暴行事件の醜聞を伝えている。

二人は清涼殿の殿上間で口論となり、実方は突然行成の冠を叩き落とし、庭に投げ捨ててしまった。これに対し、行成は逆上することなく召使を呼んで、冠を拾い上げ「どうしてそんなに怒りなのですか、このような仕打ちを受ける覚えはありません」と礼儀正しく言ったので、実方は白けて逃げてしまった。この一件を小部から見ている一条天皇が、行成の冷静を褒めて蔵人頭に抜擢し、一方の実方には「歌枕を見て参れ」と、陸奥国への下向を命じた。

このように、実方の陸奥守赴任については行成とのトラブルによる左遷と考えられてきた。しかし、実方が一条天皇から陸奥国の歌枕を見て参れといわれたのは事実だろうか。

藤原行成の日記『権記』長徳元

祖神（現在の佐倍乃神社）の前を過ぎようとする時、土地の人に馬から下りるよう言われた。実方はその理由を尋ねると、「この神は洛陽賀茂川の西、出雲路道祖神（現在の幸神社）の女でしたが、ひそかに町人と通じて追放されこの地に追われて来ました。このあたりの人はお参りの際、陰相を作って神前にかけて、必ず靈験があるそうです。馬から下りて参拝されたほうがよいです」と下馬することを勧められた。ところが実方は「こんな下品な女神のためにわざわざ馬から下りる必要はなからう」とそのまま通り過ぎようとする。突然馬が倒れ、実方も馬の下敷きになって死んでしまった。

阿古耶の松と実方

『古事談』の中に実方が歌枕「阿古耶の松」を探す話がある。陸奥国の「阿古耶の松」がなかなか見つからず、土地の老人に場所を尋ねたところ「阿古耶の松は出羽国の千歳山にあります」と教えられ、そのとき実方は陸奥国から出羽国が分かれたことを知る。しかし『続日本紀』では出羽国の成立は和銅五年（712）九月二十三日のこ

年九月二十七日条の記述によると、実方は陸奥守赴任に伴い、一条天皇から多量の餞別を与えられている。また、実方の官位が一段階上がり正四位下に叙されおり、そのとき赴任の儀式も行われている。このことから、陸奥守就任は有能な実方を陸奥に派遣したといえるのではないだろうか。行成が蔵人頭に任命されたのは源俊賢が蔵人頭の任期を終えたときに一条天皇に行成を推挙したからである。

『大鏡』には行成の逸話がいくつもあり、蔵人頭に抜擢された恩を忘れず源俊賢の上座に座らなかつたと書かれている。同じく『大鏡』の中で、行成は何事も優れていたが和歌だけは少し劣っていたと評する。真面目で冷静な行成と、歌が得意ですぐに感情を出してしまふ実方とは性格が合わなかつたようだ。

藤原道長の『御堂関白記』寛弘五年三月二十七日条では中央から派遣された交替使が、陸奥国前国司・藤原実方の任終年分の砂金納入責任を国司・源満正に引き継ぐことをしていなかつた。そのため次の国司・橘道貞が、実方の未納分の砂金を弁済したいということと

と記載している。

みちのくの 阿古耶の松を 訪ね
わび 身は朽ち人に なるぞ悲しき
（実方中将辞世の歌）

西行と実方塚

西行法師が陸奥国を旅していたところ野中に目を引かれる塚があり、地元の人に誰の塚かと聞くと実方中将の塚と教えられた。実方中将の名前だけが残されていて、枯野には霜で枯れかけたすすきが、実方の形見のようにあるだけだと西行は詠んでいる。

朽ちもせぬ その名ばかりを留め
おきて 枯野の薄（すすき） かたみにぞ見る（新古今和歌集第八巻 哀傷歌）及び『山家集』

おわりに

現在、実方中将の墓は宮城県名取市愛島塩手の山裾にある。東北で最期を遂げ陸奥で埋葬された。実方の魂はこの世に残り雀となつて帰京し、平安京清涼殿の台盤所の御飯を食い散らかしたという伝承が残っている。蔵人頭になれず亡くなつてしまったことで、この世に執着し雀になつたというのだろう

あつたが、公卿たちは源満正に弁済させるべきとしている。このように陸奥国は金（砂金）の産出地であり、陸奥守は砂金を朝廷に献上する重要な職務であつたはずだ。

『徒然草』と実方

『徒然草』第六十七段では京都・上賀茂神社の岩本社と橋本社ほそれれ在原業平と藤原実方を祀っているが、参拝する人たちはどちらが祀られているのか分からなくなっているとき記されている。ある年に兼好法師が上賀茂神社に参拝した際に年老いた宮司が横切つたので呼び止めてそのことを尋ねてみたところ、「実方さんを祀つたところは御手洗の水面に霊が映るといふ話もあるので、水に近い橋本社の方と思われまふ。また、歌人の吉水和尚（慈円）が、

月をめで 花を眺めし いにしへの
やさしき人は ここにありはら

と詠んだのは岩本社の前なので業平さんは岩本社と聞いていますが、私などよりあなたの方がよくご存知でしょう」と親切に答えてくれた。兼好法師は質問に対する宮司の控えめな態度が、とても立派だか。

実方は上賀茂神社の橋本社に祀られ神になつたが、清少納言は『枕草子』「なほめでたきこと」の段で、賀茂上社の御手洗川に実方の亡霊が映るといふ噂を聞いて「なんと気味が悪い。そこまで執着しなくてもいいのに」と記しているが、これが真実なら清少納言は実方を本気で愛してはいなかつたということだ。

【主な参考文献】

- ・新編日本古典文学全集（51）
- ・十訓抄 浅見和彦 小学館
- ・撰集抄 小島孝之・浅見和彦編 桜楓社
- ・新注古事談 浅見和彦編 笠間書院
- ・百人一首 有吉保訳注 講談社学術文庫
- ・藤原行成『権記』（上） 倉本一宏 講談社学術文庫
- ・藤原道長『御堂関白記』（上） 倉本一宏 講談社学術文庫
- ・恋する武士 闘う貴族 関 幸彦 山川出版

と評価している。

君待橋と実方

千葉市中央区港町の「君待橋」には三つの伝承がある。①千葉常胤一族が源頼朝を橋のたもとで出迎えたとき、六男の東六郎胤頼が歌を詠んだことから②昔、橋の近くの美しい乙女が、対岸の若者の後を追って濁流に身を投げたという悲恋物語③長徳元年（995）実方が奥州へ下向する途中この場所を通り、里人に橋の名を問うと「君待橋」と答えたので、実方は「寒川や 袖師が浦に 立つ煙 君を待つ橋 身にぞ知らるる」と詠んだ。以前私はこの君待橋の近くに住んでいたが、地元の住民から実方伝承を聞いたことはなかつた。

(48)

『源平盛衰記』と実方

『源平盛衰記』には実方が出羽国の阿古那の松の帰路、笠島道祖神の前で里人の制止を聞かず、下馬しなかつたため神罰が下つて帰らぬ人となつてしまったという話がある。

長徳四年（998）十二月、実方が出羽に赴き阿古那の松を訪ねた帰り道、馬に乗つたまま笠島道



(49)

会員研究

浅川兄弟と柳宗悦

清水 漠

【はじめに】

「朝鮮古陶磁の神様」と呼ばれた浅川伯教（のりたか・以下伯教）。七歳年下の弟で、兄を助け若くして「朝鮮の土」と化した浅川巧（たぐみ・以下巧）。浅川兄弟と、「民藝運動の父」と呼ばれる柳宗悦（むねよし／そうえつ・以下宗悦）との出会い、交流の一端を発表します。

【北の鎌倉・手賀沼湖畔】

JR・我孫子駅から、南に向かつて徒歩十分程で、手賀沼湖畔に着く。我孫子駅は、江戸時代の水戸街道・我孫子宿の近くに位置する。手賀沼は、利根川水系の湖沼で、江戸時代の頃に比べ今は、特に戦後は大規模な干拓事業が行われ湖面は小さくなっている。

大正三年（1914）九月、手賀沼の湖畔近くに、一組の若い夫婦が東京から越してきた。宗悦と

妻兼子。この時宗悦は二五歳。東京帝国大学を卒業した新進気鋭の宗教哲学者・美学者として注目されだし、また同人雑誌「白樺」の中心メンバーであった。

妻・兼子は二二歳。東京音楽学校（現東京芸術大学）で音楽を学んだ人気ある音楽家。数百通の恋文を交わした恋愛を経て、二月に結婚したばかりだった。

講道館柔道の創始者で、宗悦の母の弟（叔父）である嘉納治五郎は、明治四四年に手賀沼湖畔の丘に別荘を構えた。嘉納の別荘を訪れたこともあり、東京育ちの宗悦にとっては「静かな音もない沼の景色は自分の心をはぐくんでくれた」と述べている。

宗悦に誘われ、「白樺」の仲間たちが集まってきた。翌年に志賀直哉、五年に武者小路実篤。六年には英国人陶芸家バーナード・リーチが宗悦の家の裏手に窯を作り、

内の小学校訓導（教師）として教壇に立つ。
一方熱心なキリスト教徒であり、人類愛や個性の尊重を提唱する雑誌「白樺」の愛読者でもあった。絵画・彫刻などに関心を持っていた。

又、親友小宮山清三（後述）が持っていた朝鮮陶磁器・美術工芸品に惹かれていく。
教育者というより芸術家としての志を強く持つようになっていった。

大正二年（1913）伯教二八才。既に父は亡く、老母を伴い、一家挙げて朝鮮に渡る。翌年結婚。その年に、手賀沼の宗悦を訪ねた。
京城府（ソウル）で小学校の教師をしながら、主に彫刻の勉強をするが、彫刻家を目指し教師を辞め、日本に帰国。彫刻家・新海竹太郎の弟子になる。大正九年（1920）、朝鮮人像「木履ほくり／木のくつの人」が、帝展（現日展）で入選する。

この時、伯教は「日朝の親善は、政治でなく芸術によって図っていかなければならない」と語ったという。さらに、大正十一年（1922）には、東京府主催の平和博覧会記

泊まり込みで作陶に打ち込んだ。

我孫子駅は、明治二十九年（1896）に開業し、明治の終わり頃には上野から2時間弱。手賀沼湖畔の静寂さ、月に光る沼の美しさ、かなたに富士山を望む景色の良さに別荘地としての人気が出始め、「北の鎌倉」と称された。又、白樺派の創作拠点になった。我孫子は、宿場町から文学の街に変貌しつつあった。

宗悦は、この様な環境下で思う存分思索と執筆に没頭したに違いない。

手賀沼に住んで間もなく、当時朝鮮に住んでいた、兄・伯教が訪ねてきた。大正三年（1914）のことである。又、翌年には、伯教は、弟・巧を連れて訪れている。日本に住む弟を紹介したのである。

【兄伯教との出会いⅡ民藝の出发点】

伯教の訪問目的は、宗悦が、フランスの彫刻家ロダンと文通し、日本の浮世絵と交換で入手した「ロダンの彫刻」を見るためである。この時期の伯教は朝鮮・京城府の小学校の訓導（教師）をしながら、

彫刻の勉強を始めた。憧れの彫刻家はロダンであった。

この時、伯教が手土産に持参した朝鮮の小さな壺数個の内の一つが、日常の器で白磁の「染付秋草文面取壺」（東京駒場・日本民藝館蔵）を、宗悦は見て朝鮮の工芸品に心魅かれた。新しい美の発見の瞬間といえよう。後に宗悦は「その冷な土器に、人間の温み、高貴、莊嚴を読み得ようとは昨日迄夢みだにしなかった」と書いている。

※柳宗悦・明治二十二年（1889）生。旧制学習院高等科卒業頃から、同人雑誌「白樺」に参加。東京帝国大学在学中の頃から、宗教哲学・美術の造詣を深める。大正十二年から、「民藝」の言葉を用い、〈民衆の暮らしから生まれた芸術Ⅱ民藝運動〉の中心人物となり、「民藝運動の父」と呼ばれた。

【兄伯教・朝鮮古陶磁の神様】

伯教は、明治十七年（1884）当時の山梨県北巨摩郡甲かぶと村（現北杜市高根町）で生まれ、地元の小学校で学び、山梨師範学校（現山梨大学）に入学、卒業後県

は、朝鮮全土、七〇ヶ所に及び、三五年の歳月を費やす。弟・巧が、兄・伯教の窯跡調査を支援した。又、日本に渡った朝鮮の陶磁器、朝鮮と日本の陶磁器の比較研究をするため、日本各地の窯跡まで訪ねた。

その業績は、高く評価され、『朝鮮古陶磁の神様』と称えられている。
昭和二〇年（1945）、日本敗戦、朝鮮の独立により、アメリカ軍の特別許可を得、収集した陶器等を整理し、日本に昭和二十一年帰国した。その後も朝鮮古陶磁器の研究、又著作を発表した。昭和三十九年（1964）、八〇年の生涯を閉じた。

東京・渋谷の東北寺で静かに眠っている。

【弟巧・朝鮮の土】

巧は、明治二十四年（1891）生。兄・伯教より七歳年下で、生まれた時、父は既に亡くなっていた。祖父母に育てられ、山梨県立農林学校（現県立農林高校）に入学・卒業後、秋田県大館営林署に勤務する。

巧は、幼少の頃より、植物を愛

し、農林学校在学中は、トルストイの書を愛読し、兄と同じ教会に通う熱心なキリスト教信者でもあった。
兄を慕う巧は、伯教に遅れること一年、二十三才の時、朝鮮に渡り、朝鮮総督府農商工部山林課に勤務する。当時の朝鮮半島の山々は、土壌が原因か、またはオンドルなどの燃料に使われたのか、または日本・中国などの外国が侵入して採伐されたのか原因不明であるが、はげ山が多かった。

巧は、養苗の種子を採取するため朝鮮各地を訪ね、朝鮮語を学び、話し、朝鮮の人々と親しんできた。兄伯教の研究を手伝いながら、巧は、自ら朝鮮民芸の研究を深め、その成果は「朝鮮の膳」「朝鮮陶磁考」の二冊にまとめられた。最初の著作は、膳の多様さ歴史、地域ごとの特徴、さらに膳の出来るまでを写真と説明図で紹介している。現在でも第一級の研究書として評価されている。

巧のもう一つの顔は、林業試験場の技術者であった。山野の緑化即ち植林のための苗を育てる発芽促進の研究を進め、大正十三年（1924）に「露天埋蔵法」を考

案し、朝鮮全土を講演し歩き、その普及に努めた。

昭和六年（1931）風邪からの急性肺炎にかかり四〇才という若さで短い生涯を終えた。

葬儀は、朝鮮式で執り行なわれ、巧の死を惜しむ多くの人々が参列した。朝鮮人の共同墓地に葬られ、『朝鮮の土』となった。墓標は、伯教が白磁の壺をかたどり設計・建立した。

巧の死を知らされた宗悦は、住んでいた京都から駆け付け別れを惜しんだという。後に宗悦は、〈本当に朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうして本当に朝鮮人から愛された〉と称えている。

平成十五年に発行された韓国の高等学校の教科書には、巧と宗悦が紹介され、〈数多くの日本人の中で朝鮮の陶磁器・美術に心酔した代表的人物〉であると。

今でも、命日には、墓参する人がいるという。平成九年に建てられた追慕碑には、〈韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人、ここに韓国の土となる〉と韓国語で刻まれている。

【小宮山清三・兄弟を朝鮮へ導く】

知るよしもなかった郷土の偉人である。
今回の発表は、時系列的且つ表面的な浅い研究である。更に深く広く研究・学びたい。そしてその成果を得たのちに、発表の機会があればと思う。

（以上）

《参考文献》

- ・『浅川伯教と巧』
浅川伯教・巧兄弟資料館
- ・『同資料館ガイドブック』
高根町郷土史に輝く人々
- ・『回想の浅川兄弟』
高崎宗司編 宗風館
- ・『ウイキペディア』
〈浅川伯教・巧兄弟〉〈民藝運動〉
〈柳宗悦〉〈木喰〉〈その他〉
・『みちものがたり』朝日新聞
（令和二年五月二二日）



▲白磁壺 朝鮮時代 17世紀後半～18世紀前半
大阪市立東洋陶磁美術館所蔵
（鈴木正男コレクションより）



▲染付秋草面取壺 朝鮮時代 18世紀前半
日本民藝館所蔵（日本民芸館 HP より）



▲浅川伯教・巧兄弟資料館（北杜市 HP より）

兄・伯教が山梨師範学校に入学し、甲府メソジスト教会に通い始めた頃、池田村（現甲府市池田町）の大地主・小宮山清三（1880～1933）に出会う。四才年上の小宮山と親しくなり、何度か小宮山家に入りするうち、高麗青磁などの朝鮮美術工芸品に魅かれていく。これが、朝鮮半島へ旅立つ決意につながる。

ちなみに、大正十三年（1924）弟・巧は、宗悦を連れて小宮山家を訪問した。目的は、李朝陶磁器の調査のためだが、そこで宗悦は、独特の微笑みを持つ「木喰仏」に偶然出会う。その高い芸術性に宗悦は打たれたという。その日に、小宮山家にあった「木喰仏」三体の内一体（地藏菩薩像）を贈られた。木喰没後一〇〇年以上経ち完全に忘れられていた。この二年後、宗悦は、木喰仏を集中的に調査・研究し、「木喰上人略傳」として発表、注目を集めた。

【朝鮮民族美術館設立】

浅川兄弟と宗悦らは、朝鮮民族がつくってきた優れた工芸品などが失われていくことを心配していた。又日本の対朝鮮政策即ち文化

や民族に対する蔑視に疑問を持つていた。

「朝鮮民族美術館」の設立を計画し、賛同した多くの人々から寄付金を募り、大正十三年（1924）、京城の景福宮繡敬堂（けいふくぎゅうしゅうけいどう）を、「朝鮮民族美術館」として開設した。

終戦の混乱期、米国軍のもとにあった収蔵品は、伯教の努力で、現在は「韓国国立中央美術館」に収蔵されている。

【朝鮮半島と日本】

約百年前から、朝鮮半島（韓国と北朝鮮）と日本の不幸な歴史が始まった。現在でも解決されていないことが多い。

このような時代に、朝鮮を愛し人々と交流を重ね、消されていく朝鮮工芸品等の美を、次々に発見・紹介した浅川兄弟に感動を覚える。

【浅川伯教・巧兄弟資料館】

北杜市高根生涯学習資料館センターには、「浅川伯教・巧兄弟資料館」がある。入口は韓国風で日本語と韓国語で館名が表示されている。館内は、伯教・巧兄弟の功

績を示すものが多く展示・紹介されている。

設立は、平成十三年（2001）。北杜市と韓国との交流の結晶として、多くの韓国人（含在日韓国人）の協力を得て開設されたという。

場所は、旧高根町役場の近くにあり、私の生家（今は廃家）から徒歩六分、祖先が眠る共同墓地からは、二分である。

然しながら、その存在を知ったのは二年前。訪れたのは二回。

これからは、亡き妻の墓参の度、資料館を訪問し、浅川兄弟の偉業を学びたい。

伯教・巧の生まれ育った北杜市は、八ヶ岳南麓にひろがる大自然豊かな郷である。兄弟にとっては、師であり友であったであろう。

【あとがき】

私が、浅川兄弟のことを知ったのは、当会・小林道子氏に教えられたからである。小林氏は朝鮮の古磁器、浅川兄弟と柳宗悦との関係にも詳しい。本稿も小林氏から、資料・助言を多く頂いた。お礼申し上げます。

十五才で故郷を離れ六〇年余、時々墓参のため帰郷する身には、

会員研究

鎮守府将軍・田原藤太（藤原秀郷）の武勇伝

石原 裕之

一・まえがき（藤原北家系譜・真楯と魚名系出緒から）

特色を持ってゆくことになり。朱雀天皇の時（大百足退治）がある。

藤原鎌足の子、不比等の子孫は、北家房前を中心に奈良、平安時代に権力を伸ばしてゆく。房前の子、真楯の子孫は、道長の世より撰閣家（五撰家）として、現代に至るまで其の名声を遺している。この真楯の兄弟の魚名の子孫も、利仁系と秀郷系に分かれ成長してゆきました。秀郷系祖魚名の子、藤成は、九世紀前半、下野介（栃木県）の国司の二等官として根をはります。その子、豊澤、子の村雄は、鹿嶋氏を妻に選び、国府の地位が高まってゆくことになる。この子が、秀郷で下野で生まれ育ってゆくが、世間では荒くれ者と思われていた。国府の公権力を背景に武芸と軍略を鍛錬して東国唯一の軍事集団に成長してゆきました。この後、秀郷にまつわる物語は、主に三つの

二・（伝記・大百足退治）

この大百足退治を伝えて守護する寺と神社が滋賀県大津市、京阪電車の唐橋前駅から徒歩五分で見える唐橋周辺にある「雲住寺」と「秀郷社」近江の旧大名、秀郷を祖先とされる藤原蒲生氏建立が現存しています。平成六年（1994）十一月十八日、「京都新聞」に八角形の供養堂が造られ市内の学校に「ムカデ退治伝説」の木版、現代語訳の本を住職、井野氏が発行して寄贈された記事記載と近江八景「三井の晩鐘」として知られる園城寺の晩鐘の文は、秀郷が龍宮より持ち帰った宝として、三井寺に保存されています。さて、唐橋の物語に戻って、秀郷が唐橋を渡

三・（伝記・平将門との決戦）

その後、秀郷は、「本朝百将伝」にあるように平貞盛と合流する事になるが、平貞盛は、父の国香を

た。それにより秀郷らに朝廷から将門追討を委ねられることとなりました。二月一日将門が打って出るが敗退。二月十三日秀郷らは朝廷から将門の館を焼き討ちするよう命令下る。次の日秀郷、貞盛軍の矢を受け、猿島北山前方でついに将門が討ち死にしました。四月二十五日秀郷が将門の首を京に持つて行きました。（秀郷草紙）下巻、蒙古絵巻第八巻にその行列と将門の首も描かれている。その後秀郷は、功績によって従四位下に叙され、子孫に伝える伝承の功田を賜り、下野、武蔵守に任ぜられた。また、朱雀天皇からこの時、「鎮守府将軍」の地位が与えられた。（大日本名将鑑）月岡芳年筆に描かれている。この職は十一世紀前半まで魚名系藤原秀郷の子孫にほぼ名譽表徴として世襲されました。東京都千代田区神田の神田明神社にある神田明神史考という著にも記載されており、大手町に首塚も存在する。

四・（伝記・妖怪、百目鬼退治）

その後秀郷は下野の宇都宮に来ると、ある日の夕方、田川の方へ

歩くと白髪の老人が現れ、「近くの村の北西にある馬捨て場で待っていてくれ。」と言われました。行ってみると三井にもある大きな鬼がなんと死んだ馬をバリバリ食べていた。これを五十m程離れた場所から見た秀郷も驚いて、立ちすくんだ。勇気を取り戻し、持っていた百足を射殺した弓を使い矢を放つと見事、鬼の胸板を射通した。鬼は必死で逃げたが、明神山の後ろでバツバツ倒れました。鬼の体から炎がすごい勢いで出て、どす黒い毒を吐いていたため秀郷も近寄れませんでした。翌朝、再びその場所に行くとき雷が落ちたように、黒焦げになっていました。それから四百年ほど後、足利将軍の時代に埴田村の本願寺に住職が住むようになると火事が起きたり、住職が怪我をしたりして頻りに災いが起こった。そんな訳で定まった住職はいなくなりましたが、知徳上人という僧侶が住職となり説教を毎日していたところ、毎日欠かさず聞きに来る若くて美しい女性が出てきました。上人は、その本当の姿を見抜いて、その昔秀郷公に胸を射抜かれた鬼で長岡の岩山で傷を治し体はみごと回復したが、昔の威力は

ろうとすると二十丈もある大蛇がからまつていたが平然と踏み越える。とある人がたまたまずんでいて（龍宮の化身であったとされる）、野洲から来る三上山の百足を退治するよう依頼され、秀郷は快諾して日頃使用していた五人張りのしげ藤の大弓に十五束三つ伏の矢をつがえ、いでたるに重代の太刀を佩き、大百足を充分に引き付けて大弓を力一杯その肩間めがけて矢を引き放った。一本目の矢は、大きくはね返され、二本目の矢も外れ、三本目が大当たりして成功しました。その後、龍宮から沢山の宝を授かったとされる物語です。「倭藤太物語」は、室町時代に成立した古態本系統と江戸時代に成立した流布本系統の二つが存在する故、龍宮からの化身を古老（翁）とする姿と女とする姿に分けられる説とあって、（注意）、*「田原」と書く場合と「倭」と書く場合があり。

五・まとめ

秀郷公の墓は、栃木県佐野市にある唐沢神社が管理する東明寺古墳（伝、秀郷公墓所）があります。又、東京都府中市片町にある開基、足利尊氏の高安寺の寺中に秀郷稲荷（伝、秀郷公居館跡）も存在しています。そして、大百足を斬つ

た「蜈蚣切り」の太刀は、三重県伊勢神宮（神宮徴古館農業館）に奉納されています。

田原藤太秀郷公像画（小堀 鞆音筆）平成三十年秀郷企画展より



(55)

主な参考文献
第百二十二回平成三十年企画展
*藤原秀郷・源平と並ぶ名門武士
団の成立（栃木県立博物館友の
会編集、発行書籍）

将門に殺された事による仇であった、平家一門同族の争いでもある事件であった。次に秀郷と弟、高郷ら十八人は「日本紀略」、延喜十六年（916）八月十二日の条から罪人として流罪に処されている。将門の乱以前は、一族郎党を率いて下野国府、或いは朝廷と対立する立場にあったが、事の発端は将門が延長九年（931）妻の伯父、良兼の娘との結婚をめぐる問題を「女論」として、その不和と考えられるが二人の争いは、平氏族長をめぐる武力衝突となり、承平五年（935）二月二日に伯父、平国香、姻戚、源護と戦い、護の子と国香らを常陸国、野本近辺で討つ。翌年七月二十六日良兼が下総、下野国境で将門に攻撃するが敗退する。その後は内乱となる。天慶二年（939）十二月十九日将門が上野国府で託宣を受け、「新皇」と称して下総国亭南に都建設を企てたことにより、朝廷が東海道、東山道に将門追捕官符を下すことになり、将門の乱が発生しました。追捕官符とは、天慶三年（940）一月十一日将門を討伐した者に恩賞を与える旨の命令が正式に朝廷より出されまし

(54)

会員研究

遣唐使が渡海に臨み思ったこと

木村 高久

I はじめに

遣唐使が唐への往復路で渡海することは非常に危険が伴うものであった。この様な状況下で遣唐使が渡海に臨む本心は如何なるものであったのか。遣唐使は630年(舒明2)に第1次として派遣されてから894年(寛平6)に第20次遣唐使が任命されるまで260年余続いた【注1】。

この間、実質最後の遣唐使となった第19次遣唐使の中から(副使)小野篁ほか4人の乗船拒否や逃亡者が発生する。しかし、それ以外は乗船命令に反した者は皆無なのである。

そこで前述の乗船拒否・逃亡者を除き、遣唐使に任命された人々は渡海の危険性があっても命令に従うことだけを純粹に考えていたのであろうか。遣唐使の本心が明かされた文献資料などが残念ながら見当たらない。

従って、隔靴搔痒の感があるが『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』などから推理してみる。

【注1】遣唐使は前述した通り630年第1次から894年第20次まで任命は20回あった。

だが、そのうち4回が中止(第11次、第14次、第15次および第20次)である。また旧百濟領駐留の唐軍への派遣が1回(第6次)ある。よって実施されたのは15回となる。異説あり。

2 遣唐使渡海の危険性

(1) まず、遣唐使の渡海はどれほど危険であったかを認識して頂きたい。このため次の表(遣唐使帰国者率)をご覧願うものである。本表は実施された15回の内、実情が不明な第5次、第7次を省略した13回を対象としている。

次 数	出 発 年	往 路		乗 員	帰 国 者	帰 国 率
		航 路	船 数			
1	630年	北路?	(1)	(120)	(120)	100
2	653年	北路?	1	121	(121)	100
2	653年	(南島?)	1	120	(5)	4.2
3	654年	北路	2	(240)	(234)	97.5
4	659年	北路	2	(240)	(125)	52.1
8	702年	南路	(4)	(550)	(550)	100
9	717年	南路?	4	557	(557)	100
10	733年	南路?	4	594	(304)	51.2
12	752年	南路	4	(460)	(347)	75.4
13	759年	勃海路	1	99	(99)	100
16	777年	南路	4	(600)	(437)	72.8
17	779年	南路	2	(300)	(300)	100
18	804年	南路	4	(600)	(440)	73.3
19	836年	南路	4	(600)	(478)	79.7
19	838年	南路	4	(651)	(504)	77.4

表 (遣唐使帰国者率)

なお、() 書きは推定数である。また、乗員・帰国者の単位は(人)、帰国者率の単位は(%)である。

(2) この表によれば、帰国者率の低い順に第2次南島航路が4.2%、第10次が51.2%、第4次が52.1%、そして第12次・第16次・第18次・第19次が70%代である。総計で乗員数が5852人、帰国者数が4621人となり、帰国者率は79.0%となる。

(3) 表の中から特に帰国者率の低い第2次南島航路、第10次、および乗船拒否・逃亡者が発生した第19次(70%代)について次に概説する。

ア 第2次遣唐使(南島航路)

653年(白雉4)7月に出航した(大使)高田根麻呂(副使)掃部小麻呂の遣唐使船(乗員120人)は薩摩の曲(くま)と竹島(たかしま)の間で、船が衝突のち海に沈み乗員はほとんどが死亡した。ただ、門部金ほか4人が竹島へ流れ着き助かった。

イ 第10次遣唐使

733年(天平5)4月、(大使)多治比広成(副使)中臣名代(船四隻(594人)が難波の

津から出帆する。翌年任務を終えて10月に帰国となり四隻が蘇州を出発。ところが突風が起こり四隻はバラバラとなった。734年(天平6)11月第一船(大使)多治比広成らが種子島に帰って来た。736年(天平8)8月、第二船(副使)中臣名代らが帰国。平群朝臣広成らが乗船する第三船(乗員115人)は崑崙国に漂着した。そこで賊兵に包囲され捕虜となる。そして殺された者や病気のために多くの者が死亡。広成等4人は崑崙王に謁見でき、その後も波乱万丈な経緯を経て739年(天平11)出羽の国(現山形県)に帰還。なお、第四船は消息不明となる。

ウ 第19次遣唐使

834年(承和元)正月19日、(遣唐使持節大使)藤原常嗣(副使)小野篁を任命した。(第1回渡航)836年(承和3)7月2日、遣唐使船四隻が博多の津を出航した。第一船と第四船が漂流して肥前国へ引き返す。

7月24日、小野篁が乗船していた第二船が漂流し肥前国松浦の別島(わけしま)に戻った。8月1日、太宰府から早馬が来て、第三船は強風のため船体が分

裂し水手(水夫)ら16人が板を編んだ筏に乗り対馬嶋に流れ着いたと伝達があった。

8月4日、同じく第三船に乗っていた9人が筏に乗って肥前国に漂着した。8月25日、第三船が対馬島に漂着したが乗員は3人だけであった。結局第三船の生存者は28人、死亡推定者120名以上である。第1回渡航は失敗に終わる。

(第2回渡航)

837年(承和4)7月22日、太宰府から早馬の言上あり。遣唐使の三隻の船が出航したが、たちまち逆風に遭遇し壱岐島・値賀島に漂着した。第二回の渡航も失敗となる。

(第3回渡航)

838年(承和5)6月22日朝、第一船・第四船が志賀嶋を船出し翌日有救嶋に着く。夜になり二隻は出帆する。突風に煽られ船は破壊や破損されたが唐の揚州に到着する。

また7月29日、第二船は、(副使)小野篁の乗船拒否により遅れて出港。8月10日、海州に着く。第三船は往路筑紫を出帆後遭難。復路だが、839(承和6)3月、

第一・四船の乗組員は新羅船9隻をチャーターして帰国する。第二船は8月南海の賊地に流着したところ賊民から襲われたので応戦する。しかし、衆寡敵せず30人程が小舟にて脱出し大隅国に帰着した。

以上が遣唐使の渡航概要であるが、渡海の困難さ・苛烈さが理解されたのではないだろうか。

3 乗船拒否と逃亡者の出現

第19次遣唐使の第1回・第2回渡航は失敗する。そして、838年(承和5)6月いよいよ第三回の渡航となった。ところが副使の小野篁が病のため乗船しないという予想外の事態が生じた。

篁の言い分としては、第一回渡航で遭難して戻ると、(大使)常嗣は第二船を第一船に改めそれに乗船したことで、常嗣が自分の安全ばかりを考えていることに怒り乗船拒否したというのだ。さらに怒りが収まらず「西海道の謠」を作り遣唐使を譏(そし)った。その文章ははばかるべき言葉が多く嵯峨太政天皇は激怒したとある。具体的内容は詳らかでないが、遣唐使制度に対しかなり痛烈な批判が書

かれていたと思われる。

佐伯有清氏は著書「最後の遣唐使」の中で篁が乗船拒否したのは「常嗣の自己本位な態度や、自分の命が大切だからではない。遣唐使制度を再検討すべきとの思いからではないか」と記述されている。しかし、その説には論理的に無理がある。常嗣を批判すること、遣唐使制度の再検討を求めることが結び付かないのである。常嗣を批判したり、鴻臚館から遅く出発したり、ぎりぎりになり病気を口実にするなど篁の態度・行動はあまりにも幼稚である。篁は2回の渡航失敗を経験しているので初めから乗船拒否の覚悟を決めていたわけではない。本当は渡海したくなくたっただけなのであろう。

さらに遣唐使船に分乗していた知乗船事の伴有仁・曆請益生の刀岐直雄貞・歴留学生の佐伯直安道・天文留学生の志斐連永世ら四人は乗船せず逃亡する。ここでも佐伯氏は「渡海が恐ろしいからではなく、篁の遣唐使制度の再検討を促す勇氣ある行動に共鳴出来たからである。」と述べている。私はこの説にも同意は出来ない。やはり根底は渡海を避けたいと思っていた

ら、乗船拒否者がたまたままでので触発されて逃亡したと言うのが事実ではないだろうか。但し、私は乗船拒否者、逃亡者を責める気持ちはない。彼らの心情は十分理解出来るからである。838年(承和5)12月篁の処罰が決定する。篁は病といって朝命に反し乗船拒否をしたことは、律条によれば絞首刑に相当するが、死一等を減じて遠流の刑として隠岐国へ島流しとなった。また、逃亡者の4人は839年(承和6)3月処罰が決まった。本来斬刑であるが、死一等を降して佐渡の国へ流配されることになったのである。共に死刑でなく安堵した。政府も流石に死刑は酷すぎると思っただけであらう。

840年(承和7)2月4日、篁は隠岐の国から京に帰還される。同年2月16日、伴有仁、刀岐直雄貞の二名が許されて都に召喚された。あとの二名はどうしたのかは不明である。

4 律令政府の対処

政府はこの様な危険度の高い遣唐使の渡海についてどのような対処

をしたのであろうか。第19次遣唐使の第2回渡航失敗のあとの838年(承和5)4月28日仁明天皇から大使常嗣、副使篁に勅が下る。内容は「遣唐使は朕の使節として大海を渡るとなっているが、未だに太宰府の宿舎に居るのは極めて遺憾である。このころ北東の風が吹き始め、出航に適した時期が迫っているのに行動していない。使節としての使命遂行はどうなっているのか。早く出航し朕の意に沿うことを示せ。」である。2度の失敗のあとであるにも拘らず、叱咤、叱咤である。暖かい言葉はない。もっとも、政府に言わせれば対処はしていると主張するであらう。

①第19次遣唐使の第1回渡航失敗の後、836年(承和3)7月、藤原広敏らへの勅符の中で「遣唐使たちは逆風で漂流する試練にあったのだ。太宰府の施設に收容して再出発の日までいたわってやれ。」と配慮を示している。②また、838年(承和5)5月、政府は、遣唐使の為、全国で海龍王経を読ませる指令を出している。③さらに、第19次遣唐使の第3回渡航で第二船が帰路さまよっている時の

840年(承和7)3月、「未だ戻らぬ第二船のため太宰府および縁海諸国に火を挙げて之を待つべし」と命じたことを挙げるであらう。

しかし、これは根本的な対処ではない。政府がすべきは前例踏襲主義を止めることであつた。そして毎次ごとに何よりも遣唐使の人命を尊重する観点からの見直しをしていけば、これ程多数の有能な人材を犠牲者にしないで済んだ。

例えば、(1)遣唐使は第19次まで必要であつたのか。遣唐使の主な目的は①外交折衝と②唐からの文化・技術・仏教等の導入であつたが、260余年の間には必要性が変化したのではないか。特に第19次は不要であつた可能性が高い。(2)遣唐使は志願制にすべきであつた。(3)遣唐使船の遭難理由としては幾つかあるが、特に船の大型化が指摘される。当時優秀とされた新羅船のように中型船の複数での対応に出来なかつたか。(4)往復共に、新羅船をチャーターすることで解決出来たのではないか。等々。

5 続いて遣唐使が如何に渡海を恐れていたかの裏付けとして次の2点を記す。

とも遣唐使は建前論で述べており、本心は渡海を中止してとの悲痛な叫びの表示であつたと考える。

(1) 835年(承和2)正月

第19次遣唐使は第1回渡海を前に度者(どしや)【注2】を賜ることを願ひ出していた。彼らの主張は「太政官符」にあるが「海を渡る際、險難、憂いかたなし。(略)請うは録事【注3】以上に度者を賜りたい各々の身に代わり精進せしめん。」とある。これは度者に精進してもらい仏力により渡海の安全を願うものであつた。遣唐使が唐との往復航海を如何に危険視していたかの表れと思う。

【注2】剃髪して出家することを許された者をいう。

【注3】録事とは記録・文書を司る官職の者をいう。

(2) 838年(承和5)5月 遣唐使から「二回の渡海失敗は神霊の妨げと思われまます。これから渡海するのは極めて困難です。成功させるためには仏の助けが是非とも必要です。ついては、諸国に大般若経を読ませて下さい。」と要請した。 もはや神仏にすがるか術はなかつたのである。なお、私は2点

【注4】838年(承和5)12月、篁は正五位下の位記をはく奪され、一介の庶民の身分に落とされた。

【注5】839年(承和6)9月、(大使)常嗣から水夫に至るまで官位を昇任する詔があつた。

だが、ごく少数であるが信念を持って渡海を目指すものがいたのも事実である。それは第19次遣唐使の第一回渡航時に、第三船に乗っていた真言請益僧の真済と留学僧の真然である。二人は第一回渡航で乗船した第三船が破壊されたので筏に乗り三十人余と南の島に流された。救助されたのは真済と真然のみで、他は全て餓死となつた。そして、両者は二回目渡航には参加していない。しかし、二人の意志で辞退したのではない。真相は二人のような人物が船に乗るのは不吉であると疎まれ弁管局の命令で除外されたのである。従って如何なる艱難もものともせず渡海すると言う人も少数であるが存在したのである。

7 おわりに

遣唐使により齎された文物は、今日の我々にも恩恵を授けてくれ

ている。我々はたまには遣唐使の命を懸けた労苦に思いを馳せて彼らの健闘を讃えてあげたいものである。

参考文献

- 1 「日本書紀 下」宇治谷孟著 講談社学術文庫1999・1発行
- 2 「続日本紀 上」宇治谷孟著 講談社学術文庫2007・8・発行
- 3 「続日本紀 中」宇治谷孟著 講談社学術文庫2007・9発行
- 4 「続日本紀 下」宇治谷孟著 講談社学術文庫2008・1発行
- 5 「最後の遣唐使」佐伯有清著 講談社学術文庫2007・11発行
- 6 「遣唐使の光芒」森 公章著 角川選書 2010・4発行
- 7 「遣唐使は見た!」横浜ユ一ラシア文化館編集 公益財団 邦人横浜ふるさと歴史財団 2013・11発行
- 8 「遣唐使の見た中国」 古瀬奈津子著 吉川弘文堂 2003・5発行
- 9 「円仁 唐代中国への旅」 エドウィン・O・ライシャワー著 講談社学術文庫2009・6・発行

壇 こはま

焼鮎

高島 治

焼鮎を齧れば旬のページ
鎮魂の街にカンナの燃ゆること
触れ難し縁数多や木槿咲く
室堂に星降り止まず寝を惜しむ
望月や喜寿を迎えて足るを知る

石路の花

藤盛 詔子

花の下再会約す別れかな
塩梅は母に及ばずきゆうりもみ
幸不幸いずれ過ぎゆく秋の雲
野菊咲く過ぎしことみな美しく
穏やかに喜寿てふ節目石路の花

俳 研よ

夏を詠む

谷川 操一

水の面城崩しおりあめんぼう
人生の午後ひたすらに草を引く
血脈の匂ひの残る土用干
でむしの角「はやぶさ」と交信中
牡丹園順路は好きなピンクから



壇 こはま

雑詠

竹内 章二

雲の峰憂き世を見下ろし聳え立ち
爪痕に悲しみ残し野分去る
この月を便り途絶えし人や見る
金木犀香りにつられ路地曲がり
曼殊沙華妖艶魔女のさんざめき

九十歳の挑戦

市川 康夫

中学に進みて先づは犬ふぐり
炎天下シートを敷きて青女房
秋の音に耳すましたり救急車
庭の隅刈り残したる石路の花
ねむり目や旨寝をしたる年始

俳 研よ

「湖東三山」

竹村 清繁

めぐりゆく湖東三山青嵐
橋潜り来る待宵の波がしら
蛸袋ほたるを知らず咲きにけり
萩の風高きを吹けば松の風
曼珠沙華書写へ遍路の道つづく



壇 こはま

市川康夫

みつめあひ手を握りあひ語らへば
王朝のよひ雪しとど降る

こころよき疲れおぼへて微睡めば
人に知らぬ早う起きよと

逝きにしになほ宣はくうつつ世の
夕餉ともにと姿うせにき

人生の終りたるのち生きのびて
消えゆく坂の退屈ならず

背をのぼしトレーニングとただ歩く
ひとは言ふめり粹狂なりと

旧き友みな逝きはてて弔辞よむ
をとこありとは思はざりけり

ものふは厳しきものか落馬して
武家の棟梁はかなく消ゆる

高野賢彦

橘の花の香りし道ゆけば
朝風はいと心にしみる

中国の天津勤務の兄来り
初めて行きし本牧海岸

遙かなる袖師の海で初泳ぎ
波と戯れ遊びしむかし

幸おおきアルプス越えの西風は
幼き日々の忘れじ模様

深みどり遠き野山へ旅にい
胸にすいたし清らかな空

歳ははや八十路の半ば過ぎたるが
まだまだ行かん何処へも

深夜便ひそかに聞ける楽しみは
古き歌曲と昭和はやり歌

山本修司

しやくなげのフラワー緑道春深し
マスクはずせず気鬱が残る

大地震戦争体験百歳が
耐える時だと娘に説教

初夏の風さえずる小鳥波の音
空想浸る窓越しの椅子

このところ直接会話家族のみ
気付けばいつも整理整頓

さんぽ道緊急事態終結し
あじさいが競演マスクの色と

天空にひまわりの群れ屹立し
萎えた一輪百歳が逝く

図らずも名画のファン羅生門
自転車泥棒プライムビデオ

歌 歴研よ

壇 こはま

詩 歴研よ

ゴールド・ベルク

〜楽しい変奏

丹下重明

それは深い森の奥から
楽しいリズムをきざみながら
やってきます

ベースのつややかな力強い
低音の響き

ゴールド・ベルク〜第30変奏

やがて天上の彼方から
透明な鐘の音のように
ピアノのアルペジオ……

ベースとピアノは蝶のように
軽やかに舞い踊るのです
クオドリベット

二羽の蝶は高く舞い上がり
次第に遠ざかり
かすかな余韻を残して
消えて行くのです

ジャック・ルーシェ・トリオ
プレイ・バッハ的一幕

日本の夏 七月の慈雨

高野賢彦

夏は五、六、七の三か月だ

六月から七月にかけては梅雨 そして盛夏へ

今年の長雨と豪雨には言葉がない

夏は明るくあつて欲しい

浴衣を着て夜空の星座を眺めたい

澄み渡った秋や冬と異なり、多くをのぞめないが……

日本は雨の多い極東に位置している

欧州人から見れば日本は遠い極東の国、

Far Eastの田舎の国だ

昔はわけのわからない国だった

だが、意外にも田舎者の頭脳は冴えていた

日本が赤道と北極の中間にあり、

住民が勤勉だったからだ

日本の梅雨は慈雨と考えなければならぬ

七月の豪雨は慈雨の延長線上で考えたし

エッセイ

古歌を訪ねて

その十一 西行が語らなかつた人たち

丹下 重明

ふるまひとは

みし世にもにずあせにけり

いづちむかしの人ゆきにけむ

西行

山家集・中巻・雑（1030）

この歌は、西行が晩年、各地での放浪から一時京に戻った時に詠んだものといわれます。大意は「昔住んでいた場所は、そのころとは似ても似つかず、荒れ果ててしまつた。そのころともに住んでいた人は、何処に行つてしまつたのだろうか……」。

「題知らず」とあり、何処を見ての作なのかは明確ではありませんが、おそらく、出家前の住居のあった場所辺りかと推察されます。ふるまひを想うこの一首には、そこはかとない寂しき、悲しみ、そしてやさしさがこもこも入り混じっています。

西行はその妻子について一言も語っておらず、歌にも詠んでいません。西行の謎の一つとされています。この一首も直接、妻子のことを詠んだ歌ではないのですが、「むかしの人」とは、もしかしたら西行が昔ともに暮らした家族のこと、西行が捨てた妻や子のことを想つて詠んだのかもしれない。

西行（1118～1190）は俗名を佐藤義清（のりきよ）と称し、平安末期鳥羽院の北面の武士でした。藤原北家の傍流の血筋で、平将門を討つた藤原秀郷は八代前の先祖です。したがって、奥州藤原氏は遠い親戚筋ということになります。

後年、平泉を二度にわたって訪れている西行、当然藤原秀衡と会っているはずなのですが、なぜかそのことには触れていません。絢爛豪華な平泉文化についての詠歌もありません。先に述べた妻子のこととともに、西行のこのころの内について、考えさせられるものがあります。かたくなに、語ることを避けたものやことがあつたのだと思わざるを得ないのです。

です。

そんな西行ですが、その詠歌には独特の魅力を感じます。情感豊かな、わかりやすく親しみやすい歌が多く、西行の歌が、今日まで多くの人たちに愛されてきた大きな理由がここにあると考えています。二千首を超える歌を残している西行、いわゆる『いい歌』を数多く詠んでいます。

次の三首などもそうした歌で、筆者の好きな西行歌ですが、深い意味はともかく、その大意はだれにでもわかりやすいものです。

春風の花を散らすと見る夢は
さめても胸のきはぐなりけり
心なき身にもあはれは知られけり
しぎたつ沢の秋の夕暮れ
とふ人も思ひ絶えたる山里の
さびしきなぐはすみ憂からまし

西行が活躍した時代の和歌は、新古今調と称されて、題詠や本歌取といった、レトリックを多用した、観念的、技巧的な作品が中心なのですが、それはそれで芸術性が高く評価されています。その集大成が、新古今和歌集（1205年編

纂・以下新古今集）です。

歌人で言えば、藤原俊成・定家父子、慈円、藤原良経、藤原家隆、女性では式子内親王、俊成卿女などが、代表的な人といえます。西行もその一人であるだけでなく、94首という新古今集の歌人中、最多数の歌が取り上げられています。その中から、いくつかを挙げてみます。

吉野山去年のしおりの道かへて
まだ見ぬかたの花を尋ねん
春歌上（86）
津の国の難波の春は夢なりや
蘆の枯葉に風渡るなり
冬歌（625）
寂しきこ
たへたる人のまたもあれな
庵ならべん冬の山里
冬歌（627）
年たけてまた越ゆべしと思ひきや
命なりけりさやの中山

風になびく富士の煙の空に消えて
ゆくへも知らぬわが思ひかな
羈旅歌（987）
雑歌中（1613）

その西行は、新古今調の歌も詠んでいますが、同時代の歌人と

いくつかの資料から、西行には妻も子もあり、子については、娘がいたことは確かといわれています。二十三才の時、その家族を捨てて出家します。歌僧西行法師の誕生です。出家の動機については、今日でもさまざまな説があつて定まありません。

西行伝説で知られる「西行物語」ほかいくつかの資料によると、友人の急死による無常観、ある高貴な女性への想いがかなわなかつた失恋説、さらには当時の社会状況への不満説、など……。

ただ出家前の西行の詠歌から、かなり以前から出家の意志があつたことがわかります。出家後の西行の歌人として大成した生涯を俯瞰してみると、出家は、純粹に歌人として生きるための一つの手段だつたのではないかと考えられるのです。

「西行物語」には、西行が出家に際して、裾にすがりつく四才の娘を屋敷の庭に蹴落としたという話がつづいてきます。この話にもどづく場面が「西行物語絵巻」にも残つていて有名ですが、西行の出家の意志の強いことを示したエピソードだといわれています。

はかなり異なる歌風を目指していたと考えられます。

出家後は、生涯を通じ、旅と一人居の草庵生活が中心だつた西行は、京とその近郊のみが生活圈だつたため、観念的な詠歌が多かつた宮廷貴族とは異なる歌を詠んでいて当然とも言えます。

先に挙げた歌を見ても、西行の歌には生活感があり、広く見聞きした現実を、素直に歌に詠んだのです。そのことが、歌のわかりやすさと親しみやすさにつながっていると思ふのです。

作家で文芸評論家の竹西寛子氏は、その著書の中で「いい歌はとにかく読んでいて快いのです。その快さを通じて、言葉で生きる人間がいつそう好きになります」といつておられます。西行の歌は、まさにその典型だと思ふのです。

その西行が何故、妻子について、歌を含め、なにも語らなかつたのでしょうか……。

表だって歌にも文章にも残さなかつた西行の妻子を知る資料としては、いくつかの西行伝説しかないのです。西行伝説の中心といえる「西行物語」や「撰集抄」、さらに

西行は、一口でこうと云えない多面的で複雑のところがあつて、説明のむづかしい人物です。西行研究で知られた白洲正子氏は、その著書「西行」の後記で、次のように言つておられます。

「何といつても西行はむづかしい人物なので……」と前置きされた後、「彼は空気のように自由で、無色透明な人物なのである。したがって、とらえどころがないばかりか、多くの謎に満ちている」と。

ただ筆者は、逆説的な言いかたかもしれませんが、西行は、さまざまな色をもっている人なので、容易に人物の判定がむづかしいように感じています。聖と俗、強と弱、剛と柔など……、的を絞ることが出来ないのです。

同じく西行について書いておられる、歴史学者・目崎徳衛氏は「西行は感傷的ともいうべき歌を生み出す女性的感性をもちながら、反面には不敵な風貌、強直な意志、縦横の行動力をそなえた複雑な人格である」と述べておられます。

ほかにも西行研究の資料は数多く出ていますが、それらに目を通せば通すほど、わからなくなる人物

は「方丈記」で知られる鴨長明の著書「発心集」その他にある西行の妻子についてのいくつかの記述は、とても参考になります。

「西行物語」

妻については、西行の出家の意志の固いことを早くから感じていた妻、出家を告げる夫の言葉にも、ただ無言で泣くばかりだつたこと。そしてほどなく妻も髪を下ろして尼となり、高野山西麓の天野に住み、後に同じく出家した娘とともに天野の地でともに暮らし生涯を終えたとあります。

娘については、後年成長した娘のうわさを聞いた西行が、京に立ち寄つた際、十五、六才になっていた娘とひそかに会い、出家を勧めたとあります。京の冷泉院と称する高貴な公家の女性の養女となつていた娘が、主家の姫君の婚姻に際し、その侍女として主家を出るこゝとなつていると知り、出家を勧めます。

娘は西行の言に従い、出家し、天野の母のもとに行き、生涯独身をとうし、この地で亡くなつたと書かれています。

鴨長明の仏教説話集「発心集」
 こちらの西行についての記述は、娘についてのことが中心になっていて「西行女子出家事」という話が第六話に収められています。これによると、西行が出家にさいして、弟・仲清に娘の面倒を依頼したところ。さらには西行が京にもどったおりには、それとなく娘の史上最長となっていて、連続在位期様子を見守っていたとも記されていて、西行が娘の行く末に深い心配りをしていたことがうかがわれます。

娘はさる高貴な公家の養女となります。後年、西行に会い、出家をすすめられ、天野の母のもとに行くという、この辺りの話は、前記の「西行物語」の記事と共通していますが、細部にはかなり違いもあります。

言うまでもなく、これらの説話集には虚実が入り混じっているのですが、西行の妻子については、これだけの記事があるということは、無視できないことと思われるのです。西行はその詠歌から、強い意志と同時に、優しい心の持ち主であることが感じられます。妻子を捨てたことは、生涯大きな心の重荷となっていたのではないのでしょうか。西行はこころの奥底では、いつも妻や娘を想っていたと思いたくありません。だからこそ、妻子についても記

録に残さなかったのではと思うので、人には人生を左右するような重みをもっていないが、忘れ去ってしまいたいようなことやものがあるものです。けれども忘れることが出来ないそのことに苦しみ、悩み、時には悲しむのです。そして時には懐かしむのです。西行も、きっと同じような思いを抱いていたのです。などと思ってみたりもするのです。

おわり

エッセイ

その気にさせないで!?

真野 信治

はじめに

令和二年八月、安倍総理大臣が辞任を表明しました。第一次政権と合わせた通算の在位期間は憲政史上最長となっていて、連続在位期間も二八〇〇日を超えています。その安倍首相の記者会見以降、いわゆるポスト安倍の自民党

総裁レースの幕が切って落とされました。そんな中で、総裁候補の一人である石破茂議員を取材したテレビ番組が放映されていました。キャンディーズの大ファンである石破氏が「その気にさせないで!」と歌っているのを偶然視聴したので、どういう経緯で歌っていたのかは知りません。言ってみれば、殺伐とした総裁選のニュースの中で、ちよつとホッとした瞬間だったので、が、同時に、その気にさせられて痛い目にあつた歴史上の人物達が頭をよぎりました。寵臣の言葉にその気になってしまつて暴走した為政者、女御の色香に騙されて

その気になってしまい、周りが見えなくなったおバカな殿様、などなど。様々な人物が頭をよぎりますが、「その気にさせられて」とんでもないことをしてしまった人の代表格は、なんと言っても平将門でしょう。天慶の乱を起した人物としても有名ですが、歴史に興味があれば必ず一度は認識する平安時代を生きた有名人です。そして、将門をその気にさせたのは、何を隠そう、武蔵権守興世王その人なのです。

天慶の乱

実は、この天慶の乱は大きく二つ

せまず。そして将門が常陸国府を占領した後、問題発言をしてしまっています。すなわち、「常陸国府を攻めて国司を追放してしまつたが、その罪は決して軽くない、どうせなら坂東諸国すべてを略奪して、しばし様子をうかがおう」と。その気にさせられた将門は、そのノリで『新皇』と称して即位するわけですが、これが将門の運命を決めています。当の興世王は『新皇』朝廷の「宰人」として除目を執行し、本人は上総介となりました。ここでは、その気にさせられた将門とその気にさせた興世王について、呟いてみたいと思います。

平将門と坂東八平氏

将門本人の来歴はさておき、研究者の間でもよく話題に上るのが、将門の父良将（持）とその兄弟の顔ぶれです。父の良将は、『常陸国正宗寺旧記』延長八年（九三〇）には鎮守府守軍としてその職にあつたことが知られています。他に正式に鎮守府將軍であつた証左を持つ兄弟はいないので、良将が嫡妻の子であり、国香以下は庶出であつた可能性が高いのです。『将門記』に登場する顔ぶれは、国香

（良望）、良将（持）、良兼、良文、良正ですが、これ以外にも良房、良藤、良広、良持、良茂などが確認できます。しかし、彼らすべてが実在かと言え、そうではないでしょう。桓武平氏の系図は、古くは室町期成立の『尊卑分脈』で確認できますが、これはかなり誤謬があると言われています。それを踏まえると、気になるのはなんといつても村岡五郎良文です。良文を祖として延展していく坂東八平氏の系図は、世代の誤り、人物の重複、実在性の低さなどから、俄かには信じられません。千葉氏・三浦氏などの系図類は、ほぼこの『尊卑』を祖本としていますので、同様の問題を抱えています。では、信用できる平氏の系図はないのかという、実はあります。鎌倉中期、越後国奥山庄に移住した三浦氏系中条氏が伝える『桓武平氏諸流系図』です。これに記される主な系図は十三世紀中頃の人物をもつて終わっていますので、当然そのころの成立と考えられます。すなわち『尊卑』よりは遥かに古い系図と言えます。また、世代間の錯誤、人物の重複等は一切見られないこともあり、平安末期以降の系譜内容

はかなり信憑性が高いと言われています。平高望流は十一篇構成となっており、五男良文流の詳細な情報がほとんどを占めます。注視したい点は、千葉氏や三浦氏など祖が同じ良文なのだから系線で結び一篇としても良いはずなのですが、それぞれ別個に起系している事です。こうしてみると、これらの系図が実は以前より個別に存在していたかもしれず、その後一つに集められた可能性が浮かび上がってくるのです。南山大学の青山幹哉氏は、坂東の諸豪族は平安末期頃、自らの出自を平氏とし、その記憶の伝承からその遠祖を「村岡五郎」とこと平良文なる人物に収斂させたこと指摘します。

したとし、「坂東八平氏」という虚構に近い観念的世界像を構築したと締めくくっています。簡単に言うと、良文を祖としている千葉氏・秩父氏・三浦氏などの坂東平氏一族は、ひよつとして全く別の氏族であり、鎌倉期から南北朝にかけて、良文流平氏として一括集約されたのではないかという事なのでしよう。確かに、村岡五郎の伝承は武蔵・相模・下総など広範囲に存在し、甥の将門に与したとも敵対したとも言われ、はつきりしません。これはそれぞれの氏族系図にそれぞれの村岡五郎伝承が付記されていたためと思われる。

(67)

良文の世代、次世代、次々世代で各平氏系図相互の齟齬が大きいのは、ここが各氏族系図とのジョイント部分となつたためとも説いています。なるほど、これは卓見と思われま。武家氏族は、その祖先が源氏・平氏・秀郷流藤原氏であることが期待されるようになりま。結果、青山氏は、中世の坂東平氏系図は坂東諸豪族の系図を再編成・再創造したことで、歴史を新たに物語るといふ機能を發揮

に非常に興味深い記述があります。村誌は、平高望に恒望という弟がいたことを記しています。ただ、参考史料の提示はありません。しかし、高望に兄弟がいなかつたことを積極的に裏付ける根拠もないので、一概に否定は出来ないのです。筆者は、『桓武平氏諸流系図』を意識すると、実はこの恒望の子が良文ではないかと思つています（『村誌』は良文が恒望の養子であつたことを記す）。さらには、将門の叔父にも村岡五郎という人物がお

(66)

り、平貞盛などと同じく将門に敵対していたのではないかと推論します。良文が恒望の子であれば、それほど近親ではないゆえ、将門の乱に積極的に絡まなかったことは納得でき、一方の叔父である村岡五郎は、他の兄弟と同一行動をとったものと思われず。憶測を重ねれば、村岡五郎もひよっとして良文と名乗ったのかもしれない。いずれにしても、『将門記』は敵対しない良文が、最近話題になった『大法師浄蔵伝』奥書には敵対する良文が登場します。一次史料から、全く違う行動をとる良文の存在が窺えるわけです。つまり、現在我々が認識する村岡五郎良文とは、ひよっとして二人の人物が合体した伝承によるものなのかもしれません。そう考えると、それぞれ氏族の本拠や伝承から、秩父氏・土肥氏あたりは村岡五郎良文の子孫と見なせますが、千葉氏は、長元の乱を起こした平忠常(恒)以降、恒の字を使用するケースが多くなっていることから、恒望の子の良文の後裔とみなす余地もあります。また、三浦氏・鎌倉氏などもその祖である村岡小五郎忠通(良文の子)の実在性に疑問符がつく

ことから、ひよっとしてこれも恒望系の平氏か、或いは上総介良兼の子孫の可能性もありうると思われまます。こうしてみると、これら坂東の諸豪族は、平安末期から鎌倉を経て南北朝に至る間、遠祖の違いはあるものの、いわば村岡五郎良文裔を称するワンチームとなつて「坂東八平氏」なる大氏族を創り上げたかと仮定することは決して不自然ではないのです。いずれにせよ、桓武平氏と称する良文後裔の系譜研究は今後の課題と言えるでしょう。

興世王の出自

興世王は、当時従五位下武蔵権守であったことは間違いないが、どの系統の孫王であるのかは、その系譜が不明であるため、想像するしかありません。明治の系図家である中田憲信の『皇胤志』には、桓武天皇の皇子仲野親王の子の十世王の子の時世王の子として登場しますが、この系譜は史料の根拠がないので、俄かには信じられません。したがって、別な面より推測するしかないので、それは「官位」です。天皇の孫であれば、最初の叙位は従四位下なので、興世

王は二世孫王ではなく、三世孫王(天皇の曾孫)以下であることがわかります。また、武蔵国は『延喜式』の規定によれば、最上位の大国です。これに武蔵守及び権守として叙される皇族或いは臣籍降下した臣下のなかに、三世の従五位下磯野王、従五位上弘道王がいます。しかし、大国である武蔵国の守で四世王はいまないので、ほぼ間違いなく興世王も三世孫王でしょう。世代的・系譜的に見るとやはり文徳天皇或いは光孝天皇の曾孫である可能性が高く、恐らく

文徳の皇子惟彦親王の子の惟世王の子ではないかと推察します。この興世王ですが、将門の敗死の後すぐに上総で討たれてしまします。このように、将門・興世王コンビの東国新政権は、あつという間に潰えたのです。

(主な参考文献)

・「王と呼ばれた皇族」赤坂恒明、参考論文「頭わす系図としての氏系図」青山幹哉

(完)

「ショート笑人」 仰げば尊し 和菓子の恩？

先頃テレビで、卒業式を終えた女学生にインタビューしている場面を目にして驚いたことがあります。歌詞も理解せず、「和菓子の恩」と歌っているのには…。

この頃の卒業式には、埼玉県秩父の中学校教師が作った「旅立ちの日に」がよく歌われているようです。

「仰げば尊し わが師の恩」と歌った私たち世代の卒業式は、半世紀以上も前の良き思い出となりました。(藤盛詔子)



エッセイ

戦後の昭和・年表を眺めてみると・・・

長尾 正和

はじめに

「コロナ禍で遠出もできず人込みを避けつつ散歩をする毎日、よく立ち寄るのは本屋だが、このところ『昭和史』をタイトルにする本が多く出ているのを目にする。

「昭和史」とはこれまで太平洋戦争以前のお話、という程度の認識しかしていなかったが、パラパラめくってみると、まさに我々が生きてきた戦後の出来事についての評価や歴史的意義などがすでに詳細に論ぜられている。最近の時代区分では、戦後は現代史に、同じ昭和でもそれ以前は近代史扱いになっていた。今さらだが「昭和」はすでに30年以上前までに終わっていて今や立派な、というのもおかしいが、一つの時代として扱われていることに改めて気づく。

というわけで、年表(「標準日本史年表」吉川弘文館)を眺めてい

るうちに、ふと、この時代のいろいろな出来事を、どこまで覚えているか、大事件が起きたときどこで何を、何を感じていたのだろうかなどが気になりました。

幼年・未成年のころ

生まれたのは昭和十五年(1940)。翌年十二月、わが国は太平洋戦争に突入し、昭和二十年八月、五歳のときに戦争は終結している。また幼児期なので、この間の出来事、例えば終戦時の玉音放送、あるいは翌年初めからの極東国際軍事裁判開廷などの記憶はほぼない。唯一うっすらと覚えているのは疎開先の前橋での空襲(昭和二十年八月)で、祖母に連れられ郊外の実家近くの小高い丘から市内に火の手が上がっている様子を遠目ながら見たこと位である。

小学生時代の出来事で少し記憶にあるものは、昭和二十三年(1948)一月の帝銀事件、翌年七月の下山事件など、社会の不安定さを示したものが一方、あとには「湯川秀樹博士のノーベル賞受賞(昭和二十四年十月)、二年後の九月「サンフランシスコ講和条約締結」、さらにそのほぼ半年後

の「映画・羅生門グランプリ受賞」などがある。このころからわが国が少しずつ国際社会に認められる明るいニュースが続いている。

しかし、この頃の出来事についての記憶は、親や周辺の大人達の話が投影されていたのであろうという感じが無きにも非ずである。

中学生以降はさすがに社会情勢にも関心を持つようになったのか、年表には「そういえばそんなことが・・・」という出来事が多々登場する。

高校時代も同じような状況ながら、この詳細な年表には載っていないが、自分にとっては忘れられない出来事もあることに気付く。長嶋茂雄と王貞治の登場である。

昭和三十三年(1958)四月、長嶋の公式戦初試合で、国鉄金田正一投手が四打席四奪三振で豪快に打ち取ったのは鮮明に記憶している。長嶋はすべてフルスイングだった。

王は同じ年生まれである。彼は高校二年の春の選抜で投手として全国優勝をし、夏の甲子園ではノーヒットノーランも達成する。我々高校生にとってもすでにスターであった。三年のとき夏の甲子園の東京

大会で、早実は決勝で明治高校と対決する。昭和三十三年八月の決勝戦はどういうわけか都内のわが校のグラウンドに放送が流された。早実が延長十二回の表で四点を入れたのでこれで勝ったと安心していたら、その裏に王が打ち込まれサヨナラ逆転負けをした。これで三年の時に甲子園に行けなかったが、前年の長嶋に続き、巨人に入団した。これ以降、大の巨人ファンとなる。我々の多くは「巨人、大鵬、卵焼き」世代と呼ばれるが、それも全く納得である。

ちなみに同年生まれで、大ファンでもあり、その人生を応援しよう、と自分で勝手に決めていた人物には、王はもちろん、他にゴルフのジャックニクラウス、将棋では加藤一二三、ジャーナリストの立花隆がいる。他にもデヴィエスカルノ大統領夫人、亡くなってしまったが音楽界のジョンレノン、また、横綱大鵬も同じ年である。

高度経済成長時代

このあと安保闘争(昭和三十五年、および昭和四十五年)や連合赤軍あさま山荘事件(昭和四十七年二月)など社会不安を示す出来

事もいろいろあったが、戦後の最大の特徴は間違いなく「高度経済成長」であろう。最近の定義によれば、始まりは昭和二十九年（1954）十一月の「神武景気」であり、「岩戸景気」、昭和三十九年（1964）十月の東京オリンピックを経て、昭和四十五年（1970）七月の「いざなぎ景気」の終息までの十六年間とされている。この結果、戦後の壊滅状態から、昭和四十三年（1968）にはGDPペースで世界第二位という経済大国になった。日経平均株価も上がり続け最高値が三万八千九百円超となったのは昭和が終わった年、平成元年（1989）十二月であったから、結局われわれはバブル時代を含めて歴史上稀に見る経済成長の中で生きてことになる。

ケネディ大統領暗殺事件

いろいろな歴史的出来事の中で、自分がどこで何をしてきたかを鮮明に覚えているものの最たるものは昭和三十八年（1963）十一月のこの事件である。

この三年近く前の彼の大統領就任演説（昭和三十六年一月）、「あなたのために何ができるかを問わないでほしい。あなたがあなたの国のために何ができるかを問うてほしい。」（米国国務省訳）との言葉には感銘を受けた。日本の政治家でこのような理念を持ち、国民に直接伝えようとする人物はいらぬだろうか、と思わず考えてしまった。キューバ危機（昭和三十七年十月）でのフルシチョフやカストロと対峙の中で回避までの連日の対応も見事だった。

この暗殺事件を知ったのは日本時間では二十三日（土）朝である。この日は部活で前日から仲間と宿泊所におり、日米間初のテレビ宇宙中継という大イベントがあるというので早起きして待っていた。その中継がダラスでの暗殺シーンである。歴史的な出来事が重なる極めて珍しい場面であった。

三島由紀夫割腹事件

昭和四十五年（1970）十一月、彼の大ファンだっただけに、これにも衝撃を受けた。

このころ、会社では営業職について、ある取引先に行く前の昼食時に日本橋のそば屋で天丼を注文して待っているところに店内のテレビに自衛隊市ヶ谷駐屯地での彼の演

説のシーンが突然現れた。のちになって知るが、三島と楯の会隊員四人は総監を縛って拘束したのち、三島の要求に基づいて集まった大勢の自衛隊員に対し演説を始めた。テレビに映っていたのはまさにその時というタイミングであった。演説の趣旨は「自衛隊よ立ち上がれ」というものだったそうだが、マイクを使わず、自衛隊員たちのヤジと怒号が強かったこともあってこのとき何を言っているのかわからずであった。

社に帰ってから、三島が割腹自殺したことを知る。彼の描く世界は美的で、華麗、格調の高さみたいなものも感じ、敬意も払っていたので、突然偶像が叩き潰されたような感じを受けた。このあと彼の作品を読み返すことはほとんどなく、当時古本屋まわりで苦労して集めた初版本十数冊はいずれもまだそのまま書棚に眠っている。

この四十五歳での若き自死の機となったことについて、つい最近のNHKの検証番組では川端康成のノーベル賞受賞であったとする。三島が師と仰いでいたのは川端康成でありお互い非常に親しかった。ノーベル文学賞を日本人として最

初に取るのは自分であると強く考えていたが、それが叶わないことがはつきりし、文学者としてより肉体と精神性を重んずる考えに移っていったという。

なお、川端は三島の仲人であったが、葬儀委員長も務めている。川端康成にとってもこの事件は大変な衝撃で、二年後の昭和四十七年（1972）五月に逗子マリーナの一室で自死している。七十二歳である。川端文学も好きでもあり、このマリーナをよく利用していたものとしては、これもショックだった。今でも葉山港からわれわれの艇で出て隣の逗子マリーナ沖に差し掛かると、時折仲間の誰からか川端の話が出てくる。

(70)

米大使館人質事件とテヘラン脱出

自分が昭和に残る事件に直面したのは、昭和五十四年（1979）二月のイラン革命とその翌年四月のアメリカ大使館人質事件によるテヘラン脱出劇である。三十代最後のころである。

初めて海外勤務が命ぜられイラン革命の半年後の八月、初の南回り便でテヘランに赴任した。

この六年前には中東戦争をきつ

けに石油の原油価格が高騰し、わ

が国では第一次オイルショックによる狂乱物価と買い占め騒ぎが起きた。一方、石油産出国側はこの高騰で国の資金が一挙に豊かになり、近代化に向けて巨額の産業投資を始める。イランも例外ではなく、ここでの国家プロジェクト・ビジネスにかかわるべく多くの日本企業が進出していた。この年二月にはホメイニが亡命先のパリから凱旋帰国していたが、赴任したころ革命側による国内支配体制は十分確立していなかった。

話を脱線すれば、アルコール類は、まだ闇で一部出回っていた。取り締まりがしだいに強化されると、われわれもうっかり手を出すわけにはゆかなくなり、まもなく酒なしの生活を余儀なくされる。替わって喉をいやしたのは、意外にも果物であった。自分で絞ったぶどうやザクロの生ジュースは味も色合いもワイン代わりとなった。また、良く冷やしたメロンやスイカは単身赴任者の朝食代わりである。濡れたタオルもすぐ乾く非常に乾燥したテヘランのフルーツは本当にうまく豊富で、まだ不安定な社会で日々の生活にも神経を減らされる中で大

いに助けられた。

それはともかく、そのような中、赴任三ヶ月後の十一月に学生たちがアメリカ大使館に乱入、大使館員とその家族五十数名を人質にする。国際法違反である。翌年四月、当時のカーター米大統領はペルシヤ湾にいた空母を中心にして人質救出作戦（鷹の爪作戦）を実行。

しかし、出動途中にイランの砂漠ではよくおこる大規模な砂嵐に巻き込まれ多くのヘリが飛行不能となり作戦は失敗に終わる。



▲砂嵐で落下したヘリ
Wikipedia
「イランアメリカ大使館
人質事件」所蔵

アメリカのこの行動はイランを激高させた。駐在していた日本のみならず欧米のビジネスマンたちは一斉にイランを離れるようになる。この日は二十四日金曜日、すなわちイスラム歴では西暦の日曜に相当する日だった。娯楽もすっかりなくなっており、この日は朝から取引先の知人と麻雀卓を囲んでいた。

帰宅したのは夜遅くである。

そのまま寝込んだが、午前二時頃、突然ベッドわきの電話が鳴った。パリの駐在員からである。彼は挨拶もそこそこに「大丈夫ですか。本社からの指示をお伝えします。すぐテヘランを脱出してください。」という。東京から何回も通話を試みたが、回線混雑でテヘランに繋がらなかったためパリからも連絡を試みるよう言われた。

オーブンの航空券は常に持っていたが、脱出者が殺到してさすがにすぐには便が予約できない。ようやく取れたのは三日後だった。

しかし今度は空港に行っても十重二十重の行列でターミナルになかなか入れない。予約した便には乗れそうもないとほぼあきらめていたところに一人のイラン人がやってきた。お世話になっているスポンサーの秘書の旦那でKLMの職員だった。重いスーツケースも持ってくられて、長蛇の列をかき分け、入り口で警備の警官も押し分け、なか中に入ることができた。

出発前の機内には革命防衛隊が乗り込み、乗客たち個々のパスポートチェックなどをしていったこともあり、無事飛び立ち、イラン制空権

外に出るまでは搭乗客は全員が緊張していた。

数時間後にはアテネに到着、無地脱出できたことをすぐに本社に電話で報告したところ、次はそこからドバイに飛べとの命である。同地にはイラン、サウジ以外の中東地区を統括する駐在員事務所があり、しばらくそこに身を寄せるようにとの言であった。このまま日本に帰れるかとの淡い期待もすつ飛んだ。ドバイに居候するうちにそのオフィスが任期満了になり、その跡を務めることになる。

結局中東では二場所、通算三年の勤務となった。この時代家族ともども生活はいろいろ苦労したが、仕事の面では扱う案件のスケールも大きく、文化も全く違うこともあってかなり面白かった時代ではあった。

ゴルバチョフ、サッチャー、そしてオードリー・ヘップバーン

自分のような企業の一サラリーマンが歴史に残るような国際的な著名人に出会うことはまずない。

しかし、当時まだバリバリの現役だったソ連ゴルバチョフ元書記長（就任昭和四十五年・1985）

(71)

平成三年・1991)、ならびに英

サツチャー首相(就任昭和五十四年・1979年五月―平成二年・1990年十一月)の話をそれぞれ直接聞く機会があった。と言ってもニューヨーク勤務時代にNY経済人団体による定例昼食会でそれぞれをゲストスピーカーとして呼ぶこととなり、その席に数百人の参加者の一人としてお招きいただいたにすぎない。ただし、いずれも演壇に近いテーブルであったのでご尊顔を拝することができた。

ゴルフバチョフについては、サツチャーがソ連邦の中でもこの人物とならば、ともに仕事ができると評価していたという。昭和の終わり頃世界を動かしていたリーダーといえるのは米ドナルドレーガン大統領(就任、昭和五十六年・1981年一月―平成元年・1989年一月)とこのお二人ではなかったか。

英語力の問題もあり、逐一理解したとは言えなかったが、二人ともニューヨーク経済会の重鎮たちを大いに沸かせる。スケール感、発信力、見識を示したスピーチで、さすがという印象であった。

最後に、最もうれしかった出来事が大女優オードリー・ヘプバーンにお



▲オードリー・ヘプバーン 1956
Wikipedia 所載

会いし、かつご挨拶する機会があったことである、と言っても、この場合も会話したわけではなく会釈を交わしただけではある。

ファンになつたのは「ローマの休日」(日本公開、昭和五十四年・1979年四月)、彼女の初々しき、品格にすっかり魅入られた。

平成二年(1991)四月、NYのリンカーンセンター・フィルム・ソサエティがヘプバーンを讃えるイベントを催す。その時にあるご縁でスポンサー側ゲストの一人としてお招きを受けた。会場入口でスポンサー達、その奥様方と共に赤い絨毯の上で数十人でヘプバーンをお迎えした。男性たちは彼女に会釈でご挨拶し彼女も一人一人に会釈を返す。驚いたのは奥様方である。自分のスカートをつまみ、片足を少し内側に引き、腰を落とすという高貴な方へのヨーロッパ伝統の挨拶をしていた。米国人女性たちにとって、彼女は

王女様であった。

その後リンカーンセンター内のホールで二十本ほどの彼女の作品のさわりのシーンを二部に分けて上映した。映画ではジバンシーのファッションで有名になった彼女だが、幕間に壇上で友人代表としてお祝いのスピーチをしたのはラルフローレンである。女優としての功績とともに、晩年のユニセフでの活動を褒め称えた。

この催しとき彼女は六十二歳、元々やせ型であり、やや老年との感がなくはなかったが、背筋は伸び、凛とした姿はやはり美しかった。彼女はこのわずか一年九か月後にスイスで亡くなっている。

昭和の終わり

昭和六十四年(1989)一月の昭和天皇ご崩御のニュースは、NYでの通勤途中、車中のFM放送で聞く。現地時間一月八日朝のトップニュースである。数日前から天皇の容体についても逐一報道がなされていた。

米国は昭和天皇には常に高い関心を持っていたといえよう。戦争責任について占領軍最高司令官マッカーサーは、本国へ「天皇を排除

しようとするれば)占領軍を大幅に増大することが絶対必要・最小限百万の軍隊が必要となろうし・無期限に駐屯させるような事態も十分あり得る。」(半藤一利「昭和史・戦後編」)と報告する。米国は国際的議論と国内での異論もある中で昭和天皇に戦争の罪を一切問わないという決断をした。

「昭和」という元号はわが国の歴史で最も長く、戦後の驚異の経済成長を含め、わが国の歴史の中でも、異色の時代だったといえる。われわれはこういう時代に生まれ育ち、生きてきたことになるが、この先でのこの時代の評価はどうなってゆくのだろうか。

反省も込めていえば、この時代の男性たちは家庭や子供の教育は奥様任せでひたすら働いていたと言われることになるかもしれない。

(文中敬称略)

(72)

エッセイ

スズ(錫)へスト

武田 収功

はじめに

人類が経験した感染症の歴史から得た武器を以てしても、未だ解決できない新型コロナウィルスはいつ終わるとも知れない戦いを挑んでくる。侵略されていく都市。次々と斃れていく人々。ニュースを読むたびに不安と心の痛みは増していく。見えない脅威はいつ身の回りに迫るのか、少しでも知識を得て、この災厄を避けたいと願うばかりである。

疫病は有史以来幾度も人類を苦しめてきた。14世紀ヨーロッパにおけるペスト(黒死病)や20世紀のスペイン風邪、アジア風邪、香港風邪などパンデミックと言われる爆発的な感染症は多くの人命を奪ってきた。1347年から51年のペストの流行は、通説ではヨーロッパ人口の三割近く、2千万から2千5百万の人命を奪ったという

(1)。この惨劇は幾多の資料に記録され、また絵画によっても当時の悲惨な姿を想像することができ。ピーテル・ブリューゲルは絵画《死の勝利》(2)の中で、ペストによる「死の恐怖」という抽象的な概念を、炎や骸骨の兵士の侵略という具象的な表現に置き換えて、不穏で不気味な怪奇現象を寓意的に描いている。闇と真っ赤な炎に燃える侵略された都市の遠景。教会や波止場には白い布を肩から掛けた、死の象徴としての骸骨の軍隊。骸骨に抱えられぐったりとした平帽子の枢機卿。金貨を奪われてもうつろな目で茫然としている赤いマントの王。棺を持った骸骨の兵士たちに囲まれ、洞窟へ続く避難所に逃げ込もうとする人々。ここで描かれているのは富や身分や信仰さへも関係なく、死が迫っていることへの恐怖に戸惑う人々だ。炎と暗黒の闇が、骸骨の侵略から逃れられない恐怖を包み込んでいる。自身の内部から生まれた絶望ではなく、自らの意思と無関係な実体のない恐怖。ここには絶望と対峙しななければならない人間の、存在そのものが無視され、否定されている孤独の状態そのものがある。

新型コロナ禍も、恐怖と不安を人々の心の中に浸透させている。しかし、現代はペストの時代の恐怖と絶望ではなく、人々は科学の力を信じ、希望をもってこの災禍に立ち向かっている。

ここでは19世紀初頭、ロシアであったあるペストについて触れてみたい。

「冬將軍」とスズベスト

アントワーヌIIジャン・グロの《ジャファのペスト患者を訪れるナポレオン》、1799年3月11日(3)と題された絵画には、ナポレオンがシリアの港ジャファの軍病院として使われていたモスクを訪れ、フランス軍のペスト患者を見舞っている様子が描かれている。ナポレオンがペストを患った瀕死の兵士の患部へ手を伸ばしているその光景は英雄としてのナポレオンを強調しているが、このジャファ訪問後、ナポレオンは軍隊へのペスト蔓延の防止と、エジプト遠征への遅延を避けるための罹患した兵隊らに毒薬を飲ませる命令を下していた。(4)。

1812年4月、ナポレオンは約60万人(動員兵力は諸説あり)の軍隊を率いてロシアに侵攻した

(73)

(5)。その理由はフランスが「大陸封鎖令」によって、イギリスとヨーロッパ諸国との交易を禁じているのをロシアが破ったことだった。ナポレオンはこのロシア遠征で9月にはモスクワを占拠したが、ロシアは講和に応じず、ロシア軍はモスクワ市街放火などの焦土作戦をとった。ナポレオン軍は宿舎や食料など調達することができずモスクワ滞在は長引いた。さらに季節は刻一刻と冬に向かって厳しい寒さを増していった。戦況は一向に好転せず、やがてロシアの寒さはピークに達しナポレオン軍は次第に苦境に陥っていった。この寒さは今で言うシベリア気団と言われるもので、冬季にシベリア陸部に冷たい空気が蓄積されて強まる高気圧である。10月になると寒さは一層厳しくなり、寒さに慣れているロシア軍や農民がリラの攻撃に加え、飢えと寒さで兵士たちには辛い戦いになっていった。ついにナポレオンは退却を決意するがそれは12月までかかった。この間、ロシアの冬とある伝染病がナポレオンの大敗を決定的なものにした。その原因は得体の知れぬ不可解な恐怖がひき起こしたものであった。フランス軍の将校のコート

のボタンから歩兵のズボンや上着のボタンに至るまで、ボタンと言うボタンがボロボロと崩れ落ちていったのだ。兵隊たちは脱げ落ちる衣服と寒さと飢えで歩くことさえも困難になっていった。しかもボタンの崩れは伝染病のように次から次へ兵士たちの間に伝播していったのである。その間に兵士は原因の分からない恐怖と寒さと飢えで次々と死んでいった。それはまさに悪魔の所業と言われるものであった。やがて兵隊たちの間にロシア軍がボタンさえ破壊する伝染病(6)を流行らせた、という噂が広まった。飢えや寒さで死んでいった兵士のことさえ、この悪魔の伝染病のせいだと噂し始めた。兵士の士気は一気に削がれて、規律はボタンのように崩れていった。崩れ落ちたボタンをみて、生き残った兵士らはジャファで経験した恐ろしい伝染病ペストの恐怖に怯え続けた。軍隊は死と隣り合いつつ視えない恐怖の中で撤退していった。不可解な恐怖が起こしたこの戦いで、フランス軍は60万人の兵隊のうち、約6千人(諸説あり)しか祖国へ帰還できなかったという。フランス軍は約99%の兵隊を失ったのである。

この時代のフランス軍の兵士のボタンは金属の錫(スズ)で作られていた。やがて兵隊たちはスズのボタンが崩れ落ちるこの悪魔の伝染病をスズペスト(7)と呼ぶようになった。その原因は後の研究を待たなければならぬが、寒さはロシアの冬將軍によってもたらされた最強の武器であった。この戦いでスズペストに罹って死ぬと言う恐怖は、ナポレオンに毒殺されることと同じであった。兵士たちは中世のペストの時の人々のように、現実に行きつた事態が理解できなかった。理性と自らの意思とが対峙できずその精神は乖離している状態となってしまったのだ。この戦いの死の原因は飢えと寒さであり、スズのボタンが直接的な原因ではない。しかし、悪魔の伝染病を信じた兵隊たちは、恐怖の中で自らの死の理由も、またその意味さえ判らないまま死んでいった。

このスズが崩れる現象はナポレオンのロシア遠征時だけではなく、1851年ドイツのシュレジェンにあるツァイツの教会のパイプオルガン(鉛とスズの合金で、17世紀に建造)が寒さにより崩壊している(8)。また、1867

1868年のロシア大寒波の時も、セントペテルブルグの関税倉庫内に貯蔵されていた軍隊用のスズのボタンが分解して形のない粉に変わっていた(8)。

この恐怖の原因をもたらしたスズには変わった化学的性質があるという。スズは常温、常圧で安定な白色スズと言われる金属であるが、マイナス40℃近くになると大幅に体積が増え、構造的な変化が起こり灰色スズに変態(9)する。それは金属スズの結晶格子が崩れ粉状になることだ。この現象が「スズペスト」と呼ばれるものである。ナポレオン軍の兵士のスズのボタンは冬將軍によってこの現象が起きた。後のツァイツの教会のパイプオルガンやモスクワの関税倉庫に保管されていた崩れたボタンも同様にスズペストであった。このナポレオンのスズペストの話は事実かどうかかわらない。が今も語り継がれている。何故なら兵隊たちの、寒さと恐怖の体験こそペストそのものであったからだ。

《ジャファのペスト患者を訪れるナポレオン》、1799年3月11日《の絵にあるように、ペストの恐怖がスズペストと重なって兵士の伝染病

に対する恐怖の心理を増幅させていたことには違いない。背景には、ペストによる伝染病の恐怖が兵隊たちに刷り込まれていて、死に対する不安な気持ち、自ら生きること、意義を見出すことができないう絶望的な状況と限界に陥っていったのかもしれない。

18世紀スウェーデンのカール12世とロシアのピョートル1世との戦いにおいても、冬將軍によりカール12世のロシア遠征は失敗に終わっている(10)。その後、シベリア気団のもたらす寒さは、ドイツのヒットラーのソ連侵攻(1941〜45年)も撃退した(11)。ヒットラーの時代にはすでにスズペストの正体は知られていた。科学は、ペスト(ペスト菌)もスズペストもその原因を明らかにしたのだ。以後、兵隊のボタンは真鍮などの金属、そして昔使っていたように動物の骨、貝殻、木、ナッツの殻などを使うようになった。

鼠によるペストも、冬將軍によるスズペストも、疫病と戦争が希望を失った人々の心の中に恐怖を植え付けた。理念のもとに始まった戦争という現実と、スズペストの恐

怖という実体のない非現実的な狭間で生まれる不安の対立こそ絶望を生むものだろう。死が迫っていても、何が起きているか判らない、なぜ死ななければならぬのか、理性で理解できない恐怖と不安が人間の思考を超えた時、混乱と絶望の中で人はどうやってそれに立ち向かうのだろうか。現代の科学をもつても明らかにできない未知の恐怖はこれからも起きるかもしれない。

死に慣れ、生きることに何の意義も見いだせない絶望的状况であったも人間は生きていかねばならぬ。二人の子供を失ったゴーギャンが、タヒチ島から彼の妻に書き送った手紙に「希望する、それは殆ど生きることだ」という文句がある。彼は悲しみの中でも夢を持ち、希望を持ち続けた(12)。歴史の中で、幾度となく繰り返す疫病や戦争などがあっても、人は希望を持ち生きる意味を見出してきたことこそ価値がある。

人間は考え、工夫し、行動してきたのだ。原因のわからない病も不可解な死も、科学によってその原因が明らかになれば必ず未来は開けてくる。

私たちは科学を信じ、「希望」を持ち、新型コロナ禍も生き抜いていける。

参考資料

- 1) 山本義孝『十六世紀文化革命』みすず書房(2007)。
- 2) ピーテル・ブリュッセル、『死の勝利』1562年頃／油 彩／板／117×162cm／プラド美術館蔵。
- 3) アントワーヌ＝ジャン・グロ、『ジャファのペスト患者を訪れるナポレオン』1799年3月11日』1804年／油彩／画布／523×715cm／ルーブル美術館蔵。
- 4) <http://www.salvastyle.com/menu/romantic/gros.html>
- 5) <https://ja.wikipedia.org/wiki/1812年ロシア戦役>。
- 6) この時代、微生物の存在は知られていたが、伝染病の原因が細菌(病原性微生物)やウイルスによって伝染することは知られていなかった。
- 7) 化学徒の備忘録 <https://www.syero-chem.com/sズペスト動画> <https://www.youtube.com/watch?v=Q9zdtOB0Y>

www.youtube.com/watch?v=Q9zdtOB0Y

- 8) 奇妙な金属スズ。 <http://kyntskz.ny.coocan.jp/S/cemicak/chemi8.htm>
- 9) 荒川泰昭『ミネラルの科学と最新応用技術』第4章「スズ」第5編 特殊ミネラルの機能 シーエムシー出版(2008)。
- 10) [https://ja.wikipedia.org/wiki/カール12世_\(スウェーデン王\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/カール12世_(スウェーデン王))。
- 11) <https://ja.wikipedia.org/wiki/モスクワの戦い>。
- 12) 福永武彦『ゴーギャンの世界』新潮社(1961)。



鎌倉・長谷にて

鈴木美恵子

十一月の声を聞くと、そわそわしてくる。そろそろいつもの場所へ行く季節になってきたなあ、と思いを巡らす。

なんとか無事に一年を過ごせたことへの感謝の気持ちと、ざわついた心を鎮めるために、一年に一度長谷寺で写経をさせていただいている。

私の初めての写経体験は家の近所であった。尼僧さんが写経教室を開いているので一度参加してみたいか、と知人に誘われたのだ。生徒さんたちは静かに筆を動かしている。見様見真似で私も書いてみた。漢字だけが並ぶ紙面は美しく、神聖な感じがする。文面の意味は全く理解出来ないけれど、筆の感触が気持ちよく、スラスラと四十分ほどで終了。ところが顔を上げると誰も終わっていない。随分ゆっくり書いているものだ、と

一人時間を持って余していた。先生は、という助言があるわけでもなく、ただ私を見ては目を細めて微笑んでいるだけだった。やがて皆が書き終え、お茶を飲みながら和やかに終了した。私の書き方に對して、誰からも意見はなかった。だが翌週、先生の口から初めてアドバイスがあった。文字にはそれぞれ意味があり、ひとつひとつの点の向き、線と線との間隔や長さにも違いがある。急ぐ必要はないので、それらに注意しながら丁寧に書いてください、と。意気揚々と書いていた初心者を、寛容な心で見守ってくれた仲間の優しさを私は感じた。その日から時間の経つのも忘れ、終了まで二時間近く要するようになつていった。文字の意味が少し分かるようになったのは、その時の教えのお陰である。

ところで鎌倉に写経場は何か所もあるが、私のような気まぐれものには、駅から近く予約なしで参加できる会場は非常に有難い。長谷寺では平日の参加者が各自お経をあげることはしていないので、いつでも自由に参加できる。道具も全て揃っているので身軽である。入山後、書院で受付を済ませる

と、私は身に着けている光物（イヤリング、ネックレス等）を外すことにしている。勿論鈴のような音の出るものは着けていけない。この時点で既に、心は阿弥陀様に向き合っている。

会場に入るともうそこは別世界である。柔らかい自然光に包まれ、余計な雑音は一切聞こえない。好みの場所に着席し、静かに深呼吸をする。用意された用紙に般若心経を一文一文字丁寧になぞっていく。初心者はただそれだけで良い。やがて全て書き終えらると、とうに一時間半は経過している。ざわついていた心はいつしか落ち着き、充足感さえ覚える。これを「心を



調える」と言うのだろうか。毎年この場所へ来られたことに安堵し、感謝の気持ちに変わっていく。

写経の歴史は古く、中国から伝わったようだ。日本では六七三年（飛鳥時代）天武天皇の時代に行

われたと聞いている。平安時代には平清盛が、一族繁栄を願い、厳島神社に奉納したものがあつた。

鎌倉長谷寺は正式には「海光山慈照院長谷寺」と号し、奈良時代七三六年（天平八年）に開創したと伝承されている。本尊は十一面観世音菩薩とし、十メートル近い高さの日本最大級の木彫の観音様である。本尊を目の当たりになると、ただただ圧倒され、観音様の威光を全身に感じる。広い境内には、源頼朝が建立したと伝えられている阿弥陀如来座像が祀られている。他にも大黒天、弁財天、弁天窟など、ここは礼拝する所が多いお寺である。また、坂東三十三ヶ所観音霊場の第四番に数えられており、納経所で御朱印を拝受する人は絶えない。関心のある方は、一度訪れてみると良いだろう。

(76)

さて、この長谷寺から歩いて五分もかからずに由比ヶ浜海岸に出られる。相模湾に面した湘南海岸の一つとして有名な砂浜である。海岸に沿って国道一三四号線が走っている。国道を西へ向かえば江の島が見えてくる。更に進むと、

烏帽子岩やザンオールスターズで有名な茅ヶ崎に出る。相模湾沿いに更に進んだ先には、戦後の内閣総理大臣、故吉田茂が暮らしていた邸宅のある大磯へと続く。

一三四号を東へ進むと鎌倉材木座、更に進むと逗子から葉山へと出る。ここも葉山御用邸のある所として有名である。近くには大スター故石原裕次郎の記念碑がある。

ある年の暮れ、友人と二人で参加した写経体験の後、由比ヶ浜から材木座海岸まで歩こう、という事になった。緩やかに湾曲した砂浜の彼方には、散策している人達の姿が小さく見える。これ位なら十分歩けると思った。ところが、その日私は左足親指を痛めている事を思い出した。軽い散歩なら大丈夫だが長距離はきつい。経験者なら分かって頂けると思うが、砂地は非常に足に負担がかかる。踏ん張りがきかないのだ。だが日頃から口数の少ない友人の明るい表情を垣間見してしまうと、歩けない、とは言えなかった。遅れ気味になりながらも、時々交わす会話が楽しい。材木座海岸まではおよそ一

キロ、十五分から二十分程の距離であるが、この時ばかりは遠く感じた。

犬の散歩をしている人、散策を楽しむ親子、若いカップルもチラホラ。昔はピンク色のさくら貝が沢山打ち上げられていたと言う由比ヶ浜。今でも見つけられるだろうか、と私は下ばかり見て歩いていた。夕暮れが近づきふと顔を上げると、そこには相模湾に吸い込まれていきそうな大きな太陽が、オレンジ色に揺れていた。それは太陽の道となり浜辺に向つてくる。茜色に染まった空はやがて刻々と変化し、その光景は実に美しい。彼女の横顔が夕陽の中に淡く染まっていた。滑川を渡ると材木座海岸になるのだが、私達は国道脇のベンチで一休みすることにした。滑川交差点脇の一角に、まだ新しい珍しい形の石碑が目付いた。「さくら貝の歌」と書かれている。

美わしき さくら貝ひとつ
去りゆける きみに捧げん

この貝は 去年の浜辺に
われひとり ひろいし貝よ



ほのぼのとうす紅染むるは
わが燃ゆる さみし血潮よ
はろばると 通う香りは
きみ恋うる 胸のさぎなみ
ああなれど わが思いは
はかなく
うつし世の 渚に果てぬ

これは作曲家八洲秀章氏が、由比ヶ浜に住んでいた頃に作ったものである。初恋の女性の死を偲び、浜辺のさくら貝に思いを託して短歌を詠んだ。それを基にして友人の土屋花情氏が歌詞を完成させ、

一九四三年（昭和十八年）八洲氏が曲をつけて出来上がったものである。やがてこの歌が山田耕柞の目にとまり編曲され、一九四九年（昭和二十四年）ラジオで放送され話題となった。澄んだ声の女性歌手が、情感を込めて歌っているのを耳にした事がある。胸に染み入る美しい歌詞に惹かれて、私も歌っていた。

歌碑は一九九一年（平成三年）十一月十三日、逗子海岸近くの公園に建立された。しかし鎌倉にさくら貝の景色を取り戻したい、という強い思いから、八洲氏没後二十五年を記念して二〇一二年（平成二十四年）十二月十六日、歌碑建設実行委員会によって由比ヶ浜にも新たに建立された。趣旨は、環境保全とさくら貝の復活を念じて、と書かれている。

既に辺りはうす暗い。夕闇につつまれた若宮大路には、ネオンの灯りが灯り始めた。鎌倉駅まではおよそ一キロ。私達は暗くなった道を再び歩き出した。過ぎた時を惜しむように。

(完)

(77)

田道間守伝説

森 彩子

奈良の大和西大寺から南下して薬師寺や唐招提寺のある西ノ京に向かつて歩いていくと、近鉄橿原線の尼ヶ辻がある。その線路の右手に濠に囲まれた小さな古墳が見える。それは、第十一代垂仁天皇陵に比定されている宝來山古墳（前方後円墳）である。その墳丘の東南側の周濠の中に松の生えた小さな島がある。墳丘のそばにひっそりと控えているように見えるその島（陪濠）は伝説上の「田道間守の墓」である。

遠い昔、私は父から田道間守の話聞いたことがあった。「田道間守は、垂仁天皇の命を受けて不老不死の秘薬（霊果）を求めて海を渡った。常世の国の非時香果を十年の歳月を要してやっと手に入れ持ち帰るが、時すでに遅し、天皇はもうこの世におられない

かった。田道間守は天皇の死を嘆き悲しみ、御陵の前で自ら命を絶った」

垂仁天皇陵（前方後円墳）と田道間守の墓（円墳）（筆者撮影）



その哀しい物語は深く心に残った。そして、その話の終わりに、父は文部省唱歌の「田道間守」を歌ったのである。その調べは田道間守の哀しく切ない死を劇的に彩り、幼かった私も涙したものであった。

その歌詞は次のようなものだった。

田道間守

（文部省唱歌 歌詞作曲者不詳）

一、 かおりも 高い たち ばなを積 だお船が いま帰る 君の仰せを かしこみて 万里の海を まっしぐら いま帰る 田道間守 田道間守 二、 おわさぬ 君の みさ さぎに 泣いて帰ら

ぬ まごころよ 遠い国から 積んできた 花たちはなの 香とともに 名はかおる 田道間守

長じて、奈良散策中に垂仁天皇陵の濠の中に小さな島を見つけた時、田道間守の歌が耳に聞こえた。その調べは重層低音のように流れていた。

明日香村の橘寺に田道間守の木彫像が祀られていることを知った私が、早速訪ねて行ったのは言うまでもない。本尊（聖徳太子像）から少し離れて立つそのお像は、像高二尺ほどで、思い描いていた通りの実直な好ましい風貌を持っていた。そして、その両手には青々とした一枝が捧げ持たれていた。田道間守が持ち帰ったという橘の一枝なのだろうか。

因みに、橘寺の寺名の由来は、この田道間守が持ち帰った非時香果の実を寺域に蒔くと、やがて芽を出したのが橘（ミカンの原種）だったことによる、とされる。また、田道間守は橘とともに黒砂糖も持ち帰り、薬として用いられたので、後に蜜柑、薬、菓子（の祖神として

祀られるようになったという。田道間守を祀る神社には、故郷（但馬）現在の豊岡市の中嶋神社や大宰府天満宮、京都の吉田神社、日光二荒山神社などがある。

矛四矛を以ち、天皇の御陵の戸に献り置きて、其の木の実をさきげ、叫び哭きて白きく、「常世国のごときじくのかくの木の実を持ち参上りて侍り」とまおす。遂に叫び哭き死ぬ。其のときじくのかくの木の実は、是れ今の橘ぞ」

田道間守伝説は、言うまでもなく『古事記』『日本書紀』によるものだが、記紀の中ではどのようなように記されているのだろうか。

田道間守は『日本書紀』巻第六の垂仁天皇条に登場する人物であり、朝鮮半島の新羅国から渡来してきた天日槍の後裔の子であり、三宅連の祖とされている。一方、『古事記』中つ巻・垂仁天皇段では、名前を多遲摩毛理と表記している。少し長いですが、古事記の条の読み下し文を以下に記す。

「また天皇、三宅連等が祖、名は多遲摩毛理を以ち、常世国に遣はして、ときじくのかくの木の実を求めしめたまふ。故多遲摩毛理、遂に其の国に到り、其の木の実を採りて、縷八縷・矛八矛を、将ち来つる間に、天皇既に崩りましぬ。爾して多遲摩毛理、縷四縷・矛四矛を分け、太后に献り、縷四縷・

『日本書紀』では、この時、田道間守が嘆き悲しんで奏上した言葉が加えられている。本来ならば、『記紀』双方の読み下し文を比較すべきだが、ここでは『日本書紀』に追加された部分の現代語訳（宇治谷孟訳）を記すに留める。

「命をうけたまわって遠く遙かな国に行き、万里の浪を越えて帰ってきました。この常世国は、神仙の秘密の国で、俗人の行けるところではありません。そのため行ってくるのに十年も経ちました。本土に再び戻れるとは思ひもかけなかったことです。しかし聖帝の神霊の加護により、やつと帰ることが出来ました。今、天皇はすでに亡く、復命することも出来ません。手前は生きていても何のためになりましょうか」と。

そして田道間守は天皇の陵におまいりし、嘆き叫んで死んだ。群

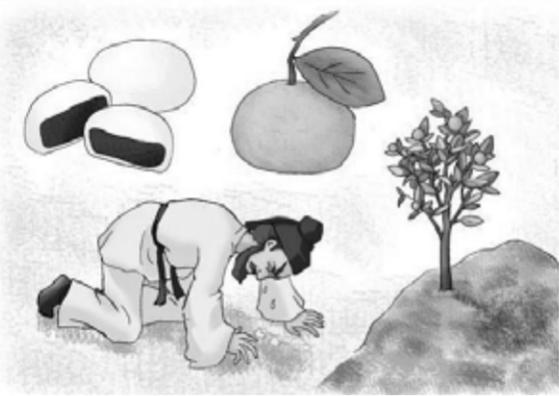
臣はこれ聞いて皆、泣いたと言う。

この説話のように、果物や薬草を求めて異界に行く話は、世界各地に伝わっている。垂仁天皇と田道間守の伝説は、神仙思想、例えば、秦の徐福が蓬萊に不老不死の薬を求めると、不老不死の中国の蓬萊伝説と関係があると言われている。

『古事記』『日本書紀』では、田道間守の墓に関する記載はない。しかし、『日本書紀』の注釈書である『釈日本紀』では、第十二代景行天皇が田道間守の忠を悼んで、垂仁天皇陵近くに葬ったとしている。垂仁天皇陵の小島の考古学的調査は行われていないが、田道間守の薬祖神としての信仰によって、現在小島の対岸に拝所も設けられている。田道間守は哀切に満ちた伝説の中で今も生き続けているのである。

（田道間守の歌は、ユーチューブで聴くことが出来ます）

（以上）



（わかやま観光情報HPより）



「吾妻鏡」の中の
台風について

西沢 昭

歴史書を見ると、鎌倉時代は天災や飢饉が多かったという記事をよく目にします。本当にそうだったのか、吾妻鏡の内容をもとに、当時の気象関係を見直してみます。第一回目は「歴研よこはま第七十九号」に発表しており、今回はそれに続く内容となっています。吾妻鏡の内容は、書きはじめを例えば「廿日丁卯。晴。御所御鞆也。」と、天気から書いている項があります。今回はこの天気の内容から台風に関連する部分を抜き取り、当時の台風災害について考えてみます。

先の投稿で、引用文献(2)による鍾乳石分析からの気温推定と、吾妻鏡に記載されている鎌倉の冬の積雪は一致しており、気候は現在より平均気温が二〜三℃低かったと分析できました。前掲の通り、この気候は現在の仙台地方

と同じ気候となります。

今回は、当時の気候と台風との関係を見てみます。台風は上陸地域の南方の海水温が影響します。台風は海水温が二七℃以上の海域で発達します。現在の関東地方南方の海では夏の海水温は二七℃以上になっており、台風は発達する条件となっています。当時の気候は現在より二〜三℃低かったため、当時の海水温を推測してみます。

気象庁のホームページからは日本近海の海水温を見ることが出来ます。平均気温が現在より低い鎌倉時代を考えると、夏の海水温は二四〜二五℃くらいと見積もることが出来ます。この海水温ですと、台風は太平洋上で衰弱してまいります。

今年(2020年)の台風十号では、台風が巨大化しそうだということ、接近する前から気象庁は特別警戒警報を発して、注意を呼びかけましたが、その前の台風九号によって進路上の海水がかき混ぜられて、海水温が低下し、台風は発達ができなく、巨大化しなかったということがおきています。つまりこの海水温の二〜三℃差というのはとても重要で、当時の鎌倉で

は、大きな台風がやってくる頻度が少ないことになります。

またこのように夏の海水温が低いということは、現在銚子沖まで南下している寒流の親潮は、鎌倉時代には房総半島南端より南にまで南下していたと想像できます。このことは、台風より重要な、夏の低温ヤマセが関東南部にまで多く発生していたこととなります。以上のように吾妻鏡の積雪の記事より、関東地方の気候は現在と異なっていたと考えることができました。つまり、鎌倉時代の夏の気候は涼しく、ヤマセが起きやすく一方では台風の襲来が少ないということになります。ではどのくらい台風がやってきていたのでしょうか。吾妻鏡の記述から分類してみました。

台風と決定した、吾妻鏡の記述条件について述べます。

台風の発生時期である新暦で八月〜十一月頃の記事であること。

台風は南から近づくので、海上での被害の記述があること。

長い時間の強風が記述されていること。特に南風が多いので、その記述があること。

台風は長距離移動しますので、鎌倉以外での記述があること。

や、鍾乳石による科学的分析結果とも一致していることが分かります。つまり、鎌倉時代の鎌倉は、やはり現在の仙台地方のような気候であったようです。太平洋上では、親潮の南下も考えられますので、当然ヤマセによる夏の冷害被害は増大します。しかし、当時は冷涼気候で日常的にヤマセがあったと考えると、これが当時の常識的な気候であったはずで、「天変地異や飢饉が多い」というのは「現在の生活技術から見ると」と条件をつけることが良いようです。

前九年の役が書かれた陸奥話記において、岩手県南部を攻めるとき関東から食料を運んだ記述があります。蝦夷が関東から運搬された食糧を略奪し困っていることが記述されています。つまり、この頃の東北地方では潤沢に食料を集めることができなことが常識だったかったのかも知れません。

ここまでで言えることは、吾妻鏡が書かれた場所、鎌倉時代の関東南部は、台風の接近上陸が少なく冷涼な気候であったということが出来ます。

歴史問題を新しい切り口で調べ直すことで、その時代の様子を立

前記四項目を重視し、代表的な台風記述を次に示します。

一、建仁元年八月十一日(1201年9月16日)甚雨大風。午の刻大風、船打ちつけられ、下総葛西で高波。

(解説) これは新暦9月であり、海上での被害の併記があるので、明らかに台風です。また、この日の記録が他の文献にもあり、三長記の「大雨甚雨」や伊勢類聚大補佐「大風洪水」です。

二、建長八年八月六日(1256年9月3日)甚雨大風洪水、山崩れ死者多数

(解説) この記述も、九月であり大風と大雨。洪水と山崩れなので、一時間二〇ミリ以上のまとまった雨が数時間降り続いたものと思われる。同時期の他の文献は見つけられませんでした。

三、弘長三年八月十四日(1263年9月24日)曇のち雨。南風烈しい、暴風雨。家屋損壊。海岸には船破損漂着。

(解説) この記述も南風と海上の荒れが記述されていますので、台風でしょう。同時期の他の文献は見つけられませんでした。

このようにして九個の台風を確認

しました。

次に台風がやってきたときの地域に及ぼす被害について、当時の絵巻物から推測をしてみます。絵巻物には文章には書かれない庶民の建物の様子や川の様子などが著されています。一遍上人聖絵などを見ますと当時の庶民は掘立柱に板を乗せ、石で押さえた家に住んでいます。この構造では風速十五m/Sの風で飛んでしまいそうです。武士の家は立派な木造建築ですので風速二十五m/S位までは大丈夫そうです。武士の家のレベルと、戦後の家のレベルは同程度と見積もられます。防災科学研究所の資料によると、現在の家が暴風に強くなったのは伊勢湾台風以降の法律や技術の進歩によるところが大きく、それ以前より百倍ほど強くなっているようです。ですから当時の家は現在より風雨に弱く、少しの風雨で大きな被害が出たと考えられます。

次に河川などを考えます。鎌倉時代の河川は現在のような堤防というものはなく、おまけに鎌倉の尾根筋は国立民族博物館の説明図にあるように、全面はげ山であったようです。これでは少しの雨で

がけ崩れや河川の洪水となります。堤防がなく、周囲の山がはげ山であったことで、一時間当たり二十ミリの雨が降ると、洪水や土砂崩れが起きたと思われます。風速十五m/S、雨量二十ミリ/時間で被害が発生したことでしょう。現在と比べて小さな台風でも大きな被害が出たと考えられます。

吾妻鏡でののはっきりした台風表記は、天気の記述がある西暦一二〇〇年からの六十二年間で九個となりました。気象庁などの統計を調べてみますと、終戦からの十五年間で鎌倉に影響を与えた台風の数は一八個です。現在の方が鎌倉に影響を与えた台風が四倍ほど多いこととなります。これは当時の気候が現在より冷涼であったこととの裏付けとなります。

台風に加え、春と秋には低気圧の通過での風と大雨。まだ梅雨末期や秋の初めの長雨と、現在では災害が考えられない規模の雨であっても鎌倉時代では甚大な被害が起きることが想像できます。

このようにして吾妻鏡の記載内容を科学的に分析し直すと、冷涼な気候であった時代を裏付ける結果となり、先に投稿した冬の結果

体的に知ることができ、わたしの老後の楽しみとなっております。

今回は気象という切り口で見ましたが、私は製造会社に勤めておりましたので、品質管理などの教育を受けてきました。農産物の収量や年貢量などの変化を品質管理の偏差値や確率統計の手法を用いて調べ直してみると、新しい知見が得られるかも知れません。歴史を文学部的に眺めることから理学、工学部的に眺めることは、我々のような第二の人生を生きる人たちに与えられた研究分野だと勝手に思っております。

以上

(81)

主な参考文献

- (1) 現代語訳「吾妻鏡」五味文彦ら編吉川弘文館(2015)
- (2) 田家康「気候で読み解く日本の歴史」日本経済新聞社(2013)
- (3) 防災科学研究所研究報告第75号14頁(2009)

中国漢水歴史の旅 漢中から武漢へ

長田 格

漢水は長江の最大の支流で、長さ千五百kmに及ぶ大河である。西安の南、漢中付近を水源とし、中国のほぼ中央部を北西から南東へ流れ、武漢において長江に合流する。古来、勢力がぶつかりあう接点となり、また、北と南を繋ぐ物流・交通の中心を担ってきた。このため、流域には、漢中（劉邦等）、襄陽（劉備、諸葛孔明、関羽等）など歴史の舞台となってきた街が多く、世界遺産も、張騫墓、武当山、明頭陵と3つある。ただ、中国の中で奥深く不便なこともあり、情報は少なく、日本人が訪れることも多くない。

筆者は、漢水沿いの各名所旧跡とそこで詠まれた詩等の調査をし、昨年十一月に9日間の旅をした。帰国後、旅の様子や写真を追加して、十二月に電子出版した。本稿ではその一部を、北から順に紹介

する。なお、この旅の二か月後、大変な騒ぎとなった。この旅が一月遅かったら、どうなっていたかと怖くなるが、全くの偶然、幸いであった。

(1) 漢中

西安の南西約二百五十km。西安始発、漢中止まりの各駅停車の新幹線でのんびり、約1時間半かかる。西安を出て山中へ入ると、すぐにトンネルで、延々とその中を走る。約三十分でトンネルを抜けると、平野の中に出たかのよう、米を作っている田が目立つ。

漢中は中心部が標高600mほどで、山に囲まれた盆地である。晴れてくると、四方遠くに山が見え、西北の「小さな江南」とも呼ばれ、豊かな水が特徴の街である。

初めて中国を統一した秦が崩壊し、項羽と劉邦により統一されかけた頃、劉邦はいったん項羽の軍門に下り、紀元前二〇六年、漢王としてこの地に封じられる。そしてここを足掛かりにし、項羽を下し「漢」を建国する。国名の「漢」は、この地の名称から来ている。漢族、漢語等、多くの中国全体を現す言

葉があるが、これらは皆、この地の名称から来ている。

劉邦が根拠地として宮殿を造営した跡が「古漢台」で、街の中心部にある。面積は八千m²とこじんまりしている。三段階の台地で、一番高い所に「漢台」の標石がある。一番下には、漢中市博物館があり、



後述の褒斜棧道関連の遺物を中心に収めている。もうさすがに、「帝王の気」を感じることはできないが、静かで落ち着いた場所である。少し時代が下って後漢末に国が乱れると、ここで北東の曹操と、南西の劉備が向き合う形になり、争奪戦が繰り広げられる。この争いの舞台が、漢中の西の陽平関や定軍山である。結局、ここでは劉備



(82)

第五次北伐で使われたのが褒斜棧道。この道は、漢中からまっすぐ北へ、五丈原、すなわち諸葛亮の最後の地へ伸びる道であり、漢水の支流、褒水に沿って行く。褒水の兩岸は険しい崖で、河は浅い。このため船で行くことも、沿岸を歩くこともできず、崖に杭を打ち、杭の上に木を載せて木道とし、その上を行く。現在、公開されてい

る部分は、約2km。むろん、木ではなくコンクリートで作られたものであるが、構造的には昔と同じで、下には何も無いという恐ろしさを味わうことができる。

諸葛亮は二三四四年、五丈原の陣中で没するが、遺言により、北への守りとして、定軍山の麓に葬られる。中国各地に諸葛亮の祠はたくさんあるが、「墓」は当然ながら、一つ、ここだけである。街から外れた場所にあることもあり、本来大観光地なってもおかしくないのだが、参拝者は少なく、落ち着いた雰囲気である。

漢中の東には、張騫墓がある。シルクロード関連の世界遺産の構成要素の一つとなっている。張騫は、この地の出身者である。漢の時代、紀元前一三九年頃、武帝の命で百人余りの使節団を率いて西域に旅立った。目的は匈奴を牽制、挟撃するため、匈奴の向こう側にいる大月氏と同盟を結ぶことであった。しかし、長安（漢の都、現西安）出発直後に匈奴に捕らえられ、十年余り拘留された。その後脱出に成功、なんとか大月氏の元にたどりつくが、同盟を断られる。帰路も苦難の末、前一二六年、帰りに

く。任務は失敗したものの、張騫がもたらした情報は貴重で、結果的に漢の本格的な西域進出の足掛かりとなった。このことから、シルクロードを切り開いた人物である」とされる。

世界遺産とはいえず、シルクロードの他の遺産とは離れた位置、しかも漢中の町はずれにあり、中国人観光客さえほとんど訪れない。業績を淡々と記した記念館もあり、静かに楽しむことができる。

(2) 十堰・武当山

武当山は湖北省の一番北の十堰市にある。漢中から武当山まで南東へ約五百km。新幹線は通っておらず、山の中の道を、何度も漢水を横切りながら、延々とバスで行く。ただし、高速道路が整備されているので、それほど苦痛ではない。張騫墓を昼前に出発し、夕方には武当山の麓に着く。

武当山は周囲約四百km、72の峰からなる広大な山群で、主峰は標高1612mの天柱峰、頂上まで登れる。漢代以来の道教の聖地であり、拡張、焼失、再建が繰り返されてきたが、明の永楽帝（在位一四〇二〜二四年）が大々的に

復興させ、現在に残る大規模な道教寺院群が完成した。「武当山古建築群」として世界遺産に登録されている。また中国武術、武当拳の発祥地でもあり、映画『グリーン・デスティニー』の舞台でもある。

永楽帝は、自身の甥である第二代建文帝を武力で倒し政権を奪った。これを正当化するため、道教をもともと篤く信仰していたことから、道教の聖地である武当山の真武帝による加護があるのだとした。このため、三十万人も投入して武当山の大大な改築を行い、一四二一年頃に完成した。材料は当時の首都応天府（現南京）から長江、漢水を遡って運ばれたという。なお同時に、自身の出身地である北京へ、北の守りを固める意味もあり遷都を行った。

麓の街から標高800mの地点までバスで行き、そこからロープウェイで1450m地点まで一気に登る。ここから階段で約五百段を登り、頂上へ着く。頂上に建っているのが一四一六年に建築された金殿。屋根などが金箔で塗られている。中には真武帝が祀られ、神灯が燃やされていて、現在までの六百年間、一度も消えていない。嚴重



(83)

に雨・風を通さない構造であることとを示している。この頂上からの眺めが素晴らしい。下の街で、今日は曇りで登っても景色は期待できないかと思ってしまうが関係ない。雲の上に出るのだから、かえってそういう日の方が素晴らしい景色に巡り合える。

(3) 襄陽

武当山から襄陽まで南東へ約百五十km。襄陽は位置的に中国の中心ともいえる場所であり、各勢力が頻繁に

が勝ち、劉備の死後、諸葛孔明がこの地を本拠地にして、北の魏を倒そうと北伐を繰り返す。

漢中から北・東へ向かう道はいくつかあり、諸葛亮は遠征ごとに異なる方法で向かうのだが、最後の



取り合う係争地となった。たとえば、二一九年、ここは魏が治め、蜀の関羽が攻めた地である。長雨と呉からの挟撃によって、関羽は撤退。その後、この南の麦城で打ち取られた。

漢水が北西から流れ、この地で南へ急激に曲がる。ほぼ三方が漢水に囲まれるところに城壁が築かれている。創建は紀元前二〇一年で、その後何度も破壊と再建が繰り返されている。今残っているものは、明代の再建で、周囲約7km、高さは約10m、幅は1m少しある。写真は城壁の上から望む漢水である。

る。
この襄陽には多くの旧跡があるが、なかでも日本人にとって馴染み深いのが古隆中。諸葛孔明が十七歳の時、戦乱を避け、山東省の方から移り住み、十年ほど晴耕雨読の生活を送った。臥龍と噂された孔明に対し、二〇七年、劉備が三顧の礼をもって、軍師を迎えた。緑の濃い低い丘の中に数軒の名残の建物がある。当時の風景と同じかどうかは不明だが、昔の光景をイメージしてしまう。建物の前では、三顧の礼を寸劇で演じている。これはちょっと余計だ。

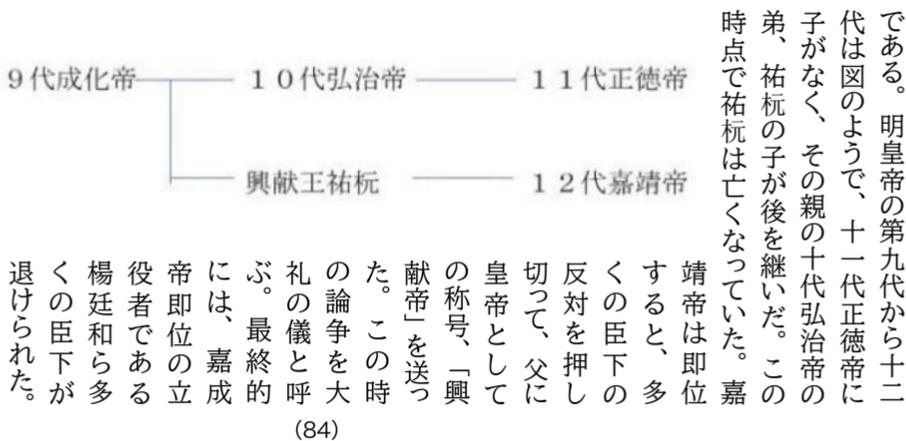


もう一か所、襄陽で忘れてはならない場所が鹿門山。古城の南東20km、漢水の東にある。唐の詩人、孟浩然（六八九〜七四〇年）が若い頃から隠棲した場所である。多くの詩がここで詠まれたが、代表的なものに「春眠曉を覚えず、処々啼鳥を聞く。夜来風雨の声、花落ちるを知る多少」がある。のんびりした情景を詠った詩というイメージが強いが、孟浩然是、出仕がかなわず、ずっと浪人人生を送った。役人になっていれば、朝早く起きて仕事をする必要があり、朝寝などはありえない。半分はその悲しみを込めている詩である。

(4) 鐘祥・明顕陵

襄陽から明顕陵のある鐘祥市まで南に約百五十km。明顕陵は、明十二代嘉成帝（在位一五二一〜一五六）の父、興献王朱祐杭と母、章聖皇太后の陵墓である。

一五一九年に造営を開始、現在の形になったのは一五六六年である。面積183万㎡、周囲約4kmと壮大で、明の陵墓群の中で最大である。明・清の陵墓は皆大きく、すべて世界遺産に登録されているが、ここ以外はすべて皇帝の陵墓



た場所だからである。

長い参道を通ったその先、写真の奥の小山が墓である。ここはその成り立ちから、この小山が二つ縦につながった特殊な形となっている。前者が、興献王が死亡した時、後者が、天子の称号が送られた時に作られた。



共に直径百mを超す山で、親孝行を示す形として有名である。ただ、政治には無関心だったと言われ、皇帝としての評価は高くない。

(5) 武漢

鐘祥から武漢まで東へ約三百km。湖北省の省都で、人口一千万人を超える大都会である。

この中心で、漢水が長江へ流れ込む。二つの巨大河川が交わるため、昔から三つの街に分かれて来た。長江の東が武昌、漢水の北が漢口、南が漢陽である。これらが合併して武漢となった。穏やかに流れているように見えて、実はかなり急のようで、ダムの影響により、逆流が起こることもあるという。



合流点の写真は、漢陽側から撮ったもので、奥が南京方向、右側手前が重慶方向、左側が襄陽方向である。

殷の時代に城が築かれたが、歴史

の表舞台に登場するのは、二二三年、呉の孫権が、呉のほぼ最前線といえるこの地に、黄鶴楼を見張り台として建てた時といえる。その後、黄鶴楼は、何度も建て替えられたが、唐代には、中国でも屈指の名勝地となり、多くの詩人が、ここを詠んだ。今も最新の黄鶴楼が、武漢のシンボルとして多くの観光客を集めている。

なお孫権は、二二一年に現在の武漢の東隣の市である鄂州に本拠を置き、「武を以って国を治め、昌（さかえ）る」の意を込め「武昌」と名付けた。この名が、ある時点で現在の武漢に移動した。

時代は大幅に下って、一八五八年、天津条約（清と英米露仏が締結）によって、十の港が開かれた。その一つが漢口であり、租界が長江沿いにできた。漢水河口に近い方から、イギリス、ロシア、フランス、ドイツ、日本租界であった。漢口へ進出した順である。古い建物が多く保存され、観光資源となっている。一九二一年に建てられた横浜正金銀行のビルを示す。高さ二十一mの壮麗な建物である。目抜き通りに建っており目立つ。

筆者にとって武漢と言えば、『フ



レディ、もしくは「三教街」。さだまさしの名曲で、自分の母親の実体験を歌った。一九四四年十二月、アメリカ軍による漢口大空襲、日本女性とドイツ人男性のペアを描く。この時期の中国と言え、日本は攻めている立場かと思ってしまうが、そうとは限らない。三教街は名前を変え、横浜正金銀行ビルのすぐ北に残っている。街路樹に覆われた雰囲気の良い路である。

以上、名所の一部を紹介した。詩や旅の様子、食事・酒の紹介等は省略した。興味を持たれた方は、amazonで、表題の文書を探して読んでいただければ幸いです。

(以上)

例会発表の概要 (2020年4月～9月)

★令和2年9月6日(日) 例会が開催された。会場は横浜市開港記念会館講堂。発表は木村会長と西野博道氏(茨城大学講師)の両方であった。2月に開催されたから、新型コロナウイルス流行のため、中断されていた例会が定員481名(240名以下に制限中)の講堂で感染および熱中症予防対策を施して実施された。



「コロナ禍、台風10号の接近、猛暑といずれも心配な状況ではあったが、参加者91名と以前に劣ら

ぬ活力ある再開であった。横浜のシンボル、横浜市開港記念会館(通称ジャックの塔)の講堂を贅沢に使っての横歴史例会が遂に復活した。

▼木村 高久氏 演題『乙巳(いつし)の変と大化の改新の真相』

現存する日本最古の正史である『日本書紀』が元正天皇に奏上されてから今年で1300年になる。この記念すべき節目の年に因み、『日本書紀』の論点の一つである「乙巳の変と大化の改新」について真相を究明しようとした。そして『日本書紀』と『古事記』の差異についても示された。

乙巳の変と大化の改新は唐が台頭し始めるころであり、日本も国として胎動しはじめる頃だからこそ、こうした歴史的事件が起こることも納得できるのである。

発表は乙巳の変の顛末から曾我入鹿の成敗、曾我家の専横、変の首謀者などの検証に及び、変の首謀者に関して様々な説を紹介され、その上で独自の木村説を提言された。即ち、乙巳の変の首謀者は軽皇

子、皇極天皇、中大兄の三名によるものとの説である。その理由は、蘇我氏は高句麗の將軍蓋蘇文のクーデターを念頭に、皇極天皇に退位を迫り古人大兄の天皇擁立を図ったのである。拒否すれば3人の誅殺も考えられた。なお、鎌足は三者の参謀役・調整役としての役割を果たしたと思われるとのことである。

充実した発表内容であり、古代史に疎い者にも明快なご発表であった。

▼特別講演会 西野 博道氏(茨城大学講師) 演題『西洋と日本の城―比較と検証』

最初に、私達が聞きなれている「カースル」「シャトー」「ブルク」などがすべて城や邸宅を表す言葉であることやタワーやハウスという言葉も同様の類であることを述べられ、さらに著名な城を例にとりて解説が入り大変わかりやすいものであった。

ドイツ、フランス、スペイン、イタリアの代表的な城が非対称型のゲルマン系(例・独ノイシュバンシュタイン城)か左右対照のラテン系

(例・仏シャンボール・シユヴェルニール城)に大別され、英国ではその双方を見ることができるとのことである。

日本の城との関係では戦国期、我国に鉄砲や大砲などが入ってきた時に、当然城づくりの知識や情報も入ったとのこと。信長の安土城天守(例・伊デルモンテ城)など西洋的な形状が見られること、キリシタン大名に築城上手の大名が多いことや小田原城の総構えは西洋の城郭都市に相似するなど説得力のあるご講演であった。



ご講演の西野博道氏
(編・記)

会員活動報告

●村島秀次理事の活動

・令和二年六月六日 学習院大学史学会(教員・学生・OBの研究発表機関)総会にて副委員長に就任(任期は一年)

●高橋正一会員の活動

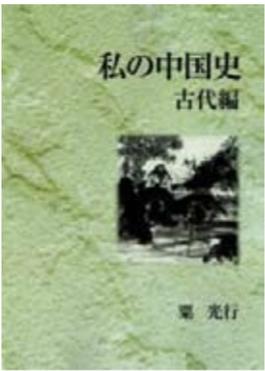
・令和二年八月二十八日 京都観光文化を考える会・都草(NPO法人)の第107回研究発表会(京都ひとまち交流館)で研究発表。演題:「神沢杜口(かんざわとくちう)」と、その主著「翁草」。なお発表内容は、YouTubeでも期間限定で配信された。

●粟光行会員の活動

・この度、書籍「私の中国史」古代編を発刊されました。粟さんは昨年、著作「私の中国史」漢と司馬遷」を書籍化されましたが、新たにこのたび「私の中国史」古代編」を出されました。中国の周王朝、春秋時代、戦国時代を読みやすくまとめ、要所に「私の独り言」という項に作者の思いを込めています。

●中村康男会員(浮世亭寿八さん)の活動

・中村さんが代表となり立ち上げた「楽笑友の会」は青葉区を中心に落語と講演などを行っている。ホームページで「浮世絵で見る東海道五拾三次の旅の魅力」や「山内オンライン寄席」を公開された。九月六日、FMラジオ(84.1MHz)に出演。九月十一日、すずき野地域ケアプラザで五代目宝井琴鶴さんの特別寄席を開催。楽笑友の会ホームページ <http://rakusyoutomo.org/> LINE公式アカウント <https://lin.ee/3SFrxfd>にて、イベント情報や浮世絵などの動画をご覧になれます。



▲書籍「私の中国史」



▲中村康男会員(浮世亭寿八さん)

(編・記)

受贈図書

全国各地の歴史研究団体より、会報等をご恵贈いただきました。紙上より厚くお礼申し上げます。

(令和2年9月30日現在の到着分を掲載いたします。)

- ◇江戸の歴史研究会 「会報江戸」
- NO166～NO168
- ◇愛知歴史研究会 「あいち歴史会誌」
- 第164号～第165号



- ◇しんあいち歴史研究会 「歴史会誌」第79号～号
- ◇大阪歴史懇談会 「会報」第426～428号
- ◇兵庫歴史研究会 「歴史ひろば」
- 第276～278号
- ◇岡山歴史研究会 「兵庫歴史」第36号
- ◇岡山歴史研究会 「歴史おかやま」
- 第28号
- ◇岡倉天心市民研究会 「天心報」第34～35号
- ◇宮城県歴史研究会 「歴史みやぎ」第104号
- ◇神奈川県立図書館 「郷土神奈川」第58号

(木村・記)

会報第82号原稿募集

会報第82号の原稿募集を行いますので、奮ってご応募くださるようお願いいたします。

【一般原稿募集】

自由なテーマでの一般原稿を募集いたします。

▼内容 会員研究、エッセイ、俳句、短歌、詩など

▼字数 会員研究、エッセイは会報4頁以内（1頁は15文字30行4段）。このスペースには題名欄、文字間の空白、写真、表、その他すべてを含みます。研究、エッセイはワードの電子データで投稿ください。投稿フォームはホームページに掲載予定。

俳句5句以内、短歌7首以内、詩30行以内

○原稿締切日 令和3年3月末日

○会員配布日 6月例会日

○原稿提出先

① 221-0834

横浜市神奈川区台町

9-2-501 山本 修司

☎ 045-323-0605

Eメール

yamamomoy223@gmail.com

編集後記

新型コロナウイルスが地球を席巻した感がある。既に死者は100万人を越え、ホワイトハウスをクラスターと化し、超大国の大統領選挙を弄んでいる。歴史に残る大事件である。もう、何が起きてもお驚かない事態になってしまつた。

前号の会報誌80号の準備をしてきた令和二年四月時点では、夏ごろまでにはコロナ騒動から復活するであろうとの期待もあり、本号の特集テーマを「復活」と決めさせていただいた次第である。

しかし、横歴の例会は2月例会から半年以上も開催できませんでした。皆で集まってワイワイ騒ぐのが大好きな当会会員としても大ピンチでありましたが、9月例会以降、なんとか再開できたことは一筋の光を見出し、希望につながる一幕であります。

有効なワクチンの開発に一刻も早

く成功し、来夏の東京オリンピックも何とか開催されてほしいと願っております。

この様に世情不安な状況下ではありませんが、横歴会員の会報誌への執筆意欲は衰えることはなく、無事に81号が出版できたことは誠に喜ばしく、会員の皆様に深く感謝いたしております。

すでにご存じのように、本誌のスタイルが80号から変わりました。会報誌の頁数と出版費用は正比例の関係にあり、会報誌が分厚くなる一方で、出版経費の赤字が増えてきました。編集担当の役割は「できるだけ多くの会員から原稿を集めること」「出版費用を予算内に収める予算管理をすること」であります。この二点はどちらも正しいが相反する、即ち「二律背反」の関係にあります。

そこで、担当する役員が集まって、出版費用を安くするための検討委員会を立ち上げました。結論は「もっと安い印刷屋を探す」でした。さらに、「印刷業界はネット印刷の時代に移行している」でした。たどり着いた先は、海外旅行のパンフレットのデザインを主に取り扱う会社でした。全てネットで発注して、

その次には印刷と製本のみを行う別の会社に発注をするというもので、会報誌もこのシステムに乗るのが最も安上がりであるとの結論に至りました。

近年のデジタル化などの技術革新に伴い、街角の写真屋さんや本屋さんも少なくなっています。横歴の発足以来、30年以上にわたってお世話になってきた牛尾印刷さんにもお別れを告げることになりました。更なる詳細はホームページの横歴「編集室」に記載しました。

ところで、この出版費用は会員の年会費や例会参加費で賄われております。会員数と会報誌の出版予算はこれも比例関係にあります。皆さまにはコロナ騒動に負けることなく、来年度以降も「横歴会員」を続けていただきますよう、そして会報誌への積極的なご投稿を切にお願いする次第であります。

(編・記)

